

所屬隊は江南の一角に上陸した。當時所屬兵團管理部の自動車は未だ揚陸に至らず僅かに數輛の發動自動車に依り廣大なる面積に分散しありし各部隊を指揮連絡しある状態なりしを以て氏は臨時兵團司令部附の運轉手として金山方面に服務する事となつた。氏は勇躍指揮自動車を運轉し屢々敵彈雨飛の下を突破して前線に命令を傳達し或は泥濘甚しき難路に不眠不休一晝夜に亘りて幕僚を輸送する等堅忍不撓克く其の優秀なる操縦技能を發揚して敏活なる作戰指導を容易ならしめた。其の後引續き湖東會戰に参加し迅速なる作戰經過に伴ひ嘉興、湖州を経て洪藍埠にかけ百數十里の躍進を行ふに至つたが此の間氏は克く司令部自動車を操縦して其の卓越せる技能を發揮し從容敵の彈雨を冒して幕僚の業務遂行を容易ならしめた。



十二月八日我が第一線部隊たる牛島末松部隊は南京南方地區に於て激戰を交ゆるに至りしが參謀谷田大佐、同僚ノ脇少佐は第一線部隊の戰鬪を指導せんが爲午後二時溼水を出發し南京南方地區に挺進した。當時前記部隊は先遣せる數箇大隊を以て南京南側の牛首山より將軍山の南側高地に亘る堅壘を攻撃中にして前記兩部隊司令部も第一線大隊の直後に進出しありし爲兩參謀も亦當初より危險を覺悟せねばならなかつた。此の時氏は選ばれて之が塔乘自動車を操縦し勇躍南京南方の東善橋附近に奮進した。此の時右側方盛村北方の高地に蟠踞せる敵は激烈なる側射を浴びせ來り此の附近に於て戰鬪中の部隊も多數の戦死傷者を生ずるに至つた。氏は毫も之に怯まず前進目標たりし高家庄に向ひ一意奮進を續けた。午後四時頃高家庄南方約一千米にさしかゝりし時突如敵の小銃彈飛來自動車のガラス窓を衝き破り氏

は頭部に盲貫銃創を受けた。しかも氏は尙瀕死の重傷に堪えつゝ只管疾走を續け目的地に到着して遂に壯烈なる戦死を遂げた。兩參謀は氏の尊き犠牲に暗涙を浮べつゝ心からなる禮を述べて遺骸を處理しやがて所望の任務を達成し南京攻略成功の一素因をなすに至つた。

氏の妻女は弔問客の慰藉に對し「主人は力一パイ働いて來ると元氣で出て行きましたが何の便りもないので心配して居ました處昨日部隊長様から懇な御弔辭と戦死の有様を知らせて頂きました。お國の爲にお役に立ち何よりです」と健氣にも語つた。養父も日清日露の兩戰役に參加せる歩兵上等兵で勳七等の老勇士であるが一家盡忠報國に燃ゆる赤誠は氏の赫々たる武勳に錦上更に花を添ゆるものと謂ふべきである。あゝ氏の潑刺たる意氣、瀕死の状態に尙血染のハンドルを堅く握りしめ任務に邁進せる其の崇高なる責任觀念の發露は皇軍戰史を飾りて芳名は千古に轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 酒井岩松

#### 天險南口鎮附近に十數倍の敵襲を撃退し中隊の危急を救ふ

氏は長崎縣北高來郡有喜村の人にして亡父を清一母をソキと云ひ大正四年十一月五日に生れ未だ獨身であつた。性温良正順にして責任觀念強く不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和四年三月有喜小學校高等科を卒業し其の後は洋服仕立職を修業し熱心勉勵逐年進歩を認められて居たが昭和十一年三月徵兵として在滿古北口の獨立山砲中隊に入營し同年十月初旬よ



り翌月下旬にかけ熱河省東南部地方の討匪作業に従事して大いに其の手腕を發揮し砲兵上等兵に進級した。北支の風雲險惡となるや間もなく有川部隊に屬し中隊觀測器具班長の榮職を命課せられ七月中旬逸早く北京周邊の警備に就き次で我が軍が斷乎支那軍膽に決するや神速果敢に活躍して歩兵戰團に協力し以て平津地方に蟠踞せる敵の大軍を撃破し七月二十八日より三日間は清河鎮主木橋雷橋臺馬房五堆子の戰團に参加したが附近一般の地形は高粱繁茂し砲兵の



用法極めて困難であつたに拘はらず氏は克く觀測小隊長の意圖を體し彈雨を冒して勇敢に行動し又部下の掌握指揮適切にして適時所望の位置に進出して器材の運用に支障なからしめ以て中隊の戰團能力を大に發揚せしめた。爾後北苑附近の掃蕩戰並に警備に任し常に積極的に觀測小隊長を輔佐した。

所屬部隊は八月十一日以降冀察省山地帯に於て世界戰史上稀に見る山岳戰に参加するに至つたが八月十一日には所屬中隊は坂田支隊に配屬せられ南口鎮の西方約二里に當る吊胡廟附近の敵陣地を奪取すべき目的を以て白洋城方向より密雲方向に向ひ北進し早朝より峻なる山地にさしかかつた。午前十時頃山地に踏み入る事約一里半山岳は愈々峻を加へ單獨歩兵さへも攀登容易ならざる峻坂となつたが俄然優勢なる敵が密雲北側高地の既設陣地に現はれ急激の如き猛射を加へて來た。此の附近の山岳は幾千年となく風雨に晒されて堅岩絶壁屹立し一旦谷に下れば數日の後ならでは再び高地に戻り得ざる程の峻峻さで眞に一夫關に當れば萬夫も開き得ざるの難關たるを思はしめた。所屬中隊長は密雲西側の標高九百米の山上に火砲を引き揚げ直接

歩兵戰團に協力するに決した。此の際將兵の苦心は實に察するに餘りある次第であつたが氏等は萬難を排して火砲器材を分解搬送し遂に所望の陣地に進入を完了した。此處は敵前至近の位置にして中隊は敵の第一線より猛射を受けながら三晝夜の苦戰を續けた。氏は速かに人員器材を區處して適切に觀測小隊長を輔佐し又連日の飢渴疲勞を意とせず觀測所附近の警備に敵狀監視に積極的の行動を以て中隊戰團に貢獻した。十三日夜も兵數名を指揮し砲兵陣地直後の高地に到り後方地區を警戒中午後八時四十分頃約四、五十名の敵部隊我が方に向ひ前進し來り奇襲を企つる徴候を逸早く發見し速かに部下一名をして中隊長に報告せしむると共に此の敵に對し急射撃を加へた。敵亦直ちに應射したが間もなく中隊よりも増援兵到着せるを以て氏は速かに之を區處した。敵は周章狼狽奇襲を斷念し敗走するに至つた。是全く氏が沈着豪膽にして機宜に適せる戰團指揮の賜にして所屬中隊は之に依り危機を免がるを得た。然るに惜しいかな氏は其の夜午後九時頃敵彈の爲頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は誠實にして沈勇の人。今次聖戰に参加するや聖戰の初期に當り東奔西走到る處に大軍を撃破して先づ傲岸不遜の敵の心膽を奪ひて皇軍の威武を中外に宣揚し愈々天險陣地に據る頑敵を攻撃するに至るや殆ど超人的の努力を以て敵前至近に放列を布置し直ちに不眠不休不食難局中の難局に立ちて克く其の任務を完うし且慧眼機敏敵の奇襲を撃退するを得た。是蓋し滅私報國の赤誠に燃え堅忍持久の人にして初めて能くし得べき所眞に軍人の龜鑑と云ふべきである。今や斯かる忠誠有爲の士を喪ふ痛惜禁する能はずと雖も氏の累次の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名を不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)



### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 鈴木龜松

#### 興家の勇士山西省娘子關の天險に奮闘して玉碎す

氏は福島縣河沼郡下谷村の人にして亡父を龜久亡母をツナと云ひ明治三十六年五月十一日に生れ妻ヒデとの間にアイ子、ハツ子及カツ子の三愛子を擧げた。性温厚篤實にして責任觀念に富み不屈不撓の氣概を持つて居た。大正七年三月野澤高等小學校を卒業し其の後は家業を手傳ひ乍ら尾野本農業補習學校へ通學して居たが大正九年一月兩親共に不慮の災難にて死歿し爾後叔父の世話にすがつて同十二年三月同校を卒業翌十三年一月徵兵として高田山砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し翌十四年十一月砲兵一等兵を以て歸休除隊となつた。歸郷後は刻苦精勵遂に分家を創立して家を興し叔父の大恩に報ゆる處があつた。氏は又家業に精勵の傍誠意村の公共團體及在郷軍人分會の爲盡力し尙昭和十年勤務演習召集には良成績を擧げ歩兵上等兵に進級せしめられた。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召貴島部隊星野中隊に編入せられ第三分隊彈藥馬駟者として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月下旬北支へ到着し豐臺保定新樂を経て十月八日漸く滹陀河畔の戰場に追及した。此の間泥濘腰を沒する惡路を晝夜兼行の強行軍を續け人馬の疲勞其の極に達したが氏は克く堅忍持久常に志氣旺盛にして上官の命令指示を體して率先難局に當り又馬匹を愛護する事我が子の如く所屬分隊が何等の故障なく戰線に到達し得たるは實に氏の努力に俟つ所甚大であつた。時恰も石家莊附近の會戰は石家莊西方面に於て戰況活潑となり此の方面より進展を見るに至つたが所屬中隊は十月九日より此の戰闘に参加し城子泊井陘舊關と連日山岳地の戰闘を續け得意の戰闘能力を發揚し第一線歩兵戰闘に適切なる協力を與へた。氏は此の間敵の猛烈なる彈雨を物ともせず率先彈藥を放列陣地に補充し其の戰闘遂行に

毫も遺憾なからしめた。

十月十四日娘子關附近の敵陣地を攻撃するに當りては所屬小隊は獨立小隊として相田砲兵少尉之を指揮し某步兵大隊の戰闘に協力すべき任務を受けた。氏は舊關出發以來不眠不休の行動を續けて居たが此の任務に基き同日午前三時三十分頃娘子關の南方約三千米の高地中腹に陣地を占領した。附近山地は斷崖幽谷錯雜して道らしき道ともなき天險地帯で單



獨歩兵さへも通過困難なる地形であつた。動もすれば踏み外し易き馬の脚取りに心を碎きつつ此の陣地に辿りついたのであつた。やがて朝霧霽れかかる午前六時放々たる砲聲は山又谷の空氣を震はせ乍ら娘子關の西南方高地の敵に對し疾風の猛砲撃を開始した。敵は思ひも寄らぬ我が砲撃に周章狼狽して退却を初めた。小隊は更に戰機に適する前方の稜線に陣地を推進せんと陣地變換中圖らずも至近距離に潜伏せる敵部隊の集中火を受け人馬殊に馬匹の損傷續出し駄載行動を許さざるに至つた。かくと見たる小隊長は臂力を以て分解搬送を命じた。氏は自己の愛馬の斃るるや直ちに彈藥を卸下して

之を前送し更に敵の猛射を浴び乍ら豪膽機敏に砲手に協力して火砲材料を搬送中無念にも敵彈飛來腹部に貫通銃創を受けて戰友數名と枕を並べて壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬小隊は氏等の尊き犠牲に依り其の後當面の敵に多大の損害を與へて我が歩兵部隊の攻撃を容易ならしめ古來難攻不落を誇りし天險娘子關の堅壘を突破するを得た。

氏は最愛の兩親を同時に喪ひ一時は悲嘆の涙に袖の乾く間もなかつたが兩親の魂は我に生き兩親の血肉の延長即ち我な



るを思ひ積極敢爲の勇猛心に燃えつつ前途に洋々たる希望を抱き一家團欒妻子を善導して息まなかつた。今次聖戦に参加するや義を山岳の重きに置き一切の私事に超越し幾多の辛酸を克服し惨烈なる戦況下に毅然として自己の職分を完うし更に進んで戦勝の一途に奮闘して玉碎した。其の崇高なる責任觀念と忠誠壯烈なる行動は正に軍民の鑑とすべきであつた。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ眞に痛惜に堪へずと雖も其の功績は皇軍戦史に輝きて芳名を不朽に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。(MS)

陸軍工兵伍長勳八等功七級 高橋 博

優秀なる無線通信手南方天險地帯に奮闘して職に殞る

氏は神奈川縣高座郡茅ヶ崎の人にして父を歌吉母をハナと云ひ大正三年十月十三日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く又義務心に富み事に當るや熱心勉勵不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和二年三月松田尋常小學校を卒業後神奈川縣奈珂中學校に入學し同校卒業後は株式会社芝浦製作所へ入所し克く業務に精勵し上司同僚の愛敬を受けて居た。昭和十年一月一日徴兵として中野電信聯隊へ入營し克く軍務に勉勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年九月初旬野澤部隊八隊小隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬北支へ到着し直ちに重要通信業務に就いたが氏は不幸にして急性氣管支炎を患ひ釜山兵站病院に入院した。責任觀念燃ゆるが如き氏は日夜脾肉の歎を仰つて居たが十月初旬恢復し同月四日定縣に於て所屬小隊に追及し其の後は谷部隊と行動を共に

し幾多の河川を徒渉し泥濘膝をも没する無道路の地區を前進し馬匹を勞はり助け戦友を勵まし屢々部隊戰鬥司令所要員と共に砲兵陣地附近に進出し敵砲彈雨飛する下に或は敵機空襲下に泰然自若通信手として軍機電報の送受信に任じ卓越せる其の通信能力を發揮し以て重要作戰の指揮連絡を確實ならしめた。



十月下旬に入り所屬小隊は元氏に於て各種動物に依る駄載編成に改編せられたが氏は克く其の改編に盡力し同月二十八日には昔陽支隊に配屬せられ其の前衛の後尾に續行し正太線南方の地區を元氏——贊皇——内長城線——昔陽道を前進した。此の支隊は進路上の兵匪を掃蕩しつゝ正太線方面の敵の側背を脅威し以て正太線沿道を前進する主力方面の作戰を容易ならしむべき任務を課せられて居た。支隊の進路は殆ど人畜未踏の地と云ふも過言ならずして前進するに従ひ山岳愈々險はしく海拔幾千尺の峻峯雲表に聳へて進路に横はり一山を超えては千仞の谷に下り身の毛もよだつ斷崖右に左に起伏彎曲千變極りなき天險を踏破し乍ら隨時隨所に正確機敏なる通信連絡を全うし十一月二日西界都と云ふ小邑に到着した。此

の時南方約一里に當る黃岩底部落の西北側高地に有力なる敵部隊ありとの情報に接し前衛司令官は直ちに之が攻撃命令を下し氏等の小隊は黃岩底部落に進出し同地に遮蔽し在るべき事を命ぜられた。依て小隊は西界都を出發し地形地物を利用して所命部落に到着し圍壁に遮蔽中午後四時頃支隊前面の敵は退却の徵候明かなるにも拘はらず氏等の待機位置には刻一刻と猛烈なる敵砲彈飛來し小隊内には死傷相次で生ずるに至つた。小隊長は不審に思ひ彈痕其の他の徵候に依り調査せ



しに圖らずも小隊を猛射する敵は左側背の高地に占據しあるを知つた。此の敵は正午頃我が前衛に驅逐せられしもので密かに此の山に潛伏し好機のを待つて居たのであつた。小隊長は憤然として先づ通信器材を安全位置に移し敢然此の敵に對し應戦した。敵は優勢を恃み益々迫撃砲の猛射を浴びせると共に逆襲に轉じ來り慘憺たる苦戦となつた。併し全員克く團結して奮闘を続け遂に數百名の敵に多大の損害を與へて之を撃退し午後六時過ぎ贊皇城に入城するを得た。此の戦闘間氏は最も勇敢に奮戦中無念にも迫撃砲彈の爲頸部及背部に爆彈創を受け野戰病院に收容され手厚き治療を受けたが肺部に内出血を來し十一月十六日陽泉に於て惜しくも護國の華と散つた。

氏は陣中寸暇を利用して戦場の光景敗戦國住民の心情等を詳細家人に通報し又滅私報國の決意を示し來る等氏が高邁なる魂の躍動を其の雄渾なる健筆に依て面目を躍如せしめて居た。而して氏が卓越せる通信技術は天晴れ軍の命脈たる通信連絡に貢獻せる所甚大にして正に不朽の功績と謂ふべきである。然るに東部山西作戦の初期に當り惜しくも兇彈の爲此の有爲忠誠の士を喪ひしは洵に痛悼哀情禁じ難き所である。併し氏の功績は部隊功績と共に千載に亘り皇軍戰史を飾りて其の芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 山口 義 雄

輜重大敵と遭遇輕機を以て奮戦群敵を殲して遂に小寨村の華と散る

氏は東京府八王子市八幡町の人にして父を早太郎亡母をリセと云ひ明治三十三年八月二十一日に生れ妻トヨとの間に安太郎・昭治及成子の三子を擧げた。資性放膽にして事に臨み勇敢所謂親分肌にして自ら清貧に甘んじつゝ他人の困るのを見ては居られぬ性分であつた。家業には細心にして積極勤勉責任觀念旺盛であつた。大正二年三月八王子市第四尋常小學校を卒業其の後大工職の徒弟となり大正九年十二月徴兵として千葉鐵道聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優良にして



在隊間精勳章を受くること三回同十一年八月上等兵に進級し同年十一月善行證書及木工長適任證書を附與せられて輝かしく満期除隊した。除隊後は大工職として同組合員中に重きを爲してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月大島部隊に應召兵站監部自動車中隊矢島隊に編入第一小隊豫備員として同月二十九日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後所屬中隊は八月中は豊臺北平南口北柳樹村附近次で九月中旬迄は南口懷來宜化附近の軍需品補給業務に従事せしが此の間氏は惡路險峻と過度の使用による衰損せる車輛の修復手入保存に優秀の技能を發揮し晝夜兼行不眠不休の努力を續け自動車輜重

の本領發揮に支障なからしめ中隊の任務達成を容易ならしめた。九月二十一日所屬隊は宜化を出發同日夕蔚縣に到着し彈藥糧秣を積載して二十四日同地出發同日夕長城線附近靈邱南方八里小寨村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は同村に露營した。然るに此の頃第一線は刻々急を告げしを以て靈邱より新銳の歩兵を前線に増加の爲中隊は至急歸還の上其の兵力を輸送し來るべき任務を受け二十五日兵站自動車新庄部隊



本部矢島隊本部第一、第二、第三小隊修理班の行軍序列を以て午前九時小寨村を出發靈邱に向つた。此の日前夜來の豪雨は全く霽れて朝日は輝き寒氣は身に沁む朝であつた。露營地より進むこと二軒、時は午前九時十五分前日通過の際は何等敵影を見ざりし此の附近に敵は昨夜の雨を衝いて遠く後方に迂回せしものと見え正規軍一個旅團突如として現はれ我を攻撃し來り我は應戰之と激戰を開始するに至つた。敵は迫撃砲、重輕機關銃を有する大軍にして之に對し我は新庄中佐以下僅かに百七十六名其の大部分は戰鬪力乏しき輜重兵であり加之敵は山岳丘阜等地の利を占めて前方及兩側方の三方面より攻撃し來り我は全く敵の重圍に陥るに至つた。氏は第一小隊自衛隊輕機關銃射手として部隊の先頭にあり第一線となりて午前九時十五分より戰鬪を開始し猛烈なる敵彈下沈着剛膽其の火力を最高度に發揚して群がる敵に猛烈なる射彈を浴びせ逐次敵を噓し既に其の數甚大に上つた。かくして奮戰中氏は右脚に負傷せるも之に屈せず自ら應急手當を爲して尙も勇戰猛射を續けしが午前十時四十分又もや敵の一彈胸部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰により約三時間半に亘り寡兵克く衆敵を支へて其の輜重車輛を守護し午後零時四十分此の包圍線を突破して三浦部隊に合することを得た。

夫れ後方兵站の業務たる假令良路あるも容易ならざるに北支就中山西戰線に至りては惡路險難加ふるに皇軍破竹の進撃に伴ふ晝夜兼行の追隨しかも其の後方敗殘兵の出沒等其の辛苦や想察するに餘ありし所である。然るに氏は素と穩に見る精勤の人かゝる至難の戰場に臨むも終始一貫粉骨碎身有ゆる辛酸を克服し近代輜重の全能を發揮せしめて遺憾なかつた。實に我が第一線快勝の裏に此の隠れたる功績は見逃すべからざるものである。しかも敵と遭遇するや大敵たりとも懼れず剛膽沈着率先奮闘傷つくも屈せず斃るゝまで輜重車輛を守護せし如きは旺盛なる責任觀念の發露にして是畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。聖戰中途山西の華と散りしは痛惜に堪へざるも其の拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其芳

名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 近藤市太郎

#### 忠勇なる作業手砲彈下に作業を續行し遂に江南の華と散る

氏は三重縣一志郡香良洲町の人にして養父を市郎左衛門養母をはまよと云ひ明治四十四年五月二十六日に生れ妻きみ子との間に長男浩平を擧げた。性温良眞摯にして孝心深く妻子を善導して一家團圓の柱石となり又一般世人に對しても情誼に厚く特に親切心及義侠心旺盛にして諸人の愛敬を受け事に従ふや忠實熱誠倦む事を知らなかつた。大正十四年三月郷里の高等小學校を卒業後大阪商業學校へ入學して三ヶ年の課程を修了し其の後は家庭に在りて家業を扶けて居た。昭和七年一月徵兵として京都工兵大隊へ入營克く軍務に精勵して良成績を擧げ翌八年十一月善行證書を授與せられ工兵上等兵を以て歸除隊となつた。同十一年八月勤務演習に應召中成績優秀にして工兵科下士官適任證書を附與せられた。除隊後は香良洲町役場書記を奉職し又同町青年學校指導員を囑託せられ諸事好成績を擧げ町内の信望自づから一身に蒐まつて居た。

支那事變起るや昭和十二年九月應召吉野部隊北村中隊に屬し勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬上海戰場に到着し所屬中隊は九月下旬より陳家宅附近の軍路構築作業に従事した。當時戰場は江南特有の霖雨降り續き道路泥濘膝を沒し諸兵種の行動は言語に絶する程困難を極めて居た。氏は克く上官の命に従ひ殆ど不眠不休の努力を以て軍路の工事に



貢献し以て衆兵に範を垂れた。

顧家宅（大場鎮北方）附近の戦闘を開始せらるるや所屬中隊は十月三日より顧家宅南側の軍路構築及革陸宅西南側の架橋並に軍砲兵の陣地進入路構築等の諸作業に従事したが其の間敵は晝夜間断なく小銃機關銃並に迫撃砲を亂射亂撃し常に危険界に爆されて居た。されば第一線部隊の大部は散兵壕に據り交通は交通壕に依り止むなく地上を通過する時は努めて

低姿勢を採り匍行するか或は早駆けにて一進一止躍進するのであるがそれさへ尙危険であつた。斯かる状況下に氏等は高き姿勢のまま材料を蒐收運搬し或は工具を振り上げて命を的に作業を繼續するのであつた。氏は此の間一意上官の命に従ひ生死を超越し黙々として作業に邁進し以て所屬中隊の迅速なる作業完成に甚大なる貢献を與へた。



（俗稱たこ）製作の爲樹木を伐採中であつた。日は既に没したれど敵の砲撃は依然として歇まず氏の身邊にも屢々落下炸裂して居たが作業完成に餘念なき氏は毫も危険を顧みず鋸の齒音によどもなかつた。午後六時十五分空気を切つて飛來せる一砲弾は轟然として氏の脚下に落下爆發し氏は其の爆煙の中に打倒された。同時に「やられた！」の聲に战友等駭寄りて應急手當を施した。負傷部は下腹部の砲弾破片創であつた。中隊長並に小隊長も續いて氏を見舞へば氣丈の氏は尙意

十月十三日所屬中隊は更に吳淞クリークの上流に在る唐橋附近に架橋を命ぜられたが此處は敵前至近の場所にて敵の迫撃砲弾は間断なく飛來して居た。氏は此の際作業場の後方約二百米に於て築頭

識明瞭で中隊長の手を握り戦場に止まることを嘆願した。小隊長は暗涙に咽びつつ之を慰め無理に野戦病院へ後送した。手術の経過は良好であつたが十一月十五日傷狀革まり遂に護國の華と散つた。

氏は至誠一貫の人今次聖戦に参加するや最も艱軟慘烈を極めし上海戦線に活躍し黙々として幾多の辛酸に堪へ毅然として職責に邁進し克く犠牲的精神を發揮して皇軍工兵の本領を全うした。寔に是一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や斯かる忠勇義烈の氏を喪ふ痛悼措く能はずと雖も氏の功績は所屬中隊の赫々たる武勳と共に皇軍戦史に輝きて芳名を後世に

傳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。氏は戦死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。（MS）

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 新井 中

#### 雨下する敵彈下に勇敢機敏衛河の偵察を果して惜しくも敵彈に斃る

氏は茨城縣眞壁郡村田村の人にして亡父を十郎母を鶴見とよと云ひ大正四年三月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑にして剛毅果斷しかも不屈不撓勤勉の人であつた。昭和三年三月村田尋常小學校を卒業其の後實業に従事し同九年五月より入營迄東京市瀧野川小島ゼンマイ工場に勤務し昭和十一年一月徴兵として水戸工兵聯隊に入營爾來軍務に精勵同年七月には第一回精勳章を附與せられ又翌十二年歩工兵聯合演習には敵前漕渡の際に於ける行動業の模範たるの故を以て褒賞休暇を附與せられた。

支那事變起るや岩倉部隊第一中隊に屬し昭和十二年八月二十八日勇躍征途に就いた。所屬隊は北支到着後京漢鐵道沿線



を前進したが道路不良刺へ敵の爲到る所破壊せられ多数の河川橋梁は悉く落され之が爲工兵隊の作業を要するもの頗る多かつた。従つて此の間氏は屢々晝夜兼行奮闘努力大小幾多の道路を修復し架橋作業に任ずること六回にも及び其の間敵敗殘兵と戦闘を交ふる事數回奮戦活躍克く所命の任務を遂行して中隊の任務達成を容易ならしめ逐次南進して十月末彰徳附近に到達した。而して十一月四日彰徳城の攻撃開始せらるるや其の城壁は高く城門は堅く閉され城壁上よりする各種火器の威力は猛烈を極め歩兵獨力の突入は到底至難であつた。當日氏の所屬小隊は森田歩兵部隊第一大隊に配屬せられ城門爆破の爲午前零時より行動を起し彈雨の下之が準備に着手し午前六時見事突撃路を開設し第一線歩兵をして突撃することを得せしめた。此の間に於ける氏等工兵の活躍は洵に目覺しきものであつた。



十一月二十五日所屬中隊は衛河の河川偵察の爲午前九時大名南方約二里半馬家莊附近該河左岸に到達した。衛河は河幅約百米敵は其の對岸龍王廟北端に堅固なる陣地を占領し中隊が偵察行動を開始するや忽ち小銃機關銃の猛射を浴びて來た。之が爲中隊は第一小隊

を河岸に配置し河を隔てて之と應戦せしめ我が偵察行動を掩護せしめた。此の際氏は其の掩護下に猛火の下之を冒して勇敢機敏に活躍し各分擔せる所命の偵察任務を強行し正午頃には完全に之を遂行することを得た。然るに其の任を終つて歸還せんとせる際敵の一彈は氏の左腕を貫通し他の一彈は左側胸部に貫貫し其の場に倒れて再び起つ能はず早速戰友に介抱收容せられて大名野戰病院に入院手厚き醫療を受けしが其の甲斐もなく十二月二日午前三時遂に惜しくも護國の華と散つた

のであつた。しかし氏の奮闘以て偵察せる結果は部隊爾後の戦闘指導に貢獻せる所甚大であつた。

氏や素と精勤の人其の戦陣に臨むや道路の補修に橋梁の架設に將た又城門の破壊に不屈不撓の奮闘を續け遺憾なく工兵の本領を發揮し皇軍破竹の進撃を容易ならしめたる功績は正に甚大であつた。是畢竟盡忠至誠の發露と謂ふべく聖戰中途にして北支の華と散りしは洵に痛惜に堪へざる所である。しかし氏が終始奮闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金瑞勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍衛生伍長勳八等功七級 岩下卯之助

#### 決死職責を全うし重傷を負ふも尙職責を顧念して崑崙に散華す

氏は長野縣小縣郡青木村の人にして父を己之作母をむめと云ひ大正四年六月三日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして孝心最も深く且友情に富み諸人の愛敬を受け又義務心旺盛にして不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月青木小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ乍ら青年訓練所へ通ひ昭和九年三月所定の課程を修了同十一年三月徴兵として關東軍歩兵聯隊へ入營し衛生兵としての教育を受け其の後洮南陸軍病院へ編入替となり翌十二年三月衛生上等兵に進級奉天陸軍病院に勤務を命ぜられ熱誠眞摯長成績を擧げ上下の深き信頼を受けて居た。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月奉天陸軍病院より洮南陸軍病院へ歸還を命ぜられ洮南に來て見れば戰友等は既



に本多部隊の隷下崎田救護班に編入せられ外長城戦線に出動せる後であつた。氏は矢も楯もたまらず急ぎ武装を整へ大同の所屬班へ驅けつけた。茲に於て第二半部要員として歩兵隊配屬となり笠原大尉の指揮下に九月二十四日大同を出發し大同の東南方渾源に向ひ前進したが山岳重疊飲料水乏しく頗る難行軍であつたに拘はらず氏は常に志氣旺盛克く自己の職責を全うし二十八日には班主力と共に狼峪に前進して救護所を開設し傷者の收容看護に任じた。其の間氏は誠實勇敢泪ぐま

しき努力を以て同班の任務遂行に貢献せる所甚大であつた。翌二十九日には若山中尉の指揮下に第二半部要員として恒山山脈の嶮を超え三十日下加越に到着し同地方面の歩兵隊に配屬され傷病患者を收容して崞縣に向ひ前進を續けた。



崞縣附近の敵陣地は城壁は勿論附近の諸部落を利用し約半歳の日子を費やし堅固なる陣地を構築し其の精銳を誇る山西軍一萬二千名に共産軍數千名を加へて傲岸不遜周圍を睥睨し附近の住民も亦抗日意識に燃えきつて居た。我が軍は十月四日よりこの敵陣地に對する攻撃準備に着手し氏の所屬班も縣城北側の所命地區に救護所を開設し直ちに傷者の收容救護に任じた。この附近の地形は平坦開闊にして終始熾烈なる敵火に暴露し刺へ敵は優勢なる兵力を待み屢々果敢なる出撃を行ふ等我が第一線部隊の損害は逐次増加するに至つた。斯くて十月七日には崞縣城攻撃の最高潮に達し城壁は頗る堅牢にして我が砲撃も爆撃も殆ど其の威力を發揚するに至らず肉弾となりて肉薄せる我が第一線諸部隊は死傷者續出するに至つた。氏は衛生兵三名補助擔架兵數名を指揮し敵彈雨飛の下を決死躍進して城壁附近に近づき晝夜

兼行重傷者を收容し擔架を以て救護所へ運搬中午前十一時三十分頃敵の迫撃砲弾は氏等の運搬擔架の右後方に轟然落下炸裂し氏は其の砲弾破片を頭部胸部及腹部等に受け同行せし山形軍醫中尉以下七名も共に死傷するに至つた。氏は受傷直後意識尙明瞭にして毫も苦痛を訴へず屢々自己の收容せる傷者の安否を尋ね並み居る衛生部員をして暗涙に咽ばせた。氏が瀕死の重傷と見たる内務班長鈴軍曹は自己の血液二百瓦を提供して氏に輸血を施したが脈搏次第に衰へ午後二時眠るが如く護國の華と散つた。

氏は至誠仁愛の人しかも軍隊及病院勤務に依り益々其の美德を長成し衛生兵として衆の模範たるものであつた。今次聖戰に参加するや山岳地帯に行動し黙々として自己の職分に邁進し而して北部山西省の堅壘崞縣の血戰に方り率先身を挺して第一線將兵の傷者を收容し不幸瀕死の重傷を受くると雖も尙も負傷者の身上を顧念して息まず。あゝその忠誠！眞に神の姿の如く清かつた。寔に是皇軍衛生兵の鑑と謂ふべきである。今や其の壯容慈顔に接すべくもなく痛恨哀悼の情を禁じ得ざるも氏の尊き功績は皇軍衛生戰史に輝きて其の芳名を後世に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日衛生兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍衛生伍長勳八等功七級 丸田芳雄

#### 勇敢決死の衛生兵西保障の激戦に玉碎す

氏は長野縣小縣郡浦里村の人にして父を惇母をきわと云ひ大正四年十一月二十三日に生まれまだ獨身であつた。資性温厚



にして忠實親切心に富み上下の敬愛を受けて居た。昭和五年三月浦里尋常小學校を卒業し續いて家業手傳の傍青年學校に通ひ其の課程を修了した。昭和十一年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營し日夜軍務に精勵し其の成績優秀にして十二年一月衛生上等兵を命ぜられ益々精勵しつゝあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月遼山部隊に編入せられ平間中隊に屬して勇躍征途に就いた。北支到着後所屬部隊は豪雨



泥濘飢渴を冒して難行軍を續け九月十四日永定河對岸の敵陣を突破し更に敵を追撃して連日連夜抗戰の敵を一蹴し或は難路の強行軍を以てし二十一日夜半大冊河の敵前渡河を敢行して黃村附近の堅壘を力攻し激戰の後敵を撃破し保定方向に之を急追し二十四日には保定に入城し爾後の攻撃に備へた。所屬部隊は九月二十九日再び前進を起し十月八日滹沱河畔の敵陣を突破し續いて石家莊元氏順德及磁縣を経て漳河々畔に敵を壓迫した。此の間氏は有ゆる危険困難を克服し戰闘激烈にして我が死傷續出するや熾烈なる敵火の下に機を失せず適切なる手當を施し其の勇敢なる行動親切叮嚀なる初療は一般の

歎賞する所であつて一同をして益々戰果の擴大に決死奮闘せしめ中隊の戰勝に貢獻する所甚大であつた。

十月二十日所屬部隊は漳河南岸の敵陣地攻撃の爲前進した。此の日先遣の田鎮大隊は對岸の要地たる西保障を奪取して居たが優勢なる敵は我を劣勢と侮りてか小嶺にも攻勢に轉じ來り其の銃砲火は甚だ熾烈にして我は惡戰苦闘の後漸く之を撃退し得たのであつたが敵は執拗にも夜に入りて尙再三攻撃を繰返して來た。當時所屬大隊は村落を占領して交戦し所屬

中隊は第一線となつて激戰を續けたのであつた。毎次撃退せられたる敵は二十一日午前四時三十分頃に至り新手を加へて夜間強襲の舉に出で近迫戰は演出せられ壯烈凄慘の光景を呈し此所彼所に「やられた！残念！」などの悲惨なる聲は暗を通して耳をついた。勇敢なる氏は「負傷者は何處だ」と捜し求めて手當を施し多數の救護に奔走して居たが屋上に在つて敵に猛火を集中し熾滅的大打撃を與へつゝあつた輕機銃の永田分隊長及代田射手の兩名は遂に重傷を負ふた。氏は素早く屋上に昇り敵弾は雨や霰と飛來し全く身の置き所もなき状況であつたに拘らず勇猛大膽にも兩者に近寄り副木の手當を爲さんとせる利那十米に近接しある敵自動火器の銃彈數發を頭部に受け壯烈なる戰死を遂げた。併し此の時に於ける所屬隊將兵の奮戦力闘と氏等の尊き犠牲とに依りさしもの頑敵も戰場に累々たる屍體を遺棄し敗退するに至つた。

氏は衛生兵として極めて適任者であつたが今次聖戰に参加するや中隊の生命を托せられたる覺悟を堅持し其の剛勇は毫も戰闘兵に遜色なく彈雨の中に身を躍らして戰線を馳驅し死傷者を索め速かに手當を施し生命を君國に獻げて救助の天職に忠實勇敢なりしは「今は彈が餘りひどいから少し待て」の制止も全く耳にせざりしが如き眞に斃れても尙已まざるの氣魄の顯現であつて衛生兵の模範と謂ふべきである。斯かる上下の信頼厚き前途有爲の士を喪ひたるは洵に愛惜の情禁じ得ない所である。然りと雖も氏の樹てたる拔群の功績は皇軍衛生戰史に輝き芳名は千古に謳はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日衛生伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)



## 陸軍衛生伍長勳八等功七級 足立貞雄

## 勇敢なる衛生兵幾多傷者を救ひ馬落坡の激戦に其の職に殉ず

氏は兵庫縣多可郡杉原谷村の人にして亡父を策二母をことと云ひ大正四年七月二十三日生れで未だ獨身であつた。資性温順而も動作敏活にして責任觀念強く又親に孝兄弟睦しく人にも親切にして近隣の風評良好であつた。昭和四年三月清島高等小學校を卒業し其の後は家庭に在つて家業に従事する傍實業補習學校を経て青年訓練所に入り十年十二月優等の成績を以て其の課程を終了した。昭和十一年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營し熱心精勵其の成績優良にして二月十日衛生二等兵を命ぜられ七月十日同一等兵に進級して精勵章を附與せられ十二月衛生上等兵に進み翌十二年七月九日善行證書を附與せられた。而して同日歸休除隊の所支那事變勃發し引き續き在營し同月廿九日沼田部隊に編入せられ米澤中隊の衛生兵として勇躍征途に就いた。かくて所屬部隊は北支に上陸するや連日豪雨泥濘の難行軍を續け八月二十七日には四黨口九月二日には三間房附近の敵を撃退して陳官屯に達し爾後同地の警備に任じて居た。氏は之等の行動間日夜將兵の保健衛生に全幅の注意を拂ひ自己の危険勞苦を忘れて救急治療に任じた。次で九月九日夜氏の中隊は所屬部隊の第一線となり丁莊の敵陣地を夜襲した。此の時氏は中隊長に従つて前進し中隊が十日午前四時頃敵陣地に突入するや忽ち戦死三名負傷六名を生じた。氏は敵彈雨飛の中に在つて機を失せず之等傷者に應急手当を施し而も氏の伎倆は優秀にして腹部貫通の重傷者さへも巧に救急處置を施して遺憾なかつた。其の後九月十九日午後三時所屬部隊は雪官屯を出發し豆店の敵陣地に向つて前進した。此の時氏の中隊は大隊の第一線となり勇猛果敢に攻撃前進したが敵前百米に達せし頃負傷者相次で生じた。氏は雨下する敵火を冒して勇敢機敏に戦線を疾驅して傷者を救急し其の涙ぐましさ献身的活躍は中隊一同の感激せし所であつた。

あつた。

九月二十一日所屬部隊は馬廠附近敵最右翼の堅陣たる馬落坡を攻撃する事となり米澤中隊は尖兵中隊となつて午後九時豆店を出發し途中敵の監視部隊を驅逐し二十二日午前三時半頃敵陣地前百五十米に在る大水壕の線に到着した。此の時夢より覺めし敵は一齊に我を目掛けて猛射を浴びせて來た。併し第一線部隊は更に怯まず直ちに大水壕を越へて一舉敵の陣地に突入し未だ明けやらぬ暗闇の中に奮戦格闘之を占領し續いて敵を猛追して其の第二陣地に迫つたが第一陣地夜襲の爲中隊には實に戦死二十八名負傷三十五名に達する多數の犠牲者を生じた。氏は初



年兵衛生兵を指揮し暗黒の中に敵彈尙飛來し彼我の死傷者累々たる間を走り廻つて我が傷者を捜し索め機敏に應急處置を施し衛生隊の來着と共に之に傷者を引渡すや再び第一線に追及した。此の時中隊は敵の第二陣地前に於て激戦中にして氏は直ちに最も戦鬪激烈なる第二小隊正面に到り傷者に手当を施し居る最中惜しくも陰囊部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂げた。

氏戦死後氏の小隊長岡田少尉より氏の父へ宛てた書簡の中に「足立君は上陸第一歩より何人にも優る進取的積極性を以て絶えず將兵の看護に當り一身を忘れて碎勵の誠を竭され候(中略)小官は馬廠夜襲中無念大腿部に貫通銃創を受け歩行全く不可能となりし際君は雨飛する敵彈を物ともせず直ちに手當介抱をして呉れたが凡そ隊内の傷つける者又は斃れし者にして君の手にかゝらぬ者とはなく時に神技とさへ感歎したる次第に有之候」とあり如何に氏が大膽且勇敢に献身的活



躍を爲したかが親はるゝと共に氏の機敏なる活躍に依り一命を取り留めたる勇士は蓋し渺からざるものであつた事が偲ばるゝ次第である。斯くの如きは全く自己の職責任務の爲には一身を捧げ斃れて尙息まざる旺盛なる責任觀念の發露にして畢竟盡忠至誠の顯現と謂うべきである。參戰幾日ならずして斯かる忠烈勇敢の衛生部員を喪ひし事は惜しみて尙餘りあるも氏が一身を犠牲に幾多勇士の尊き生命を救つた赫々の功績は千載に亘り皇軍衛生史を飾り芳名は千古に轟はれ其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るることであらう。

氏は戦死の日衛生伍長に進められ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(OM)

### 陸軍衛生伍長勳八等功七級 安東仙之助

#### 衛生兵馬廩攻撃に身を忘れて傷者を介抱斃るるも之を庇護す

氏は岡山縣英田郡江見町の人にして父を英雄亡母を富石代と云ひ大正三年三月廿四日に生れ未だ獨身であつた。資性明朗にして剛膽責任觀念強く犠牲的精神の旺盛なる人であつた。大正十五年三月江見尋常小學校を卒業し引續き岡山縣立津山中學校に入り昭和三年十月家事の都合に依り第三學年にて中途退學した。同十年一月徵兵として岡山歩兵聯隊に入營七月岡山衛戍病院衛生一等兵を命ぜられ學術の成績優秀にして同年十二月には上等兵に進級し且精勤章を附與せられ翌十一年五月臨時支那駐屯歩兵聯隊第二機關銃隊に轉屬緩中に駐屯同年八月天津に移駐し同十二年三月内地歸還滿期除隊した。支那事變起るや昭和十二年七月應召赤柴部隊第一中隊に編入中隊衛生兵として八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着するや泥濘惡路の難行軍を續け八月下旬靜海縣附近の戰闘に際しては敵火の下泥濘の中に活躍して幾多の戦傷者を

手當收容し次で九月三日唐官屯附近の戰闘に際しては族團豫備隊内にありて終始活躍し克く其の任務を完うした。

九月七日より馬廩附近の戰闘開始せらるゝや同月九日所屬中隊は第一線として寺院高地にある第四中隊と交代を命ぜられ中隊は敵の銃砲弾を冒して薄暮漸く寺院高地に達し第四中隊と交代を完了し大隊の左第一線として馬廩川右岸高地に於て翌十日總攻撃の際部隊の渡河掩護に任ずべく徹宵敵情地形の偵察に奮闘努力した。氏は當時中隊の指揮機關内にありて



終夜傷病者の手當看護に活躍し翌十日天明となるや馬廩川對岸至近の距離よりする敵の小銃機關銃就中迫撃砲彈の集中頗る猛烈を極め起つ者必ず斃され僅かに掩蓋下に於てのみ無事なるを得るが如き状態なりしが此の間氏は續出する戦傷者の手當看護に頗る多忙を極むるに至りしも克く其の任務に活躍して居た。然るに午前十時過ぎ藤間一等兵戦傷を受けしを知るや敵の集中火の下聊かの躊躇もなく篠つく雨の如き敵弾を冒して直ちに駆け寄り之に繃帯を施しつゝある時恰も午前十時三十分敵の迫撃砲彈は氏等の身邊に炸裂し氏は後頭部に其の破片創を受け藤間一等兵を掩ふが如く其の上に斃れし爲藤

間一等兵は微傷だに負はざりしも氏は竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。小野少尉當時を回想して「この光景を見た將士で泣かぬ者は一人もありませんでした。氏の超人的な看護振がどれ丈我々を護りつゞけて呉れたことでせう」と暗然として語つてゐた。

氏の戦場に臨むや環境非衛生の地に於てしかも皇軍破竹の進撃、天候道路の不良及糧食の缺乏等悉く兵員の過勞を來し



其の保健に及ぼす影響甚大なりしに拘はらず氏は不屈不撓身の疲勞を忘れて唯々中隊衛生成績の向上に全力を傾倒して遺憾なかりしのみならず其の戦陣に立つや彈雨の下毫も躊躇せず身の危険を超越して只管迅速なる初療に努め將兵等しく感謝措かざる所であつた。殊に其の身斃れたる瞬間尙且傷者を掩ひたる等神の如き行爲は實に是平素堅持せる崇高なる犠牲的精神の發露にして眞に衛生兵の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして馬廐河呼の華と散りしは愛惜盡きざるも殉職以て樹てたる拔群の功績は千載に亘り皇軍衛生史を飾り其の芳名は萬世に衛生兵の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日衛生伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍輜重兵伍長勳八等功七級 泉 鐵太郎

#### 輜重敵の大軍と會し其の包圍下に沈着奮戰遂に小寨村の華と散る

氏は秋田縣秋田郡船川港町の人にして父を宇助母をチエと云ひ明治三十六年九月十九日に生れ妻は離別せるも一子玲子がある。資性濃厚篤實しかも事に臨み沈着勇敢にして業務には熱心勤勉であつた。大正七年三月船川高等小學校を卒業し同八年四月縣立秋田工業學校に入校翌九年十月病氣の爲退學し其の後は父を扶けて家業たる旅館業に従事し且自動車運轉手を勤めてゐた。大正十二年十二月徴兵として弘前輜重兵大隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして十三年八月には第一回に精勳章を附與せられ同年十二月には上等兵に進級し同十四年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月大島部隊に應召兵站監部自動車中隊矢島隊に編入第一小隊長車の運轉助手として同月二十七日勇躍征途に就いた。北支到着後所屬中隊は八月には豐臺、北平、南口、北柳樹附近九月には南口、懷來、宣化附近

の軍需品補給業務に従事せしが此の間氏は悪路險峻と過度の使用による車輛衰損に留意し殆ど不眠不休の活躍を續けて車輛の手入保修に全力を傾注し以て中隊の任務達成を容易ならしめた。



九月二十一日所屬隊は宣化を出發同日夕蔚縣着彈藥糧秣を積載し二十四日同地出發同日夕長城線附近靈邱南方八里小寨村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は同村に露營した。然るに此の頃第一線は刻々急を告げしを以て靈邱より新銳の歩兵を前線に増加の爲所屬隊は至急歸還の上其の兵力を輸送し來るべき任務を受け二十五日兵站自動車新庄部隊本部矢島隊本部第一第二第三小隊修理班の行軍序列を以て午前九時小寨村を出發靈邱に向つた。此の日前夜來の豪雨は全く霽れて朝日は輝き寒氣は身に沁む朝であつた。露營地より進むこと二軒。時は午前九時十五分。前日通過の際は何等敵影を見ざりし此の附近に敵は昨夜の雨を衝いて遠く後方に迂回せしものと見え正規軍一個旅團突如として現はれ我を攻撃して來た。我は直ちに應戰之と激戰を開始するに至つた。敵は迫撃砲重機關銃を有する大軍にして之に對し我は新庄中佐以下僅かに百七十六名此の内大部分は輜重兵にして十分なる裝備を有せず加之敵は山岳丘阜等地の利を占めて前方兩側方の三方より攻撃し來り我は全く敵の重圍に陥るに至つた。氏は先頭の自衛隊が戦闘開始後間もなく小隊長より傳令として之との連絡を命ぜらるるや勇躍任に就き彈雨の下を勇敢に前進して自衛隊の許に至り小隊長命令を傳達し然る後同自衛隊に加はり敵を攻撃中第四分隊長佐藤伍長戰死を遂ぐるや直ちに其の代理となりて該分隊を指揮し敵が其の優勢を待みて我が左翼



に向ひ屢々反復せる攻撃を拒止し小隊の左翼を死守して奮戦大いに努めて居たが午前十一時頃無念腹部に首貫銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦により約三時間半に亘り寡兵克く衆敵を支へ其の輜重車輛を守護し午後零時四十分此の包圍線を突破して三浦部隊に合することを得たのであつた。

夫れ後方兵站の業務たる假令良路あるも容易ならざるに北支就中山西戦線に至りては悪路險難加ふるに皇軍破竹の進撃に伴ふ晝夜兼行の追隨しかも其の後方敗殘兵の出沒等其の辛苦や想察するに餘ありし所である。然るに氏は素と精勤の人かかる戦場に臨むも終始一貫粉砕身有ゆる辛酸を克服し近代輜重の全能を發揮せしめて遺憾なかつた。實に我が第一線快勝の裏に隠れたる此の功績は没すべからざるものである。しかも敵と遭遇するや剛膽沈着大敵たりとも懼れず指揮的確驚るるまで我が左翼を死守し輜重車を守護せし如きは旺盛なる責任觀念の發露にして是畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。聖戦中途山西の華と散りしは眞に痛惜忍び難きも其の拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日輜重兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍輜重兵伍長勳八等功七級 香山清實

#### 大行李長單身敵の敗殘兵と戦ひ大行李を守護して黃村の華と散る

氏は長野縣下伊那郡松尾村の人にして亡父を兼好母をいんと云ひ大正四年七月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温

厚篤實しかも不屈不撓の氣概を有し責任觀念旺盛にして事に臨み沈着勇敢であつた。昭和五年三月松尾高等小學校を卒業し引續き縣立下伊那農學校に入校同八年三月卒業尙續いて縣立農事講習所に入り同十年三月卒業其の後長野縣東筑摩郡錦部村農會技術員に就職し熱心研究努力の結果遂に不振農會をして模範優良農會として表彰を受けしむるに至り同年十月長野縣農林技手判任官四等待遇に任ぜられ同縣經濟部松筑出張所勤務を命ぜられた。昭和十一年一月徴兵として宇都宮輜重

兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして同年十二月上等兵に進級翌十二年五月下士官候補者に採用せられた。

支那事變起るや岩倉工兵部隊に配屬せられ部隊大行李長として昭和十二年八月二十八日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し九月十四日所屬部隊は永定河を渡河し一舉琉璃河畔に進出して渡河作業に任ずるや氏は大行李を指揮して之に跟随せしが永定河は河幅三百米水深胸部にも達し且流速早く加之兩岸は腰を渡する湿地であり大行李車輛の徒涉は頗る困難を極めた。しかし氏は克く部下を掌握激勵し適切なる處置により順調に渡河を完うして十六日に於ける部隊



主力の給養實施に支障なからしめた。次で九月十七日所屬部隊が敵を追撃して義合莊南候附近に於て追撃戦を交へつゝ大冊河畔に向ふや氏は大行李を指揮して之に跟随せしが途中敗殘兵出沒せるのみならず道路頗る不良なりし爲車輛の行動容易ならず特務兵の疲勞は勿論馬匹の困憊其の極に達せしに拘はらず可成速かに部隊に追及して給養の確實を圖るべく率先垂範人馬を鼓舞激勵し努力に努力を重ねて萬難を克服し概ね豫定の如く前進して爾後の給養に支障なからしめた。



九月二十三日所屬隊主力は歩兵部隊に配屬せられ松林店附近より保定南側に向ひ敵を急追するや氏は大行李車輛二十一輛を指揮し分進して所屬部隊に追及すべく南候より大曲城を経て富庄に向ひ急進し同日午後三時頃大冊河に達した。該河は水深胸にも達する所ありしかも濁流にして車輛の通過容易ならず氏は部下を督勵しつゝ既に十九輛を渡河せしめ尙最後まで居残りて後尾二輛の通過を確認し次で先に渡河前進せしめたる主力車輛の位置に進出せんと單身乘馬を飛ばし其の間附近にまで差懸かつた。然るに突如右側方百米敵の殘存掩蔽部に潜伏せる敗殘兵の狙撃を受けしを以て奮然同所に下馬し之と應戦撃退せんとするや忽ち敵兵五名掩蔽部より躍り出で小銃及青龍刀を揮つて氏に肉薄し來つた。茲に於て氏は咄嗟其の附近にありし堆土に據り拳銃を以て敵を射撃し忽ちにして其の二名を斃し一名を傷つけ更に尙殘れる二名の敵に對し突入せんとするや無敵敵彈の爲頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し氏の剛膽奮戦により殘敵二名も亦之と同時に西方に遁走し爲に我が大行李は人馬共に無事なるを得た。

氏の郷に在るや模範的指導者として興農の功勞高く、出で軍隊に入るや諸般の成績優秀將來有爲の幹部として大いに囑望せられてゐた。而して其の戦陣に臨むや不屈不撓有ゆる辛酸を克服し大行李長たる任務を完うせしのみならず偶々敵と遭遇するや剛膽にも單身身を挺して沈着奮戦人馬物件を守護し敵に一指だも觸れしめざりしは實に旺盛なる責任觀念の發露にして是畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。參戰日ならずして北支の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮闘玉碎して以て樹てたる披群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として萬世に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日輜重兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

## 陸軍輜重兵伍長勳七等功七級 立本 末 男

### 孝子通州に孤軍奮闘し遂に敵砲彈に玉碎す

氏は奈良縣宇智郡五條町の人にして父を保次郎母をキんと云ひ大正四年十一月十五日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして義務心に富み又孝心深く幼少の頃より兩親を扶けて菓子商を手傳ひ近隣兒童の手本となつて居た。昭和五年三月五條小學校高等科を卒業し其の後は自動車運轉術を修業して免狀を得それより後は月收七十五圓を得たが氏は其の全額を母に渡して一家の生活を扶け自らは幾分かの小遣錢を母より貰ひ極めて質實なる生活を續けて居た。昭和十年十二月徵兵として關東軍自動車隊へ入營し翌十一年四月迄吉林省新京に於て滿洲事變に従事し其の後引續き海拉爾東寧穆稜木蘭等の各地に東奔西走し警備討伐の重任を果し功を以て勳八等に叙せられ輜重兵上等兵に進級した。

支那事變起るや間もなく米山部隊山田中隊に編入せられ中隊長傳令に選ばれ酷熱百三十度の炎天を冒し七月二十七日劈頭第一に通州に乗り込んだ。而して所屬中隊は通州兵營に入りて直ちに警備に就いた。翌二十八日の通州は平穩に暮れ南苑方面の爆撃に参加する友軍飛行機編隊の壯容を見送りて就寢した。その夜午前四時「敵襲！」の警報に各々其の警備の位置に就いた。午前五時頃敵の大部は東正面より攻撃して來た。其の兵力は大砲を有する千餘名味方は百名にも足らぬ小勢であつた。氏は固有所屬の第三分隊長杉山上等兵の隸下に屬し守備隊本部と自動車置場との間圍壁の東北角に位置し連絡路の確保を兼ねて應戦準備を完了した。敵は其の優勢なる兵力を恃みて續々兵營に接近し今や氏等の正面百五十米に近迫し猛射を浴びせて來た。氏等は憤然機關銃を以て寄せ來る敵を猛射した。銃身は焼きつく許りに熱したが水を注いで冷却させ油を注いで未だに故障を防ぎ分隊長以下車輪の如く活躍を續けた。流石の頑敵も遂に頭も得擧げず敵に取りては



氏等分隊の健在は實に命取りの痛であつた。午前七時頃より敵砲弾は氏等の兵營目ざして集中して來た。營庭炊事場守備隊本部と逐次に落下炸裂し地響と共に濛々たる黒煙を擧げた。豪膽不敵の氏は更に驚かず率先籠を垂れて戦友を激勵し一意任務を遂行して居た。午前八時頃より野砲弾が飛來して來た。守備隊本部に對する其の射弾は漸次正確となり轟然たる爆音と共に其の一角は破壊された。得たりとつけ入る憎むべき敵は潮の如く雪崩れ込んで來た。「何を小癩な！」と憤激せ



る氏は战友と共に敵の主攻部隊を猛射し將棋倒しに之を打のめしその攻撃動作を見事に破碎した。此の時所屬隊長は氏等を彈巢地帯より收容すべく大聲引揚命令を下した。その瞬間不幸一砲弾は氏等の身邊に落下炸裂し無念にも射手高橋一等兵を残し分隊長以下四名の勇士は相共に壯烈なる戦死を遂げ氏も亦爆煙立のぼる下に尊き遺骸を横たへて居た。此の有様を目撃せる中隊の將兵は怒髪天を衝き奮戦苦闘を続けわけても高橋一等兵は悲憤の涙を拭ふ道もなく分隊長の仇戦友の敵と銃身も熔けん許りに猛射を加へ午後四時半遂に敵を撃退するを得た。敵は屍體百二十を遺棄し四離滅裂となつて敗走した。通州附近の敵は全部で三四千名と傳へられて居たが所屬中隊は翌三十日午後五時救援隊の來着まで實に前後三十數時間孤軍奮闘其の守地を確保し得たるは實に氏等四十三體の尊き犠牲の賜であつた。

氏は稀に見る孝子にして又其の優秀なる技術を以て滿洲事變に活躍し更に今次聖戰に参加するや寡兵克く十數倍の敵軍を引き受け惡戦苦闘重要守地の確保に至大なる貢獻を與へて玉碎した。寔に是崇高なる責任觀念の發露にして一般軍人の

模範と謂ふべきである。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛歎哀悼に堪えざるも氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて不朽の芳名を轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日勲重兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)



## 兵之部

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石川作太郎  
陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石川安次郎

忠烈譽の一家兄は上海戦、弟は外長城戦に不朽の武勲を奏して玉碎す

兩氏は兄弟にして東京市品川区東品川二丁目の人、父を竹次郎母をカネと云ひ兄作太郎は明治三十七年三月六日に弟安次郎は大正五年三月三十一日に生れ共に獨身であつた。兩氏は日頃兄弟仲よく共に性温良寡黙にして揃ひも揃つて孝心厚く責任を重んじ所信に向つては水火をも辭せざる氣魄を有し思慮亦周到にして諸人の信頼厚かつた。兄は大正五年三月洲崎尋常小學校を卒業し弟は昭和四年三月城南小學校を卒業共に父に従ひ家業たる漁業に従事して孝養を盡して居た。兄は大正十四年一月徴兵として麻布歩兵聯隊へ入營し翌十五年十一月歩兵一等兵を以て滿期除隊となり歸郷後は在郷軍人分會幹部及品川獵師町漁業組合總代に推舉せられ熱心業務に盡力して信任を受け又弟は昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊留守隊へ入營し間もなく滿洲警備部隊に屬し齊々哈爾に於て初年兵教育を受けながら同地方警備の重任に服して居た。

北支の風雲急を告ぐるや弟は湯淺部隊小林中隊に編入せられ第二小隊擲彈筒分隊彈藥手として勇躍天津方面に出動し八月初めより同地方の警備に任じ物情騒然たりし同地方の支那軍及抗日分子を掃蕩して治安維持に貢献した。兄は昭和十二年九月應召加納部隊阿部中隊に編入せられ第三小隊小銃手として勇躍上海方面への征途に就いた。斯くも兄弟打揃ひ聖戰

に従軍せる兄弟の喜び又一家の光榮は一般世人の羨望と其の尊き勞苦に對する感謝とに依て彌増しに光り輝いた。兄弟は深き感激に一死報國の赤誠を胸に秘め死力を竭して力戰奮闘、輝しき武勳を奏するに至つたが先づ兄作太郎氏の分より記述すれば所屬部隊は九月下旬上海戦場に到着し直ちに蘆蕩濱クワーク左岸地區に在る金家宅附近の戦闘に参加するに至つた。氏は所屬小隊第三分隊長の指揮下に二十九日午前九時三十分金家宅攻撃の爲左第一線分隊となり勇敢に攻撃前進し敵彈雨飛の中に沈着豪膽常に正確なる射撃を以て敵を壓倒し午後二時遂に目指す金家宅の敵陣地を占領之を確保した。其の後同クワークの南岸に在る堅壘を奪取する爲十月二日より四日に亘りクワークに到る交通壕の工事を行つたが敵は既設陣地に據り晝夜を別たさず正確なる猛射を浴びせて居た。氏は所屬小隊長の指揮下に決死隊の一員となり敵前百米乃至五十米の間に於て必死の作業を行ひ遂に全長二百五十米の工事を完成し所屬大隊渡河準備の爲著大なる便益を與へた。氏等が攻撃前進すべき對岸の敵陣地を見渡せばクワークに沿ひ敵の警戒部隊が配置されて鋭く警戒の目を光らせ南岸近き張家宅の陣地は我が渡河部隊を側方より猛射し得る如く設備され以て我が第一次攻撃目標たる小宅の占領を困難ならしめ又小宅の西南方曹宅及小宅南方の朱楊濱には機關銃迫撃砲をズラリと展開し優勢なる兵力を配置して闘志滿々、我が攻撃前進を待ち構へて居た。今や虎穴に入りて虎兒を得るにも似たるその難戰が目睫の間に差し迫まつた。氏等は中隊長阿部大尉の指揮下に第一線小隊に屬し十月五日午前五時幸にもクワークの敵前渡河に成功した。其の後激戦三時間午前八時遂に小宅に突撃を敢行して之を占領直ちに其の陣地の確保に努力した。だが小宅は間もなく敵の機關銃迫撃砲の集中火を受け見る見る死傷續出且優勢なる逆襲を受け齒がみをなしつつ一旦後退するの已むなきに至つた。十月八日第二回小宅の攻撃に於ては氏は再び第一線に屬し手榴彈を以て敵に多大の損害を與へ同陣地の占領確保に甚大なる貢献を與へ又同月十二日以後は中隊長代理牧野少尉の指揮下に小宅の陣地に於て張家宅の敵陣地に對抗して交戦を續け同月二十一日には中隊の右第一線



となり小宅の西北方二百米一軒家附近の陣地に於て南方の敵を警戒して居た。其の夜十時約二箇中隊の敵が氏等の前面に夜襲して来た。所屬小隊は充分に敵を引きつけ一齊に火蓋を切つて大損害を與へ猪突猛進する敵をば手榴弾を叩きつけて打倒した。氏も又十數名を爆殺し殆ど之を撃滅し機を失せず朱楊濱及曹宅の線に向ひ追撃した。然るに此の時朱楊濱よりする敵の迫撃砲彈の集中射撃を受け惜しくも午前一時壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の勇戦奮闘に依り所屬部隊は爾後の戦勝の爲有利なる態勢を占むるに至つた。

弟安次郎氏の所屬部隊は其の後特別任務に基き熱河及多倫を経て十七日張北に進出し同地方の警備に任じて居た。



山岳重疊し急坂峻谷錯綜しありしが氏は克く分隊の掌握下に筒手に協力し適時適切に要點に躍進し以て大隊の右側及後方の警戒を安全ならしめ乍ら午後二時頃攻撃準備位置に進出した。間もなく長城線の敵主陣地に對し攻撃開始の命令下り前進を起したが長城の主陣地にある(二)火點の敵機關銃の猛射を受け前進困難となつた。氏等の分隊は有効適切なる射撃を以てその火點を制壓し以て我が第一線の前進を促進せしめた。夕刻より降り出した山雨は漸次暴風雨と化し全身づぶ

濡れとなり冷氣身に徹すれど氏は毫も之を意とせず長城線上の(一)火點を猛射し午後七時頃中隊と共に壯烈果敢なる突撃を行ひ遂に一番乗りの榮冠を擔ふに至つた。然れども敵は長城の南側高地の幾つかのトーチカ陣地に據り死力を竭して頑強に抵抗した。中隊長は機を失せず稜線傳ひに南側のトーチカに向ひ攻撃を續行せしめた。敵の守兵約四十名はトーチカ前の外壕を利用して障碍となし猛射を浴びせて来た。氏等は之に屈せず奮闘を續け午後八時頃喊聲高く突入すれば小嶺



にも其の後方の敵は氏等に向ひ逆襲に轉じて来た。氏等は之に擲弾を浴びせて苦もなく之を撃退した。暴風雨は雷鳴さへ伴ひて愈々荒れ狂ふ中に潰走する敵に尾して猛追撃を行ひ一軒家高地に殺到し午後九時一軒家を占領すれば圖らずも集團地雷爆發し小隊長以下十一名の爆死者を生ずるに至つた。氏は幸に微傷だも負はずして第一小隊の擲弾筒分隊に編入され別命に依り中隊の全擲弾手と共に第一小隊たる第七中隊へ臨時配屬となつた。敵は十字火を浴びせつつ奪回攻撃を繰り返して来た。此の時氏は第七中隊の最左翼に位置し沈着なる小銃射撃に依り悉く之を撃退し遁げ惑ふ敵の背後より一名を

刺殺し更に第二の敵を刺突せんとする一刹那無念一彈飛來氏は頭部に貫通銃創を受けかすかにも「萬歳」の一語を残し壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬部隊は氏等の勇戦奮闘に依り敵の大隊長一、副官一及中隊長二を初めとし數十名の敵兵を斃し赫々たる戦勝を收むるを得た。



飛の中に泰然自若死力を竭して所屬部隊の戦勝獲得に貢献し遂に聖戦の尊き犠牲となつた。今や忠勇義烈の氏等兄弟の壯容に接すべくもなく痛歎哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏等の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に光彩を放ちて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ又一家永世の守護神ともなり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏等兄弟は戦死の日共に歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 池田 光雄

#### 清河鎮に小隊長の危機を救ひ魏家庄の攻撃に奮戦遂に玉碎す

氏は鹿兒島縣始良郡牧園村の人にして父を小吉母をスマと云ひ大正五年九月八日に生れ未だ獨身であつた。資性外柔内剛同情心深く又手藝に長じて居た。昭和六年三月中津川高等小學校を卒業し其の後父母を扶けて農業に精進しつゝ傍村立公民學校に通ひ十二年二月六ヶ年間無缺席にて卒業の上同年三月籤外志願兵として滿洲獨立守備步兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し優良の成績を挙げつゝあつた。

昭和十二年七月七日北支遼瀋橋事件勃發するや千田部隊に編入され第三中隊擲彈筒手として勇躍北支に出動し順義附近に到着して待機警備に就いた。當時北支の風雲は益々險惡となり遂に皇軍は七月廿八日より北京周邊にある宗哲元廟下の第二十九軍に對し牌察攻撃を開始した。此の日所屬部隊は清河鎮附近に陣地を占領しある敵を攻撃することゝなつた。當面の敵は歩兵約四大隊を基幹とし巧に遮蔽して陣地を占領し多くの機關銃迫撃砲を配備して待構へて居た。此の時所屬中



隊は第一線となり清河鎮西北方畑地の敵陣地に向つて攻撃前進した。待構へたる敵は我が前進開始と共に一齊に猛射を開始したが中隊は一進一止敵を制壓しつゝ勇敢に攻撃前進し愈々敵に近迫するや氏は敵の重機關銃目がけて擲彈筒の猛射を浴びせて之を撲滅又は制壓し中隊長の突撃命令下るや率先小隊長に従ひ敵陣に突入した。敵は健氣にも頑強に抵抗し數名の敵は當面の敵と格闘中の小隊長の側背に躍りかかつて來た。之を見た氏は銃奮然剣を振つて立所に其の三名を刺殺し上官の危急を救つた。斯くして奮戦格闘の後敵を撃攘し午後八時頃完全

に敵陣を占領したのであつた。其の後所屬部隊は前屯西苑附近の殘敵を掃蕩し萬壽山附近に待機した。當時蕩恩伯の指揮する有力なる中央軍は京綏線に沿ひ前進し來り八月に入るや長城線を越へて我が側背を衝かんとする状況にあつた。茲に於て皇軍は此の新敵を撃破すべく軍を進め八月九日所屬部隊は萬壽山附近を出發して南口に向ひ前進し十一日より攻撃を開始した。斯くて晝夜猛攻撃の上十二日午後八時南口鎮を占領し續いて敵を急追し約七里に亘る進路の山岳重疊峻峻なる各山嶺を扼守して我が前進を阻止する敵を猛攻し又は夜襲し逐次敵を長城線に壓迫した。然るに敵は長城線の三關の一たる居庸關附近の堅陣に據つて頑強に抵抗し皇軍は連日連夜猛攻撃を續行して遂に二十三日居庸關一帯を攻略したのであつた。此の間氏は炎熱百三十度の灼熱と飢渴を忍びつゝ篠つく雨の如き敵弾下に日夜不眠不休の奮戦活躍を續け中隊の戦勝に貢献する所甚大であつた。所屬部隊は更に二十六日より敵を追撃し八達嶺の堅陣を攻略して西進を續け八月末には張北より南下したる我が關東軍の兵團と連絡し九月十一



日には聚樂堡附近の敵を撃攘し大同を経て十七日豊鎮を二十四日には平地泉を占領した。

十月十六日所屬大隊は「トラツク」にて代縣を出發し大營鎮に向ひ前進し午前十時二十分より魏家庄附近を占據せる敵を攻撃した。此の時所屬大隊は先づ進路の南方無名部落に據る敵を撃退し次で魏家庄の敵に向つた。

所屬中隊は大隊の左第一線となり氏の屬する第一小隊は敵の右翼を包圍すべく攻撃前進した。敵は熾に銃砲彈を浴びせて來たが所屬中隊は躍進又躍進して敵に近迫中敵は小癩にも中隊の左側に向つて逆襲して來た。氏の小隊は之に對し敵を近距離に引き寄せ一齊に全火力を集中し忽ち之を撃退した。續いて小隊は一進一止魏家庄の敵陣地に近迫し愈々突撃距離に迫つた。當時氏の分隊は大部死傷し分隊内擲彈筒は僅かに氏の一筒のみとなつた。氏は一層其の責務の重大なることを痛感し篠つく雨の如き猛火を冒して最適の位置に進出し我が突撃を妨害する敵の重輕機關銃に向つて逐次之を制壓又は撲滅し機熟して中隊は勇猛果敢に突撃に轉じた。然るに其の瞬間氏は無念にも右胸部を續いて左下腹部を貫通され壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り所屬隊は同日夕刻魏家庄附近の敵を撃破して該地を占領したのであつた。

氏は今次聖戦に参加するや清河鎮の初陣に於て勇戦奮闘小隊長を危機より救ひ延いて敵陣突破に成功せしめ愈々必勝の信念を鞏固にし南口、居庸關攻撃には有ゆる困苦缺乏辛酸を克服して奮戦を續け特に魏家庄攻撃には適時敵の自働火器を撲滅し突撃の動機を作為して玉碎した。斯の如きは責任觀念旺盛にして斃れて後己む盡忠至誠の顯現である。參戰幾何ならずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひしことは洵に痛惜忍び難きも士の戦場に臨むや素より生還を期せず。今や氏の壯容に接すべくもなしと雖も其の赫々たる武勳は燦として皇軍戦史に輝き芳名は萬古に誦はれ不滅の英靈は靖國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 飯田平吉

#### 勇敢なる傳令猛火の中に其の任を果し元氏攻撃の華と散る

氏は茨城縣筑波郡田井村の人にして父を藤吉母をふくと云ひ大正七年四月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして氣概に富み不言實行の人であつた。昭和八年三月田井高等小學校を卒業し續いて縣立眞壁農學校に入校し十一年三月卒業した。氏は幼時より體格衆に勝れ又小學校の學業成績は常に優秀にして毎年表彰され農學校に入りては劍道に精進し其の技は群を抜いて居た。昭和十二年一月現役志願兵として水戸歩兵聯隊に入營後幹部候補生を志願し熱心軍務に勉勵して優秀なる成績を挙げ其の將來を矚目されて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月石黒部隊に編入され第十一中隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は九月十四日永定河の敵前渡河を強行し對岸の敵を撃壊して拒馬河畔に進出し十五日より十六日に亘り對岸の既設陣地に據る敵を攻撃して之を撃攘し更に長驅之を追撃して二十一日大冊河南岸敵陣地の要衝たる石橋村附近の堅壘を攻略し續いて敗敵を追撃して二十四日には保定に入城した。此の間氏は有ゆる危険困難を克服して勇戦奮闘克く其の任を完うした。斯くて所屬部隊は九月末再び前進を起し十月七日滹沱河北岸に進出し對岸の敵陣地を攻撃すべく諸偵察に着手した。當夜氏は中隊長自ら行ふ偵察に隨行して斥候となり勇敢に敵陣の細部を偵察し或は敵前近く大膽に徒涉場の状況を詳細に偵察する等偉大なる功績を樹てた。斯くて愈々十日午後渡河攻撃に方りては氏の中隊は第一線となり氏は中隊指揮班に屬し猛烈なる敵陣下に傳令として勇敢に活躍し大いに中隊長の指揮掌握を容易ならしめた。斯くて所屬部隊は激戦の後對岸の敵陣を突破し息つく暇もなく敗敵を追撃し石家莊を経て十月十一日元氏附近に進出した。元氏附近には敵は早くより堅



固に陣地を構築し優勢なる兵力を配備して我を邀撃せんとして居たが我を劣勢と侮りてか此の日攻勢に轉じ來り遂に遭遇戦は惹起された。所屬部隊は十一日夜より各所に敵を夜襲し突撃に次ぐに突撃を以てし壯烈なる肉弾戦を交へ敵を各個に撃破したが敗敵は遂に既設陣地に逃げ込み優勢なる守兵と合して頑強に抗戦し翌日に及んだ。翌十二日所屬第三大隊は敵の右側を攻撃することとなり未明行動を開始し遠く迂回して正午過孟村の前面に進出した。敵は該村落の周壁を利用した



る既設陣地に據り動もすれば攻勢に轉せんとする氣配があつた。茲に於て大隊長は直ちに此の敵を攻撃すべく右より第九第十一中隊を第一線として攻撃前進した。我が前進を見た敵は一齊に銃砲火を浴びせ來り爲に我が攻撃前進は頗る困難であつた。併し第一線は一進一止勇敢に躍進を続け遂に敵前四五百米にまで近接した。此の間氏は中隊長の傳令として第一線の各小隊並に大隊本部間の連絡に任じ篠つく雨の如き敵弾を冒して東奔西走中隊長の命令意圖を小隊長に傳へて中隊長の意圖の如く行動せしめ又適時中隊の情況敵情等を大隊長に報告して其の戰闘指導を適切ならしめた。然るに此の頃數百の敵歩兵は趙村方面より攻撃し來り所屬中隊は其の斜射側射を受け雨後の前進は一時困難となつたが中隊は全火力の運用を適切にし勇戦奮闘の結果其の都度逆襲部隊を撃退し銳意正面の敵に對し猛進を続け小隊の主力は敵前數十米の地點に肉薄した。此の間氏は逆襲部隊の狀況等を猛火の下に幕地に疾驅して大隊長に報告し其の任を完うして無事中隊長の許に歸來し時恰も戰闘愈々激烈となりし爲氏は中隊長の命に依り第一線小隊の火線に加はり小銃手として大いに奮戦した。斯く

して中隊は愈々敵陣地に肉薄し手榴彈を投擲すると共に猛烈敵陣に突入した。氏は小隊の最先頭に立つて突進し特意の銃劍を振つて敵陣に突入し奮戦格闘敵を刺殺したが午後二時頃敵の一弾は無念氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り中隊は孟村部落の敵の大半を撃滅しさしもの堅陣を攻略したのであつた。

氏は生來體格強健にして且剣道に長じ志氣旺盛如何なる難事をも必ず遂行する人であつたが今次聖戦に参加するや彈雨の下克く其の重責を果して遺憾なく殊に孟村攻撃の際は篠つく雨の如き猛火の下に克く傳令の重任を果し更に火線に加はつて奮戦陣頭に立つて敵陣に突入し其の目覺しき活躍奮闘は戰友一同の賞讃感激せし所であつた。之全く一身を君國に捧げ斃れて後息まんとする盡忠至誠の顯現にして軍人の模範とするに足るものである。參戰幾日ならずして斯かる忠誠勇武の士を喪ひしは惜しみて尙餘りあるものであるが氏が奮戦玉碎して樹てたる赫々の武勳は皇軍戦史に輝き芳名は千古に轟はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勲八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 伊藤 忠 晴

斥候として數倍の敵を潰走せしめて進路を拓き遂に團河村に敵る

氏は大阪府泉南郡春木町の人にして父を寅藏母をシゲと云ひ大正五年十一月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性謙嚴誠實にして孝心深く事に當り責任觀念強く黙々實行遂行せざれば已まざる氣概を有し郷土に於ては青年の模範として表彰せられた。昭和六年三月八木小學校高等科を卒業引續き府立今宮職工學校夜學部に入學同八年三月同校建築科を卒業し



爾後大阪市鍛田工務所に勤務してゐた。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵翌十二年三月には優秀の成績を以て上等兵候補者に選ばれ又中隊教練に於て模範的行動を爲したる康を以て中隊長より表彰状を授けられた。

支那事變起るや南雲部隊大江中隊に屬し小銃兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月

十八日より二十六日に亘る間唐山附近の警備に任じたが當時北支は暗雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完うした。



七月二十六日愈々南苑攻撃の命令下るや將兵の喜び一方ならず同日朝唐山出發二十七日正午黃村驛に着し午後三時十分該地出發南苑に向つて前進した。此の日天氣晴朗無風にして氣温百四十度炎熱灼くが如く剩へ前日來の不眠不休により疲勞困憊は其の極に達ししかも渴すれども水はなく各所に兵の目射病にて倒るゝもの續出するの狀態であつた。此の頃敵は團河村東方行宮附近に陣地を占領しある

を知り既に行宮方向には股々たる砲聲を聞きつゝ部隊主力は敵の退路を遮斷すべき任務を以て行動を起し所屬中隊は之が尖兵中隊となり敵陣地の翼を大迂回して敵の背後たる三春莊に向つて急進した。而して敵前二千米に近接せし際中隊長は敵情偵察の爲八鍬准尉を長とする將校斥候を派遣するや氏も亦選ばれて其の斥候兵に加はり勇躍前進し敵前七、八百米に達せし頃敵の猛射を受けしかも此の附近高粱丈餘に繁茂し通視行動共に想像以上の困難であつた。しかし之に屈せず高粱

畑を縫ふて一意前進し漸く高粱畑を出でて前方の堤防に迫り着き敵情を偵察するに第三大隊正面の敵は頑強に抵抗し該大隊の前進は困難に陥りつゝあるを知り中隊は速かに敵の背後に進出して攻撃するの必要なる旨報告すると共に中隊の進出に先立ち急ぎ團河村附近の敵情を搜索すべく猛進中午後五時三十分頃三春莊東方三百米高粱畑中に於て十數名の敵と突如遭遇し行手を阻まるゝに至つた。依つて斥候長は直ちに之を攻撃するに決するや氏は數倍の敵に對し毫も懼るゝことなく沈着正確なる射撃を以て其の數名を殲せるも敵は優勢を恃みて尙頑強に抵抗せるを以て氏は斥候長と共に率先々頭に立ちて勇猛果敢に敵中に躍り込み當るを幸ひ狼狽せる敵を突き寄せれば残れる敵は支へ兼ねて敗走せしが折しも側方より敵の掃射を浴び無念其の一弾右胸部を貫通し其の場に倒るゝに至つた。しかし豪氣の氏は之に屈せず起ち上らんとせしが重傷の痛手に如何ともする能はず再び昏倒し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし將校斥候は氏等の奮戦と尊き犠牲により所命の任務を果し延いて中隊をして午後七時敵を潰滅せしむることを得せしめた。

氏の郷に在るや孝子、出でて軍隊に入るや良兵、其の戦陣に臨むや開戦勇頭選ばれて斥候となり彈雨の下克く活躍して斥候長を輔佐し其の敵と遭遇するや勇猛果敢數倍の敵中に突入奮戦して進路を拓き斥候長をして重任を果さしめた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ其の任務の爲には斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戦玉碎は百戦切なき瓦全に優る。實に氏が此の一戦に奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 伊井喜代作

## 重傷に屈せず奮闘を續けて戦勝の途を拓き北滿海倫に玉碎す

氏は富山縣中新川郡東水橋町の人にして亡父を澤次郎母をソノと云ひ大正五年二月八日に生れ未だ獨身であつた。性温良眞摯にして品行方正父母に事へて孝心深く又弟妹思ひの人であつた。郷里東水橋尋常小學校を卒業後直ちに同地實業補習學校に入學昭和五年三月同校を卒業し其の後は富山市内口鐵工所に滿五年の勤務を爲し次で三菱工業會社に雇はれ業務に精勵して居た。昭和十二年三月徴兵として滿洲駐屯獨立守備隊へ入營し北滿海倫に於て初年兵教育を受け克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

海倫はもと馬占山の根據地で北滿の寶庫と稱せられ滿洲建國以來大いに肅正せられたが縣東方の山岳地帯に巢喰ふ不逞匪は屢々所在に出沒して掠奪を擅にし殊に支那事變勃發の前後頃より共產匪と合流して滿洲擾亂をも企圖するに至つた。茲に於て所屬部隊長は之が徹底的覆滅を企圖し其の機會を窺つて居た。昭和十二年八月六日海倫の東南約五里に當る哈拉巴山の東南地區に於て敵匪約三百名は警察分駐所を包圍襲撃したるも多大の損害を受けて東方に退却し尙其の匪團は哈拉巴山及鹿馬山附近に徘徊するものゝ如しとの情報に接し所屬部隊長は鷹林討伐隊を編成し之が討伐命令を下した。氏は此の時討伐隊の機關銃第一分隊に屬し翌七日午前四時十分最先頭の第一自動車に搭乘し勇躍海倫を出發し朝風に日章旗をはためかせながら一路北滿の曠野を腰房身に向つて疾走した。午前六時半頃札克河を通過北進して腰房身の南方約半里なる李綱燒鍋高地南端に達せる時俄然我が前面の高地に敵影現はれ我が第一車に向ひ猛射を加へた。討伐隊の將兵は小躍して喜んだ。眼中既に敵なく忽ち攻撃部署に就いた。匪團は地形を利用し小銃機關銃及迫撃砲を以て三方面から亂射亂撃を浴



びせて來た。氏は敵彈雨飛の中に冷靜敏活、分隊長の所命位置に機關銃を据え逸早く火蓋を切つて憎むべき匪賊を制壓し以て中隊の展開と其の後の攻撃前進を容易ならしめた。然るに我が第一線の敵線に近迫するに従ひ敵は愈々必死と猛射を浴びせ來り就中氏の分隊は敵の目標となり或は躍進の途中に一人滅り或は射撃中に二人と倒れ漸次缺員を生ずるに至つた。氏は「何にタノ！」と上半身を起さんとする一刹那一彈飛來右脚を射貫かれた。氣丈の氏は之に屈せず既に傷ける戰

友等と協力して猛射を續け頑敵を制壓して突撃の動機を作り午前七時頃中隊は遂に壯烈果敢なる突撃を敢行して敵陣地を占領するを得た。併し無念にも氏は此の瞬間に再び胸部貫通の致命傷を受け微かにも「天皇陛下萬歲」の一語を名残とし壯烈なる戦死を遂げた。

其の後中隊は息をもつかず敵の退路を遮斷し午前十一時及午後二時半の二回に亘り敗走の敵匪を痛撃して之に殲滅的の大打撃を與へ再び起つ能はざるに至らしめた。戰濟んで斜陽に立てる中隊長は氏等の尊き遺骸の傍に佇み萬感胸迫り暗涙に咽びつゝ「有難う！よくやつてくれた。仇はとつたぞ！」とソツと涙を拂つて居た。

氏は初年兵第一期檢閲で優秀なる成績を擧げ所屬大隊長より賞詞を與へられたが其の後兩親宛に次の要旨の手紙をかいて來た「喜代作も御兩親が日夜神佛へお祈り下さる事によりて去る六月十九日無事第一期檢閲を終りました。檢閲も終つた今日は喜代作も一人前の軍人です。風雲急を告ぐる今日、いざ鎌倉と云ふ時は喜代作も中隊長と死生を共にし皇國に御奉公申上ぐる覺悟です。其の時も今や近きに在りと思ひます。御兩親も喜代作の父母としての覺悟は國を出る時から出來



て居る事と思ひます……喜代治や敏夫又姉妹にも見さんは元氣できつと偉い軍人になるとお傳へ下さい」とあつた。氏の面目は此の手紙にも躍如する如く氏の戦場に起つや既に生死を超越し勇敢機敏克く分隊長を中心として舉止一體機關銃の威力を最高度に發揚して中隊戦勝の端緒を拓いた。眞に是皇軍歩兵の精銳にして天晴れ軍人の龜鑑たるものであつた。あ皇軍主力が支那大陸に目覺しき活躍をなせるに反し氏は人目もひかぬ北滿に力戦苦闘の後玉碎せるは一入同情に堪えざるも今次の北滿討匪戦たるや暴支膺懲の聖戦と密接不可分の關係に在るは勿論蘇滿國境の情勢將に一觸即發の關係にあつた當時の情勢下に於ける氏の功績は戦場の如何を問はず赫々として皇軍戦史に輝き其の芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 今 中 勝 次

#### 沈着勇敢克く奮闘を續けて南苑の陣前に玉碎す

氏は大阪府豊能郡西能勢村の人にして父を米三郎母をマサと云ひ大正五年七月三十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして責任觀念強く事に臨み沈着勇敢不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和六年三月枳根莊小學校高等科を卒業引續き農業補習學校に入り同八年三月同校後期卒業尙積いて青年訓練所の課程を修め同十二年十二月修了した。通學間の出席は優良であつた。昭和十一年十二月徴兵として平塚歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして翌十二年七月には一等兵に進級した。

支那事變起るや鯉登部隊第二機關銃中隊に屬し第二小隊第三分隊二番銃手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着し七月二十六日郎坊附近の戦闘に参加し其の際氏は高粱畑及部落内の掃蕩に當り身の危険を顧みず迅速果敢に活躍し二十七日團河村附近の戦闘に際しては午後三時戦闘開始と共に丈餘の高梁繁茂せる中をかきわけつゝ炎着を冒して銃を臂力搬送し敵前二百米附近に進出して陣地を占領するや篠つく雨の如き敵弾下に氏は沈着正確なる装填を行ひ射手の猛射撃に聊かの支障をも生ぜしめなかつた。又戦友負傷後は代つて敵情監視に任じ時々刻々敵情の變化を報告して小隊長の射撃指揮を容易ならしめた。



七月二十八日所屬部隊は南苑攻撃の爲午前五時より行動を起し拂曉迄に攻撃準備を整へ午前八時より攻撃を開始した。敵は高さ五米の土壁を利用し幅五米深さ三米の水濠を繞らし堅固に陣地を占領し重機機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく丈餘の高梁連續繁茂して戰場行動就中機關銃の臂力搬送は頗る困難なりしのみならず當日は前日同様無風にして氣温百四十度に達し其の炎熱灼くが如く加之前日の疲労に加ふるに食もなく水もなく其の辛酸は一通りではなかつた。此の状況下に於て所屬小隊は中隊の左第一線となるや氏は叙上の困難を克服し率先勇敢高粱の中を縫ふて銃を臂力搬送し敵前五十米附近に進出して銃を据ゑ射撃を開始するや猛烈なる敵の銃砲弾下に克く沈着して正確なる装填操作を爲し射手の猛射撃に些の支障をもなからしめ機關銃の全威力を發揚せしめつゝありしが午前十時三十分頃第一線の突撃

を爲し射手の猛射撃に些の支障をもなからしめ機關銃の全威力を發揚せしめつゝありしが午前十時三十分頃第一線の突撃



準備に協力の爲更に陣地を推進變換するの必要を生じ氏は銃を搬送せんとして前楯を振りし際敵の猛射を受け無念顔面に數彈を受けた。併し豪氣の氏は屈せず尙も前進せんとせるも最早起つ能はず前楯を固く握りたる儘遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の奮闘と尊き犠牲とにより益々勇奮機關銃の最大威力を發揚して歩兵の突撃を援助し午後一時にはさしも頑強なりし敵を驅逐して南苑の兵營を奪取することを得た。

氏の戦陣に臨むや不屈不撓有ゆる困難を克服し率先勇敢に銃を搬送し又彈雨の下沈着正確濃厚なく裝填し機關銃の最大威力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て開戦勢頭暴慢不運の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍工兵上等兵勳八等功七級 石川千代松

#### 決死敵前に伐木作業を遂行して永定河畔の華と散る

氏は栃木縣下都賀郡水代村の人にして父を藤吉母をノブと云ひ大正四年十一月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして不屈不撓の氣概を有し又人に接して優しく老幼に對しては特に親切であつた。是全く嚴格なる父教養の結果であつたとの事である。昭和五年三月水代高等小學校を卒へ爾後家庭に在つて農業に従事し傍青年訓練所に通ひ其の課程

を終了し昭和十一年一月徴兵として水戸工兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し優良の成績を揚げつゝあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月岩倉部隊に編入せられ平田隊に屬し勇躍征途に就いた。氏は出發に際し村長に宛「出陣いたしたからには命は捨つる覺悟に候、國家のために又村や一家のために功を樹て屍となつて歸る積りに候」と通信したのであつた。斯くて所屬隊は九月上旬北支に上陸し永定河北方地區に前進した。當時對岸の敵は八月下旬以來對岸に陣地を



構築し我が軍に對抗して居たのであつた。所屬部隊は九月十日敵前約四千米の未賢村に進出し晝夜を分たず有ゆる危険困難を冒して河川の偵察及交通作業に任じた。永定河は水幅約二百米兩岸堤防間の河幅は約千米に達し河床の交通作業は我が企圖を敵に破匿する爲渡河直前でなければ實施し得ざるの状況であつた。氏の所屬小隊は交通作業に任じつゝあつたが十四日午前十一時三十分中隊命令に依り水邊の伐木を行ひ之を以て渡場に到る戰車道路を構築することになつた。此の時二川上等兵を長とする五名の伐木作業班編成せられ氏は其の一人であつた。班長以下一同は本作業の重要性に鑑み決死遂

行を誓ひ勇躍敵陣を冒して水邊の獨立楊柳林に向つて突進し素早く伐木を開始した。午後二時十五分我が砲兵は一齊に火蓋を切り亦上空からの掩護空爆と共に對岸の敵陣に命中し矢礮早に炸裂する黒白の硝煙は敵陣を覆ふて天地を震撼し敵も亦既設陣地より我劣らじと熾烈なる砲火を以て應戦し彼我の砲聲及白晝渡河戰の幕は切つて落された。之に續いて堂々歩兵部隊の攻撃は開始され漸次激戦となつた。伐木班の作業しある所は敵前近距離の小疎林で敵に好目標を與へ迫撃砲機



關銃の集中射撃を受け作業は頗る危険に瀕したが一同死なば諸共と力を協せ決死の作業を続け一本又一本と伐木して居た。協力一致の作業は著しく進捗し將に完成せんとする時無念氏は胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏は既に出征に際し一死報國の覺悟を固め生還を期しなかつたが現役兵として克く新銳の力を發揮し敵の銃砲彈の集中する猛火の下に泰然自若として伐木作業を敢行し其の結果通路は開設せられ戦車は機を逸せず渡河に成功し堅陣を蹂躪して完膚なからしめ益々戦果を擴大し敵は大損害を受け午後四時頃には雪崩をうつて潰走したのであつた。戦場に於ける工兵の任務は華々しくないが其の遂行の極致は歸一し氏の犠牲的精神の發露は軍人精神の精華と謂ふべきである。聖戦初期に於て斯かる忠誠勇武の士を喪ひたるは洵に痛恨の極みである。然りと雖も氏の樹てたる拔群の功績は皇軍戦史に輝き芳名は千古に轟はれ不滅の英靈は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍工兵上等兵勳八等功七級 糸井資夫

#### 敵前渡河第一舟漕手として第一回渡河を完遂し拒馬河畔に散る

氏は栃木縣那須郡下江川村の人にして父を三次郎母をノブと云ひ大正三年三月十日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚にして不屈不撓の氣概を持つて居た。氏は又親孝行にして父は酒を好んだが家計不如意の爲之を嗜む事も出来なかつた。氏は何とかして父を慰めんと農業の傍日雇に従事し其の得たる金を以て酒を求め歸り父を慰むるを樂みとし父も二男の氏を大いに頼りにして居た。大正十五年三月下江川高等小學校を卒業し爾來家業たる農業に専念し昭和十年一月徴兵として

水戸工兵聯隊に入營日夜軍務に精勵して良好の成績を収め翌十一年十一月滿期除隊し依然農業に精進しつゝあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召岩倉部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着直ちに永定河北岸地區に進出した。當時敵は八月下旬以來永定河南岸一帶に陣地を構築し我が軍と相對峙して居た。而して我が軍は敵前渡河を敢行して此の敵を攻撃すべく準備中であつた。所屬部隊は敵前約四千米の未賢村に前進し晝夜を分たず河



川偵察或は諸作業に服し有ゆる危険困難を冒して渡河準備の完成を急ぎ遂に九月十四日土肥原部隊は敵前渡河を敢行して對岸の敵陣を突破し雪崩をうつて潰走する敵を息もつかせず急追した。敵は退路上の既設陣地を利用し歩々抵抗したが悉く一蹴し拒馬河北岸地區に進出した。敵は拒馬河の障礙を利用し其の南岸地區には極めて堅固なる既設陣地を有し優勢なる守兵を配備して皇軍を陣前に撃滅せんといき巻いて居た。九月十五日土肥原部隊は此の敵を攻撃すべく夫

れ、其の部署に就いた。此の時所屬中隊は土肥原部隊左翼隊の渡河を援助することになつた。其の渡河法は先づ煙幕を展開し漕渡に依る晝間の強行渡河法であつた。氏は左作業隊たる石川區隊の漕手として選拔せられ第二渡場第一舟に屬した、然るに此の日風強くして煙幕の展張意の如くならず對岸の敵は我が企圖を察知して一齊に火蓋を切り我が渡河點目にかけて嵐の如き斜射縱射の十字火を浴びせて來た、此の時危険を冒して我が岸近くに進出しありし渡河掩護部隊は熾烈なる銃砲火を敵に集中し其の制壓に努めた。續いて午後三時十五分氏の操縦する第一舟は發航命令を受け直ちに發進を起すと見るや待ち構



へた敵は雨や霰と猛火を浴びせて来た。氏は沈着剛膽敢然として必死の漕艇を続け舟は滔々たる濁流を衝いて進航し美事第一回の漕渡に成功し乗り込みの歩兵部隊は勇躍して對岸に上陸し敵陣目がけて猛進した。氏は續いて第二回の漕艇に移らんとするや兩方面の敵より機關銃の急襲射を集中され氏は惜しくも腹部に其の一弾を受けた。併し氣丈の氏は尙も堅く櫓を握りて操作に努めんとしたが氣力次第に衰へ遂に櫓を握りたる儘壯烈なる戦死を遂げた。

漕渡に依る敵前渡河の成否は一に工兵作業隊の活動如何に左右せられ其の擧の壯なる反面に於て重且至難の任務である。氏は漕手として選抜の重責を完うすべく不屈不撓死線を越へて活躍し第一舟歩兵隊を敵岸に上陸せしめて對岸に第一の足場を獲得せしめた事は實に渡河攻撃成功の端を拓きたるものにして其の功績は正に披群と謂うべきである。而も致命の重傷を負うも尙任務に邁進せんとして櫓を離さざりし如きは畢竟盡忠至誠の顯現である。然るに參戰幾何もなくして此の忠烈勇敢の士を喪ひし事は惜しみて尙餘りある次第である。併し氏は百戰功なく瓦全を耻づ氏や拒馬河畔の一戦に玉碎せしも其の披群の功績は千載に亘りて皇軍戦史に輝き芳名は千古に轟はれ不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級 井ノ本行雄

#### 突如大敵の奇襲に沈着剛膽死闘を續けて小寨村に玉碎す

氏は奈良縣山邊郡波多野村の人にして父を音松母をタツエと云ひ大正五年十二月二十二日に生れ未だ弱身であつた。資

性温順而も豪膽にして進取の氣象に富み進んで難局に當るの氣概があつた。昭和六年三月春日小學校高等科を卒業し引續き青年補習學校に入り同年三月同校を卒業尙續いて大阪自動車學校に入校し同年七月同校を卒業した。昭和十二年一月徴兵として京都輜重兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。



支那事變起るや兵站自動車隊新庄部隊中西中隊に編入せられ第二小隊自動車手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し南口南方山地附近より行動を起し敵の堅壘と恃む八連嶺を突破し泥濘地帯或は峻峻山岳地帯を運轉強行し近代機械化輜重の眞價を發揮した。此の間氏は殆ど不眠不休有ゆる困難を克服し粉骨碎身克く其の任を完うした。次で九月二十二日所屬中隊は三浦部隊に配屬せられ同部隊が敵を追撃するに當り其の先遣隊の兵員を搭乘せしめ長城線に程近き小寨村に向け出發した。然るに其の使用自動車は徴發車なりしが十分之を整備する暇もなく行動を起せる爲途中故障破損多く非常に困難せしが氏は不眠不休銳意之を整備しつつ遂に輸送を完うし先遣隊の追撃に遺憾なからしめた。

九月廿五日所屬中隊は矢島中隊と共に至急靈邱に到り新銳の歩兵部隊を輸送し來るべき命を受け早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ小寨村を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に沁む朝であつた。露營地を後にして進むこと二軒其の先頭が谷間の道に差懸るや敵は昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂回せるものと見え午前九時十五分



俄然大敵と遭遇するに至つた。依て部隊は直ちに之に應戦せしが敵は迫撃砲重機關銃を有する正規軍にして千五百を下らざる大部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに百七十六名其の内大部分は輜重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三方面より攻撃し來り忽ち我は全く敵の重圍に陥るに至つた。氏は第二小隊長指揮下に其の左翼分隊内にありて隘路南方高地の敵に對し力戰奮闘克く三百の衆敵と交戦したが戰鬪愈々激烈となり第一小隊方面危機に瀕するや小隊は現在の戦線を増援の歩兵に委ね第一小隊正面に轉戦して敵の側背に向ひ攻撃を開始した。此の際氏は小隊の左翼分隊内にありて敵翼を包圍する如く有利なる態勢を以て猛烈果敢に攻撃中敵は漸次其の兵力を増加して其の戦線を我が左翼に伸展し來つた。氏は大敵を前に克く沈着し正確なる射撃を以て逐次敵を殲し其の行動を阻止せるも敵は其の兵力の優勢を恃みて我が左翼側を包圍するに至り遂に我に肉薄し小隊は愈々危殆に陥らんとするに至つた。小隊長兵一同は今之迄と敢然白兵を揮つて敵中に突人格闘し氏は克く其の數敵を殲したるも敵の猛射を受け敵彈右腕を貫き續いて胸部に手榴彈の爆創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲により約三時間半に亘り寡兵克く十倍の敵を支へ且自動車に敵手に委することなく午後零時四十分頃其の包圍線を突破して三浦部隊に合することを得た。氏は元來不屈進取の人であつたが其の戦場に臨むや北支の地悪路險難加ふるに皇軍破竹の進撃に伴ふ晝夜兼行の急追隨と後方敗殘兵の出沒將た又衰損多き徵用自動車の操縦等其の辛苦は想像以上なりしにも拘はらず終始一貫粉骨碎身優秀なる伎倆と相俟つて有ゆる困難を克服し近代輜重の全能を發揮せしめ常に前線の戦力を培養した。實に第一線快勝の裏に隠れたる此の涙ぐましき功績は没すべからざるものである。而も果然不測の大敵と遭遇するや彈雨の下奮戰死闘軍用物件を敵手に委することなからしめた。壯烈實に斯くの如きは一身を君國に捧げ籠れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に皇軍輜重の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨盡きざるも氏が奮闘玉碎し

て以て樹てたる披群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日輜重兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 濱石秀吉

#### 剛勇なる輕機關銃手傷つくも尙奮戰突撃して居庸關の華と散る

氏は鹿兒島縣始良郡山田村の人にして父を休次郎母をスエキタと云ひ大正六年二月二十一日に生れ未だ獨身であつた。資性質實剛健にして責任觀念旺盛の人であつた。昭和五年三月山田高等小學校を卒業し其の後同村竹内燒酎店に勤め誠實勤勉給料の全部を父に送り一家の生計を補助する等常に孝養に力を盡した。同十二年三月徵兵として滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し良好の成績を挙げつゝあつた。

昭和十二年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊に編入され鈴木中隊輕機關銃手として間もなく出動し北支懷柔附近に到つて待機警備に就いた。當時北支の風雲は益々險惡を加へ皇軍は遂に獨自の行動をとることとなり七月廿八日より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對する膺懲攻撃を開始した。此の日所屬部隊は清河鎮附近に陣地を占領せる敵を撃破し續いて西苑北苑附近の殘敵を掃蕩したる後萬壽山附近に兵力を集結し事後の攻撃を準備した、此の間氏は連日連夜不眠不休の活動を續け疲勞困憊を克服し沈着勇敢に奮戰して敵に大なる損害を與へ中隊の戦勝に貢獻する所甚大であつた。然るに其の後敵將蕩恩伯の指揮する有力なる中央軍は京綏線に沿ひて前進し來り八月に入るや長城線を越



へて我が側背を衝かんとする状況にあつた。茲に於て北支の皇軍は此の新敵を撃破すべく軍を進め所屬部隊は八月九日萬壽山を出發し十一日拂曉より友軍砲兵支援の下に攻撃を開始し晝夜激戦の後十三日南口驛東北方虎峪村附近の堅陣を突破し更に西北方に急追した。此の追撃に所屬中隊は右縦隊の尖兵中隊となり十四日午後三時四十分南口鎮を出發し居庸關に向ひ前進し泥溝西北端に達したる時進路西側山上の敵より俄然猛射を受け中隊は直ちに展開して此の敵を攻撃せしが遂に日没となり其の儘夜を徹して翌拂曉より再び攻撃を開始した。此の時中隊長は敵の前進據點たる岩山の敵を速に撃攘すべく氏の屬する第一分隊長に命じた。分隊長町田軍曹は部下分隊を指揮し此の重任を果すべく雀躍して其の途に就いた。分隊は敵彈雨注の下小徑だもなき峻峻なる稜線の岩間を辿りて敵陣に肉薄するや敵は一齊に熾烈なる火力を集中し且手榴彈を投擲して來た。分隊亦手榴彈を以て對戦し極めて壯烈なる光景を呈した。斯くの如くにして奮戦中の分隊長は眞先きに重傷を負ふに至つた。茲に分隊の全員は憤激して怒髪天を衝き「今に見ろ」と尙も惡戰苦闘を續けて突撃の機を窺つて居たが無念氏は右足部に爆創を受け次で五番兵一番兵も受傷し悲惨の状況に陥つた。併し受傷者も尙屈せず分隊全員は衆心一致團結して益々勇氣を振起し苦闘を忍んで只管必勝の信念に燃へつゝ一舉手榴彈を敵の頭上に投擲して鬱駭壓倒し此の瞬間に乗じて傷者も不自由の足を忍んで起ち上り分隊は一齊に勇猛果敢堅壁に突入し壕内の敵を目がけて手榴彈を投げ付けて爆死せしめ尙且白刃を振つて敵を突き斃しさしもの頑敵も全滅されつゝあつた。此の時氏は後方の敵陣地より狙撃を



受け腹部に貫通銃創を負ひ遂に午前十時二十分壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り敵の前進據點は奪取され中隊爾後の攻撃は容易となり猛攻を加へて敵を山上より驅逐し進路側方の障碍は完全に排除されたのであつた。氏は今次聖戰に参加するや克く分隊長を輔佐して勇戰奮闘し其の活躍は實に目覚ましきものであつた。特に所屬分隊が敵の前進據點を攻略すべく獨立任務に服した奮戦力闘は友軍注視の的となり我が軍の志氣を益々鼓舞振作し且要點の奪取に依り中隊戦勝の主因を作爲した壯烈鬼神をも哭かしむる偉勳は眞に軍人の勳鑑である。斯かる忠勇義烈の士を喪ひしは洵に痛恨の情禁じ得ずと雖も氏の樹てたる拔群の功績は天晴れ皇軍戰史に光彩を放ち不朽の芳名は百世に傳へらるべく不滅の英靈は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 羽根田芳人

魏家庄攻撃に懸敵奮戰功を奏して惜しくも玉碎す

氏は熊本縣鹿本郡内田村の人にして亡父を末松亡母をツナと云ひ大正二年五月十五日に生れ妻こうとの間に一子武を擧げた。資性質實剛健にして諸事積極的人であつた。大正十五年三月内田高等小學校を卒業し其の後は兄を扶けて農業に精進し昭和八年の末徴兵として滿洲獨立守備歩兵大隊に入營爾來熱心軍務に勉勵しつゝ匪賊の討伐及警備に参加して其の重責を完うし功に依り勳八等白色桐葉章を授けられ十一年三月滿期除隊した。除隊後は朝鮮群山府の叔父の許に在りて土木請負業に従事したが家事上の都合に依り其の年十一月より福岡縣中間町大正針業株式會社に勤め精勵しつゝあつた。



支那事變起るや間もなく應召千田部隊に属せられ北支に向け出征した。斯くて所属部隊は九月十一日聚樂保の敵を撃破し大同を経て北上し十七日豊鎮を占據し二十四日には綏遠の要地たる平地附近の敵を攻撃した。此の日所属部隊は拂曉より攻撃を開始したが敵は高地及部落を利用して堅固なる陣地を構へ我が攻撃前進開始と共に猛火を浴びせて来た。氏は熾烈なる銃砲弾を冒して火線分隊長の指揮下に毎發必中の射撃を爲しつゝ勇敢に一進一止敵に近迫した。斯くて所属部隊は激戦の後遂に敵陣に突入して頑敵を驅逐し敗退する敵に大打撃を與へたのであつた。



十月十六日所属大隊は自動貨車にて代縣を出發し大營鎮に向ひ前進し午前十時二十分より魏家庄附近を占據せる敵を攻撃した。此の時所属大隊は先づ進路南方無名部落に據る敵を撃退し次で魏家庄の敵に向つた。所属中隊は大隊の左第一線となり敵の右翼を包圍すべく氏の属する第一小隊を外翼として攻撃前進した。敵は頑強に抗戦し其の銃砲弾は頗る熾烈であつたが我が機關銃隊は敵陣の要點殊に自動火器に穿貫的射撃を集中して第一線の攻撃前進を容易ならしめ

第一線中隊は勇猛果敢に前進を續行した。氏は機關銃及迫撃砲弾の雨飛する中を毫も意とせず沈着勇敢に正確なる射撃を持續して克く奮戦活躍した。斯くて中隊は一進一止敵前百米附近に近迫し銳意突撃の準備に就いた。然るに第一小隊の左斜前方約三十米の高梁畑内に潜みありし数名の敵は突如急射撃を浴びせ來り續いて手榴弾を投擲して來た。之を見た氏は「小癩な！」とばかり手榴弾を抱いて突進し敵の眞向に投げ付けて見事に其の大半を爆死せしめた。而して中隊は愈々敵に肉薄し機熟して一舉敵陣に突撃するや氏は分隊長と共に篠つく雨の如き敵弾を冒して突進せしに途中無念敵の手榴弾は氏の右大腿部に命中し壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り中隊は突撃に成功し敵は大損害を受けて敗退したのであつた。

氏は嘗て戦闘の経験を有し今次聖戦に臨むや支那軍の暴戾なることを知り益々一死報國の念に燃え憤然期する所があつた。果せる哉精戦以來敵弾雨注の下勇戦力闘して其の責務を積極的に遂行し特に魏家庄攻撃に於ては剛膽機敏なる行動を以て中隊左翼の危険を排除して突撃成功の素因を作り戦勝に貢献する所甚大なりしは歩兵の精銳として其の眞價を遺憾なく發揮したのであつて一般軍人の龜鑑とする所である。斯かる忠勇義烈の士を參戰幾何もなく喪ひしは洵に長恨の情禁じ能はざる所であるが氏の樹てたる赫々の武勳は皇軍戦史に光を放ち芳名は百世に傳はり不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に昇叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 橋 中 勇

輕機關銃手敵陣に突入勇戦奮闘して團河村の華と散る

氏は大阪府北河内郡三郷町の人にして父を熊吉母をナミと云ひ大正五年十月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚寡黙にして不屈不撓遂行せざれば已まざる氣概を有し不言實行の人であつた。昭和六年三月三郷小學校高等科を卒業し同七年二月より守口郵便局電報配達夫となり同九年八月より大阪市に出で中村鐵工所の職工として勤務し昭和十一年十二月



徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや南雲部隊馬場中隊に屬し輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着するや七月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は暗雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完うした。次で七月二十六日早朝所屬部隊は唐山出發列車に依り同日午後十一時黃村驛に下車し二十七日午後零時五十



分所屬中隊は部隊本隊内にありて黃村を出發し南苑の敵を攻撃すべく行動を起した。當日天氣晴朗無風にして氣温百四十度其の炎熱灼くが如く加ふるに數日來不眠不休の連續と給養の不良とにより疲勞困憊甚しくしかも文餘の高榮繁茂し我が行動は豫想以上の困難であつた。之にも拘はらず將兵一同志氣旺盛南苑に向つて北進中敵は團河村の東方行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り部隊は此の敵を攻撃すべく直ちに展開し攻撃準備を整へた。敵は堅固に陣地を設備し其の前方には深き胸に達する水濠を繞らし重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。中隊は愈々攻撃前進に移り午後二時三十分より戰鬪を開始するや氏の所屬小隊は當初中隊の豫備隊として第一線小隊に跟随せしが氏は文餘の高榮畑泥濘濘を没する運池を物ともせず敵彈雨飛の中を村田少尉指揮下に前進又前進して勇敢に近迫中午後三時四十五分第一線に増加を命ぜられ敵前至近の距離に於て火線に進出するや敵火は愈々熾烈となつたが氏は之を意とせず彈藥補充に奮闘活躍し射手をして彈藥の顧慮なく射撃せしめ且自ら小銃火力を最高度に發揚して輕機關銃の射撃と相俟つて小隊の突撃を準備

し機熟して小隊長愈々突撃命令を下すや氏は分隊長指揮下に率先敵陣地に突入し群る敵を或は突き或は刺し身に數彈を受くるも毫も之に屈することなく敗退する敵に猛射を浴びせつゝ奮戦中無敵敵彈腹部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲とにより午後七時敵に多大の損害を興へてさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏や素と不言實行の人、其の戦陣に臨むや彈雨の下攻撃に彈藥補充に射撃に突撃に克く率先奮闘し輕機分隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。参戦日ならずして河北の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戦玉碎は百戦功なき瓦全に優る。氏が此の一戦に奮戦玉碎して以て開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勲八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 畑 傳之助 連珠河口附近に衆匪と會し寡兵克く之を撃退して遂に北滿の華と散る

氏は兵庫縣氷上郡大路村の人にして父を伊造母をタキと云ひ大正五年七月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性剛毅勇敢業務に熱心忠實にして處事積極的であつた。昭和七年三月大路小學校を卒業其の間大正十四年四月より西宮市中央市場



に三年次で武庫郡早東村大梅商店に一ヶ年奉公し其の後は自宅に於て農業に従事してゐた。昭和十二年一月徴兵として笹山歩兵聯隊に入營足立中隊に編入せられ同年四月所屬隊と共に滿洲に派遣牡丹江省八面通に駐屯次で六月下旬三江省依蘭縣二道河子に移駐し渡滿以來日夜熱心警備に任ぜし外討伐に、警備行軍に、輸送警乘に其の他各種勤務に服し常に積極的  
に活躍精勵し克く所命の任務を完うし七月十日には一等兵に進級した。



七月十四日足立中隊長以下三十名は移駐荷物運搬自動車に搭乗し之を護衛しつゝ午前七時勃利出發二道河子に向ひ途中午前八時三十分頃連珠河口の東南方康油坊東方五百米に達せし時約二百の乘馬匪賊は連珠河口方向より南進し我が左前方三百米の地點を通過中なるを發見した。依て中隊長は直ちに此の敵を攻撃すべく自動車を停止せしむると共に尖兵たりし第一分隊をして直ちに下車して我が主力の下車展開を掩護すべく命じた。當時尖兵分隊の列兵たりし氏は尖兵長の命令により直ちに下車したが此の時既に敵彈頻りに飛來せるも之を意とせず迅速機敏に道路左側に陣地を占領し分隊長の號令により直ちに左前方林縁の敵に向つて猛射を開始した。敵亦逐次下馬して我に對し熾んに其の射撃を浴びせ來りしが氏は毫も之に屈することなく寡兵克く衆敵に對し沈着正確每發必中の射撃を以て其の火力を最高度に發揚し其の有効なる射撃により優勢なる敵の攻撃を拒止し主力の下車展開を掩護しつゝ奮戦し中隊主力も展開して戦闘を開始するや敵は攻撃を斷念し主力は逐次退却を開始せし模様なりしも其の一部は尙優勢を待みて頗る頑強に抵抗し容易に怯むとも見へざりしが時間

の經過に伴ひ我が的確なる射撃效果現はれ敵は漸次動搖の色を見せ遂に周章先を争ふて乘馬し西南の山地に逃走するに至つた。依て中隊は之を追蹙すべく攻撃前進を命じ氏も亦前進を開始するや其の利那無念敵彈下額部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

夫れ氏の警備地たる北滿は南中北支戦線の如く世の注目を牽くこと尠きも其の實外は滿蘇國境一觸即發の危機に備へ内は同胞大陸發展上緊要不可欠の治安肅正を要し其の重任と苦難とは蓋し想像に餘ありし所である。然るに此の環境の下氏の北滿警備に就くや其の積極的活躍振りは一般兵の模範ともされて居た。偶々連珠河江附近に於て寡兵優勢の敵匪と遭遇するや彈雨の下沈着勇敢每發小銃兵の本分たる正確なる射撃を以て衆敵を制し中隊戦勝の素因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ斃るゝまで重任を果さんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。渡滿幾何もなく北滿の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は萬世に亘り青史を飾り其の芳名は千載に誦はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し一家の前途に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 林 權 兵 衛

#### 孝悌の勇士長城線及北部山西に奮戦し遂に崞縣の激戦に玉碎す

氏は東京市向島區吾妻町の人にして父を猪太郎母をまきと云ひ大正四年一月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く又兄妹思にして一意業務に勉勵し未だ曾て享樂の巷に足を踏み入れし事なく孝行息子の評判近隣に高



かつた。昭和二年三月向島小學校尋常科を卒業し其の後は家庭に在りて實兄と共に父の業たる銅鐵商の業務を手傳ひ柔順熱誠克く父母に孝養を盡して居た。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵し初年兵の模範として上下の信頼を受けて居た。其の後滿洲派遣部隊に屬し齊々哈爾濱に派遣され同地方の警備に服務して居た。



北支の風雲愈々急を告ぐるや昭和十二年七月下旬湯淺部隊江上中隊に編入せられ第一小隊第二分隊小銃手として急遽天津地方に出動し新城揚惠莊並に革中橋等に於て傲岸不遜の支那軍及抗日分子を掃蕩して天津地方の治安を維持して居たが八月十三日所屬部隊は特別任務に基き熱河多倫を経て十七日張北に到着し同地方の警備に任ずるに至つた。所屬中隊は八月二十日より張北の南方外長城線の敵陣地に對し總攻撃を開始したが此の際所屬中隊は兵團豫備隊を命ぜられ司令部及砲兵諸隊の直接警戒に任じ二十二日より萬全方向への追撃戰闘に於ては待望の第一線部隊に屬し熾烈なる敵の十字火を浴びつゝ氏は沈着機敏に行動し大いに中隊の任務達成に寄與し又二十五日よりの張家口攻撃に於ては所屬中隊は小場附近の敵陣地を攻撃したが連日の山岳戰に疲労困憊しあるにも拘はらず氏は志氣旺盛第一線小隊に屬し團壁に據る頑敵に對し豪膽機敏に肉薄し續け様に正確迅速なる射撃七十發も撃ちまくりに敵に多大の損害を與へ中隊の戰勝に貢獻せる所甚大であつた。

所屬部隊は其の後敵を追撃して大同方向に前進したが九月六日には大橋上南北の線に陣地を占領しある敵に對し中隊の

右第一線小隊内にありて勇戦し翌七日より數日間に亘る天鎮城の攻撃及十一日よりの樂業堡附近の戰闘に参加し常に上官の命令意圖を體し積極機敏に行動し以て中隊の任務遂行を容易ならしめた。

九月十三日より約十日間は大同に在りて諸種の警戒勤務に服し同月廿四日より下社村附近双子山の天險に據る頑敵攻撃に方りては第一線小隊内に在りて率先果敢なる攻撃を行ひ遂に之を撃破し敵を猛追して蔚縣方向に殺到した。斯くて所屬中隊は十月四日前衛部隊として午前三時十分蔚縣西北方隘路附近に進出して下凹村部落を攻撃したが氏は第一線列兵として熾烈なる敵火を物ともせず勇躍業に先んじて要點を占領し以て本隊の進出を容易ならしめた。次で翌五日蔚縣外城の西北角を攻撃するに方りては氏等は平坦開闢の地形に於て終始猛烈なる敵火を浴びつゝ敵前五十米の距離に接近し攻撃陣地を構築し六日薄暮より友軍砲兵並に重機關銃の支援射撃下に午後六時五十分を期し果敢なる突撃を敢行した。然るに敵亦必死の防戦に勉め附近に埋設せる地雷は各所に爆發し城壁上よりは手榴彈の雨を降らせ小銃機關銃の十字火は身邊に蜚集し物凄き戦況となつたが氏は之に屈せず命を的に勇猛果敢に敵陣地に向ひ突進中憎くや城内より飛來せる砲彈に依り臀部に砲彈破片創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬部隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り敵が半歳を費して増強せる山西方面屈指の堅壘も遂に之を奪取し感激の日章旗をひるがへした。

氏は平素より孝悌にして忠誠の人、今次聖戰に参加するや懸軍幾百里南馳北走峻峻なる山岳地帯の作戦に従軍し常に必勝の信念に燃えつゝ率先難局に當り不屈不撓頑敵を粉砕して所屬中隊戰勝の一要因を作り惜しくも玉碎するに至つた。定に是軍民一般の鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠誠にして有爲の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績は天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。



氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 早瀬 頼美

#### 集中火を冒し傷つくも尙彈藥を搬送して遂に砲側に斃る

氏は岡山縣阿哲郡新砥村の人にして父を孫太郎母を君代と云ひ大正五年六月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性沈着勇敢事に當り責任觀念強く不屈不撓爲し遂げざれば已まざる氣概を有してゐた。昭和八年三月本郷小學校高等科を卒業引續き青年學校に入校同十一年三月同校を卒業し昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵特に射撃に長じ賞状を附與せられた。

支那事變起るや南雲部隊聯隊砲中隊に屬し六番砲手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し七月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は暗雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完了した。次で七月二十七日團河村附近の戦闘に際し所屬中隊は第二大隊に配屬せられ玉村北方十字路に陣地を占領するや氏は敵彈雨飛の中を灼くが如き酷暑を冒し行動困難なる丈餘の高梁畑中に於て勇敢に彈藥補充に奮闘し又萬難を排して中隊長との間の連絡に任じ克く其の任を完了し遺憾なく聯隊砲の威力を發揚せしめた。

七月廿八日南苑の攻撃に際し所屬中隊は拂曉攻撃の爲午前四時より行動を起し攻撃準備の練たる美順莊北方地區の豫定陣地向つた。然るに夜半豪雨の爲道路泥濘殊に地形の障礙甚しく且敵の集中火を受け前進の困難其の極に達せしが氏は克く分隊長指揮下に勇敢且積極的に進入路の開設砲の分解搬送驛馬の誘導等に任じ分隊をして豫定の時刻に所命の陣地に



進入することを得せしめ午前七時四十分計畫の如く射撃準備を完了することを得せしめた。敵は堅固に陣地を占領し各種火器を配備し頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我が攻撃地區は丈餘の高梁連續繁茂し行動頗る困難なりしのみならず當日は天氣晴朗無風にして氣温は百四十度に上昇し炎熱灼くが如く我が攻撃の困難は豫想以上であつた。所屬中隊は之等萬難を排し午前八時十分より射撃を開始し逐次敵を制壓して第一線歩兵の前進を容易ならしめつつありしが恰も南苑

兵營南方射撃場の側防機關銃に對し射撃を開始するや不幸我が陣地は敵の發見する所となり正面及側面より猛烈なる集中火を被るに至つた。しかし氏は毫も之に屈せず約二百米後方に位置せる彈藥小隊より砲側に彈藥を補充すべく彈雨を冒し高梁畑を疾驅して彈藥を運搬中敵の小銃彈左大腿部を貫通し其の場に倒るるに至りしが剛氣の氏は之に屈せず再び起ちて携行せる彈藥を砲側に搬送し終るや出血多量の爲再び起つ能はず體で收容せられて衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく八月三日天津陸軍病院に於て遂に河北の華と散つた。しかし中隊は氏等の勇戰奮闘により聯隊砲の威力を遺憾なく發揮し午後一時十五分には第一線歩兵をしてさしも頑強なりし敵陣地を占領することを得せしめた。

氏の戦陣に臨むや彈雨の下困難なる天然地形を克服し或は砲の搬送に或は陣地進入に或は彈藥補充に勇戰奮闘其の本分を完うして遺憾なかりしのみならず集中火の下身の危険を顧みず傷つくも屈せず其の任務を果し再び起つ能はざるに至つて已む。實にかくの如きは旺盛なる責任觀念の發露にして是畢竟一身を君國に捧げて任務に斃れんとせる盡忠至誠の顯現



と謂ふべきである。参戦幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮闘玉碎して以て樹てたる披群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るることであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 橋 本 潔

#### 忠良なる輕機關銃手臨終尙分隊長の身を案じて馬落坡に散華す

氏は兵庫縣保保郡半田村の人にして父を芳松母をこむめと云ひ大正三年七月五日に生れ未だ獨身であつた。性快活眞摯にして氣概に富み義務心厚かつた。昭和六年三月半田小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業を手傳ひ孝養を盡して居た。氏は小學校在學間より運動選手として名聲を博し青年時代にも郡青年大會の競技に出場し好成績を挙げ明朗進取の氣風を自然の間に涵養するを得た。昭和十二年一月徴兵として姫路歩兵聯隊へ入營し熱心軍務に精勵し將兵一同の愛顧を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月沼田部隊米澤中隊に編入せられ第二小隊第三分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を進出したが所屬中隊は三間房四黨口の戦鬪を経て陳宮屯の守備に任じ九月七日以來馬廠本陣地の總攻撃には九日午後十一時行動を起し丁莊の敵陣地を東南方より攻撃の爲同夜午前四時四十分より攻撃を初めた。敵は陣前の高梁畑を清掃して短小射界を設け又陣地の直前には地雷、水濘及鐵條網を

設け三線の抵抗線を占據して居たが我が第一線中隊が隱密に敵陣地に肉薄するや敵の第一線部隊は俄然熾烈なる火力を集申し氏等は極めて危険界に曝さるるに至つた。所屬中隊は第一線中隊に跟随して一舉に第一線、第二線陣地を突破し更に第三線陣地たる滕莊子を攻撃した。此の時正面及側面より敵の重輕機關銃の猛射を身邊に浴びたが氏は第一線分隊の直後に跟随し第一線分隊が突撃の爲正面稀薄となるや氏は獨斷第一線に増加し一舉敵陣地に突入り戦勝獲得に一素因を與へた。

其の後所屬部隊は滄州陣地の前進陣地たる豆店攻撃の爲九月十九日午前三時雪官屯を出發したが此の際氏は所屬小隊の輕機關銃分隊へ編入替となり勇躍前進した。敵は既設陣地に據りて十字の砲火を浴びせて來たが氏は克く分隊長の掌握下に所命目標に對し正確迅速なる猛射を加へて敵を壓倒し以て小銃分隊並に迂回分隊の攻撃動作を容易ならしめ愈々突入に方りては突撃部隊に跟随して逸早く要點に進出し敵に至大の損害を與へ輕機關銃の全威力を發揚した。

滄州一帶の堅壘に對する總攻撃の機熟するや所屬部隊は敵陣地の一鎖鑰たる馬落坡を攻略すべき命を受けた。部隊長は一同を集めて嚴かに「命に依り今夜馬落坡を夜襲する、亡き戦友の弔合戦だ、宜しいか、予は諸氏の忠勇に信賴する、骨は戦友が拾つてくれる、名譽ある此の血染めの軍旗に耻ぢぬ様確かりやつて呉れ」と悲壯の訓示を與へた。一同は皇居を遙拜し軍旗に訣別して水盃を舉げた。所屬中隊は尖兵中隊を命ぜられ氏は其の尖兵となつた。「では尖兵から前へ」と中隊長の一令、九月二十一日午後八時半頃勇躍豆店を出發した。下弦の





月は中天に懸り秋風颯々高梁の葉末を波打たせて居た。突如路上斥候が展望臺を守備する二十數名の敵兵を發見した。此の時氏は逸早く適切なる地點に進出して猛射を加へ以て我が斥候の突撃を容易ならしめ尙收退する敵を射撃して損害を與へ敵前七八百メートルの線に攻撃準備の陣地を占領した。之より前方は泥濘膝を没し攻撃前進極めて困難なる地形となつた。所屬大隊は今や攻撃前進の諸準備を完了し午後十一時を期し前進を起した。匍匐、躍進、幾度か泥濘の爲銃の機能を害したが氏は沈着機敏に故障を排除して攻撃前進を続け午前三時半頃敵前百五十米に達し彼我の戦闘は最高潮に達した。敵陣地全般の關係は我を包翼せる關係に在りて其の十字の銃砲火は嵐の如く飛來し其の彈着も正確にして遺憾ながら我が第一線は死傷續出し苦戦となつた。氏は之に屈せず克く分隊長の命に従ひ攻撃を續行し一進一止敵陣地に近迫し有効適切なる射撃を浴びせて居た。折しも後方に敵の一砲彈落下炸裂し氏は右脚の足首に砲彈破片創を受けたが依然として射撃を續けた。折柄「躍進！」と豫令が響いた。氏は漸く「分隊長殿！一寸足をやられました」と報告した。卷脚絆は眞紅に染まつて居た。卷脚絆を解けと分隊長が指示したが「大丈夫です」と川を渡つて二三十米前方の堆土に取りつき猛射を加へて居たが此の時敵の輕機關銃の集中火を受け腹部に二弾を受けて打倒れた。分隊長等は今や將に突撃に前進せんとする矢先であつた。氏は聲も途切れ／＼に「分隊長殿！氣をつけて行つて下さい」の一語を残して息絶えた。分隊長を初め戦友等は氏のやさしき心根と悲壯の最後と言ひ知れぬ感激と復讐の念に燃え破竹の勢で敵陣目がけて突入し中間の陣地を占領するを得た。氏は忠誠にして慧敏の人、參戰以來泥濘と高梁畑の中に奮戦し或る時は不眠不休の辛酸を忍び或る時は身動きも出來ぬ彈雨の中に毅然として己か職分に邁進し誠意上官の命ずるがままに卓越せる射撃技能を發揚して所屬中隊の爲戰勝の途を拓いた。眞に良兵の龜鑑と謂ふべきであつた。今や氏が温顔壯容に接すべくもなく痛惜の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて永く其の芳名を轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き

加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 波戸場正友

#### 重機裝填手沈着剛膽每戰奮闘惜しくも大册河畔に散る

氏は朽木縣下都賀郡生井村の人にして亡父を勇吉母をキイと云ひ大正二年五月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして沈着剛膽事に當り忠實勤勉爲し遂げされば已まざる氣概があつた。昭和三年三月網戸小學校高等科を卒業し其の後には家業に従事し傍引積き網戸青年訓練所に入所し同七年三月其の課程を修了した。昭和八年十二月徵兵として宇都宮歩兵聯隊に入營第二機關銃中隊に編入同月滿洲に派遣せられ泰安鎮に駐屯該地附近の警備並に附近の討伐に参加し其の功に依り勳八等に叙せられ同十五年五月内地歸還の上歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第一機關銃中隊に屬し第二小隊第三分隊二番銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十一日榆堡鎮南方地區の戦闘に際しては所屬小隊は大隊の右第一線たる第一中隊に配屬せられて戦闘に参加し十四、十五日南公由附近の戦闘には土壁に據り頑強に抵抗せる敵を撃滅して第一線歩兵の攻撃を容易ならしめ續いて同日拒馬河の渡河戦闘に際し所屬小隊は渡河掩護の任務を受けた。此の時氏は彈丸雨と注ぐ高梁畑中を分隊長指揮下に勇敢に銃を搬送し午後一時半一擧渡河點上流五十米附近河岸の前端に進出し對岸の敵重火器に對し直ちに暴露陣地に進出して射撃を開始した。我が急襲射撃を受けたる當面の敵は忽ち沈黙したるも全敵線よりの



射撃は一齊に我に集中せらるゝに至つた。併し氏は其の暴露せる身邊に敵の集中火を受けつゝも沈着剛膽平然として迅速確實に一意彈藥を装填し克く射手と協力して其の射撃效力を發揚せしめ第一線歩兵の至難なる強行渡河を容易ならしめた。次で北義安の戦闘を経て九月二十一日大冊河の渡河戦闘は開始せられた。



大冊河は河幅約百數十米水深一米三、四十糧敵は此の障碍を利用して河中には水雷を敵岸には地雷を敷設し其の後方には鐵條網及水濠を繞らし而も陣地は數線に設け掩蓋を設備し側防處置を完備し極力我が進撃を阻止すべく待構へてゐた。従つて此の堅固なる陣地に對する晝間の攻撃は徒らに損害を多くするのみなるを以て所屬部隊は夜襲に依り之を奪取するに決し直ちに渡河準備に着手した。此の時所屬中隊は當初河の左岸に在りて大隊の戦闘に参加しありしが第一線の前進に伴ひ渡河を開始した。氏は敵彈嵐の如く注ぎ來る中を勇敢に銃を擔ひて濁流を渡り敵岸に近づくに従ひ水深は身長を没するに至りしも遂に之を押し切り對岸に取り着くや一齊に河岸臺上に陣地進入し射手と協力して直ちに射撃を開始し歩兵の突撃に協力せしが銃口より噴き出す火光の爲に忽ち敵に發見せられ其の全線より集中射撃を被り死傷續出するに至つた。併し氏は毫も之に屈せず益々沈着奮闘全身を敵陣地に暴露せる儘彈藥の装填に餘念なく射手と協力して火力を最高度に發揚し當時我が右翼方面に在つて最も猛威を逞しふし第一線歩兵の突撃前進を妨げつゝありし敵の掩蓋機關銃を撲滅し其の結果我が右翼方面の攻撃は漸く進捗し始むるに至つた。小隊長は此の好機に乗じ更に陣地を前方に推進すべく前進を命ず

るや氏は直ちに後棍を持ちて將に躍り出でんとせし刹那無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し大隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲により敵に多大の損害を與へ午前十一時にはさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏や義に滿洲事變に功を樹て今次亦召されて戦陣に臨むや毎戦彈雨の下沈着剛膽克く射手と協力一體となり皇軍機關銃の威力を發揮し大隊戦勝の端を拓きて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ斃るゝまで戦はんことを盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。参戦幾日ならずして氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戦力闘して以て樹てたる披群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に昇叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 馬場雄三

#### 清河鎮の決死砲兵分隊員重傷に屈せず奮戦し戦勝の端を拓く

氏は佐賀縣西松浦郡有田村の人にして父を雄一亡母をりると云ひ大正五年九月三十日に生れ未だ獨身であつた。性剛健不撓實直にして母及長兄を喪ひし後は家兄として克く父に孝養を盡し弟妹を勞はり一家和樂の中樞となつて居た。昭和六年三月西松浦郡外尾高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて農業に精勵する傍外尾公民學校へ通學して居た。同校は後に有田村立實業青年學校と改稱されたが氏は多忙なる家業の裡に萬難を排して熱心勉勵遂に同校研究科二ヶ年の課程を修



了した。其の間氏の友人等は近所の有田工場の職工となり動もすれば輕佻浮薄の風習もありし中に毅然として汗みどろの仕事を離さず二町歩に近き田畑を耕し又餘暇を以て土木工事の日傭となり又往復十五里の道を連日荷車を曳きて蔬菜販賣に出かける等黙々として父を扶けて居た。昭和十二年三月徴兵として滿洲錦縣砲兵隊に入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。



同年七月七日蘆溝橋事件勃發するや氏は入江砲兵部隊土岐中隊に編入せられ第一分隊三番砲手として勇躍屯營を出發し山海關天津通州を経て板橋村に前進し物情騒然たる情勢に備へて居た。七月廿八日我が軍は平津地方より宗哲元隸下の支那軍を驅逐するに決し所屬部隊は奈良歩兵部隊の後方に續行し清河鎮方向に向ひ行動を起した。附近の地形は見渡す限り高梁に掩はれて全く通視を許さず部隊の指揮運用極めて困難であつた。而も酷熱百二十餘度に達し飲料水を欠き連日連夜の強行軍と相俟ち人馬の疲勞甚しかつたが負けぬ氣の氏は克く分隊長を輔け取者砲手に協力して一意前進した。午前九時稍々過ぎ俄然前方に方り銃聲響くと思ふ間もなく氣たゞましく輕機關銃の音も手に取る如く聞えて來た。所屬中隊は命に依り後屯南側に放列を布置し清河鎮郊外の永泰莊附近の敵に對し火蓋を切つた。敵は一たまりもなく退却して清河鎮の既設陣地に遁入したが友軍歩兵は高梁内に潜伏せる敵より狙撃を受け損害を受けつゝも敵を尾撃し又所屬砲兵隊は永泰莊附近に陣地を變換した。此の際氏の中隊は所屬部隊陣地の最左翼たる永泰莊西南側に進出したが高梁に妨げられて敵陣地

を確認することは出来なかつた。我が第一線部隊は敵前五十米、高梁畑の縁端まで出たが前面の圍壁に在る無數の機關銃及良好なる觀測所を有する迫撃砲より猛烈なる銃砲弾を浴びせられて逐次死傷者が増加し萬策盡きて大地にかちりついで居た。此の時所屬中隊長は悲壯の決意を以て第一小隊長遠藤准尉に氏の所屬分隊を指揮せしめ第一線歩兵戰鬥に直接支援を命じた。小隊長以下は九死に一生だも期待し得ざる難局に直面し重大責務を擔ふに至つた。午後二時頃氏は「では唯今より出發します」と勇躍死地に赴いたが「成功を祈るぞ!」と云ふ中隊長の眼には涙が光つて居た。氏は途中から臂力前進に移つたが砲車の進む所、一列動く高梁の波、暫しも息まぬ敵銃砲彈の亂射亂撃、其の射弾は氏等の身邊に蟻集して居た。豪膽不撓の氏は之に屈せず一意畑の縁端目がけて前進を續けた。小隊長は縁端近き所に砲を止めて發射の用意を完うせしめ尙一部の要員を縁端に招いて敵狀並に射撃目標を示し砲口をそつと縁端に押出した。轟然として火蓋を切つた我が砲弾は見事に命中土壘と共に敵機關銃を吹つ飛ばした。矢つぎ早の猛射に敵の機關銃二銃及迫撃砲三門を撲滅し次で突撃路四條を開設するを得た。我が歩兵隊は欣喜躍今や突撃に移らんとする氣配を見て取りし左前方の敵機關銃は死物狂ひとなつて我が第一線を猛射し再び茲に多數の死傷者を出すに至つた。所屬小隊長は憤然として之に射向變換を命じ猛射を加ふる中右前方に新たなる敵の機關銃及迫撃砲現はれ氏等の分隊に熾烈なる十字火を集中し來り之が爲氏は無念にも下腿骨々折の貫通銃創を受けたが氏は後退の命をも耳に入らず第四弾を五番砲手より受取つて裝填せんとする一刹那再び下腹部に砲弾破片創を受け戦友數名と共に壯烈なる戦死を遂げた。時正に午後四時前後であつた。同方面の我が歩兵大隊は氏等の奮闘と尊き犠牲に依り敵陣地の東南角に突入の好機を與へられ夕陽没せる午後七時半頃清河城の東南角を占領之を確保し感激の日章旗をひるがへすを得た。

あゝ唯一門の此の火砲、何物にも代へ難き至寶であつた。而して氏等決死分隊の決意並に其の奮戦は眞に皇軍砲兵の眞



價を發揚して遺憾なく壯烈鬼神を哭かしむるものがあつた。氏や志操堅確克く孝悌の道を盡し郷黨の模範人物でもあつた。斯かる至誠忠孝の士を早くも聖戦の初期に喪う痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや所屬分隊の偉勳と共に天晴れ皇軍戦史に輝き芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。(MS)

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 羽生 幸治

挺進隊の勇士江南廣福橋に奮闘し臨終尚任務を忘れず

氏は東京市淀橋區西大久保の人にして亡父を要助亡母をせいと云ひ明治四十年七月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性快活にして實直事を行ふや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。大正九年三月茨城縣麻生尋常小學校を卒業し其の後印刷工として實業に就き入營時に及んだ。昭和二年十二月徵兵として水戸工兵大隊へ入營し熱心軍務に勉勵して良成績を挙げ昭和四年十一月滿期除隊となつた。歸郷後は再び印刷工として業務に精勵し歌の上手な明朗な職工として諸人の愛顧を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年十月應召今田部隊若山中隊に編入せられ第一小隊第四分隊兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は十一月下旬江南の一角に到着し上海戦線に於ける敵の退路を遮断すべき任務を有する部隊に配屬せられ十一月十一日未明より李宅に於て水上輸送の諸材料を整備したる後所屬小隊は決死挺進隊となり翌十二日敵の背後に通ずるク

ロータを通航した。此の附近の地形はクロータ錯綜して網の如く之が爲陸上の前進は小敵に遭ふも阻止せらるべき状態であつた。同日夕刻所屬小隊が廣陳鎮附近に差しかかるや俄然優勢なる敵部隊に遭遇し急霰の如き猛射を受けた。小隊長は速かに上陸を命じ攻撃の爲據點の占領を命じた。氏は敵彈雨飛の中を物ともせず飛鳥の如く上陸し敵前約百米に於て掩體を構築し以て小隊の展開を容易ならしめた。其の夜敵は業を待んで夜襲して來た。所屬小隊は敵の近づくを待ちて還撃し

た。此の時氏は沈着豪膽克く分隊長を輔佐し百發百中の正確さを以て敵に多大の損害を與へ完全に敵の夜襲を水泡に歸せしめ遠く之を潰走せしめた。



超えて十四日歩兵部隊を折疊舟に分乗せしめ午後十時行動を起し翌朝午前五時頃目指す廣橋附近に到達した。其の間氏は第四分隊の第一機手として舟長を輔佐し其の前進を容易ならしめた。江南の夜は尙明けやらで四圍の地形は暗かつた。突如進路の前方に方り一發の煙花信號が揚がつた。忽ち舟艇群は三面の既設陣地から集中射撃を浴びた。小銃機關銃の銃口は宛ら大蛇の火を吐く如く一連の火花

を散らして物凄かつた。挺進隊長は直ちに上陸命令を下した。氏は舟長と共に迅速に上陸し分隊長の掌握下に入った。所屬小隊は敢然南側の敵第一線陣地に向ひ猛攻し遂に之に突入して頑敵を撃破し續いて第二線陣地の攻撃に移らんとする時無念！一彈飛來氏は致命傷を受け打倒れた。倒れ乍ら氏は「分隊長殿！早く第二線を突破して下さい」との一語を残し護國の華と散つた。所屬小隊は其の後激戦數時間にして第二線陣地を突破し午前九時半頃感激の日章旗をひるがへし爾後



に於ける友軍部隊の上陸を容易ならしめた。

氏は志操堅確にして豪膽機敏の人、今次聖戦に参加するや行動極めて困難なる江南水郷の地に参戦し得意の操舟技能を發揮して敵中深く挺進し敵彈雨飛の中に豪勇機敏常に難局を突破して所屬小隊戦勝の礎石となり遂に惜しくも兇弾に玉碎した。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや皇軍工兵の鑑として皇軍戦史を飾り其の名は永く後世に傳へて芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西山正敏

### 機關銃手奮戦多數の敵を殲し引鐵を握りたる儘團河村に散る

氏は岡山縣眞庭郡中和村の人にして母をはると云ひ大正四年二月二十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚眞面目母に仕へ孝心深く弟を慈しみ業務に着實にして責任觀念頗る旺盛遂げずんば已まざる氣概を有し農村の典型的青年として愛敬せられてゐた。氏は幼にして父を喪ひ爲に大正十四年三月中和小學校尋常科四年を終了と共に退學し母を扶けて家業に奮闘し幼少ながら一家の柱石となりて家運の挽回に専念して居た。昭和十年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に誠實勉勵中隊の模範兵として上官の信頼厚く同十二年六月上等兵勤務を命ぜられた。

支那事變起るや氏は家庭の關係もあり補充要員に内定せしが熱心に出動を歎願して已まず遂に南雲部隊水野機關銃中隊

に屬せられ二番銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着するや七月二十六日迄唐山附近の警備に任じたが當時北支は戰雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し就中隊馬愛護の熱心振は他兵の遠く及ばざる所であつた。七月二十六日早朝所屬部隊は唐山を出發列車に依り黃村驛に下車し南苑を攻撃すべく行動を起した。此の時所屬小隊は尖兵中隊たる第九中隊に配屬せられ二十七日午後零時五十分部隊の最先頭に在りて前進を起した。此の日無風にして氣



温百四十度灼くが如き炎暑を冒し高粱茂る間道を南苑に向つて前進中斥候の報告により敵が團河村東方の行宮南方高地に陣地を占領し

あるを知り尖兵中隊と共に此の敵に對し展開し攻撃準備を整へた。敵は堅固に陣地を占領し深さ胸を没する水濠を繞らし重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。愈々中隊が攻撃前進を起すや此の附近一帯一丈餘の高梁繁茂し且濕地にして機關銃の搬送頗る困難を極めしが氏等は之に屈することなく一意前進し午後二時五十分遂に戦闘を開始せらるるに至つた。此の際氏は勇敢に彈藥補充及小隊長との連絡に活躍し其の後射手を命ぜらるるや敵彈

雨飛の中に克く沈着して正確なる射撃を實施し多數の敵を殲し逐次陣地を變換推進して敵前六、七十米に近接せしが敵は尙頑強に抵抗せしも遂に敵陣地に突撃し該高地を占領するに至つた。然るに敵は各方面より猛射を集中し來り午後四時三十分頃其の一弾は氏の腰部を貫通した。氏は中隊長の激勵の言葉に「大丈夫です」と答へ尙も戦闘を繼續せんとしたが總て身體の自由を失ひ 天皇陛下萬歳の聲を残し固く引鐵を握りたる儘遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏



等の奮戦と尊き犠牲により敵に甚大の損害を與へ午後七時さしも頑強なりし敵陣地を占領することを得た。  
 因に氏の母は氏戦死の報を受くるや村人に對し「何分無學無智なる正敏の事故さしたる手柄も樹てずに居たことはどうも御恥かしく思つて居りました。國の爲に死にました事は何より一家の名譽ですがどんな働きをしたかとそれのみ考へて居ます」と滅私奉公の赤誠を吐露してゐた。

氏は幼にして父を失ひ貧困と戦ひつゝも母に孝養を盡し家運の挽回に努めて居た。然るに今事變に際會するや滅私奉公家を忘れ身を忘れ只管出動を頼み其の戦陣に臨むや彈雨の下勇戦傷つくも闘志を捨てず遂に斃れて後已む眞に忠孝一道の傳統を發揮せる盡忠至誠の人と謂ふべきである。参戦日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜極まりなきも一戦玉碎は百戦功なき瓦全に優る。開戦劈頭奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は不朽に家門を飾り不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇猷を扶翼し奉ると共に老母の將來に尊き加護佑助を垂るることであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 二階堂利輝

#### 良兵良民の砲手江南水郷地帯に奮戦し遂に嘉善郷外に玉碎す(忠烈)

氏は熊本縣菊池郡河原村の人にして父を利徳母をフイと云ひ明治四十五年三月三十一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く不言實行的人にして情義に敦く村内の模範青年として信望を受けて居た。大正十三年八月河原小

學校高等科第一學年在學中家事の都合に依り退學し爾來家庭に在りて父母を扶け農業に従事して居た。昭和八年一月徴兵として臺灣山砲兵聯隊に入營し誠意軍務に勉勵し克く上官の命に従ひ在營間は父母に一錢の送金をも請求する事なく勤儉身を修め満期除隊には給料の貯蓄金を以て軍服を調達し外に貯金約七拾圓を残して歸郷した。歸郷後は再び農業に精勵又郷里の青年團支部長及青年貯金會の會長に推舉せられ率先垂範後輩青年を善導誘掖して郷土の風教に大なる感化を與へ



た。昭和十二年一月志す所ありて日本製鐵株式會社八幡製鐵所に就職し日未だ淺きにも拘はらず社内の關係者は勿論附近居住の人々よりも模範人物として愛敬を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年十月應召原田部隊吉岡中隊に編入せられ第二小隊第三分隊砲手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は十一月上旬江南の一角に上陸し上海戦線の背後を脅威する如く松江青浦嘉興方面に向ひ行動を開始した。戰場は見渡す限り一望千里の平野にてクリーク縱横に錯綜し到る所泥濘膝を没する悪路にして火砲材料を駄載せる馬匹は或は泥濘馬腹に達して動けぬもの或は疲勞其の極に達して倒るゝもの等を生じ全く豫想外の苦難に直面した。併し氏は率先勞苦を厭はず駄載物を卸下搬送し或は馬匹を扶けて其の顛覆を防ぎ或は附近の高梁を採集して悪路を修復する等分隊の前進續行に甚大なる貢獻を與へた。次で十一月九日楓涇鎮附近の敵陣地攻撃に方りては熾烈なる敵火を物ともせず勇敢機敏に放列を布置し敵のトーチカを次々に破碎し更に夜に入るも後方重要點に適切なる交通遮断の射撃を行ひ以て我が第一線歩兵の戦勝獲得を容易ならしめた。



越えて十二日所屬中隊は某歩兵大隊長の隸下に入り敵陣地攻撃の目的を以て午前八時行動を起し嘉善近傍饒家濱西南方の無名部落に向ひ前進した。敵はクリークを利用して障礙物となし其の對岸にトーチカ陣地を作り迫撃砲及多數の重砲機關銃を配置し我が軍の近接を待ち構へて居た。午前十一時半頃所屬中隊が豫定の陣地進入を行はんとするや敵の迫撃砲及機關銃は猛射を集中し來り忽ち數名の馭者と數頭の駄馬を斃された。中隊長は勵聲臂力搬送に依る陣地進入を命じた。氏は此の時分隊長を輔け果敢なる行動を以て無名部落の北端附近に在る一軒家の西側に分隊の陣地進入を完了した。當時放列陣地附近は篠つく雨の如き小銃機關銃の猛射と鈞瓶撃ちの迫撃砲彈の彈幕に依り土砂爆煙を以て覆はれ音聲さえ通ぜず隣兵の顔もわからぬ中に氏は克く分隊長の意圖を察し三番砲手として火砲材料の搬送並に射撃準備に死力を竭しての活躍は眞に鬼神の働きとも謂ふべきであつた。斯くして中隊は午後二時より轟然たる第一發に引續き疾風迅雷の猛射を浴びせて次々と頑敵を壓倒震駭し夕間包む午後六時半頃豫定の射撃任務を終了した。其の夜午前一時所屬中隊は再び砲撃を開始した。當時中隊觀測所は放列陣地の右前方約六百米の位置に設けられ電話連絡に依り射撃指揮を執つて居た爲先任の土橋小隊長は砲側通信所に於て射撃號令を傳達しつゝ小隊を指揮し古川第二小隊長は自己位置を移動して先任小隊長との連絡を緊密ならしめんとしたが兩小隊間に介在する地物に妨げられた爲氏を選んで第二第三分隊の中間に設けたる壕内に位置せしめ選傳兵たらしめた。氏は正確機敏に射撃號令の傳達並に兩小隊長間の連絡に遺憾ならしめし中隊の戦闘能力を最高度に發揚せしめつゝあつたが憎むべき敵の迫撃砲彈は氏の直前に落下炸裂し右頸部及胸部腹部に重傷を受け微かにも「萬歳」の一語を残して壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り猛砲撃を繼續して敵陣地を震駭し歩兵戦闘に適切なる協力と與へ嘉善附近の敵を徹底的に撃破し以て江南戦局の進展に重大なる影響を與へ時の軍司令官より感状を授けられた。

氏は夙に良民良兵の譽高かつたが今次聖戦に臨むや生死を超越し報國の赤誠燃ゆるが如く行動極めて困難なる江南水壕地帯に難局を打開し又慘烈なる戦況下に毅然として其の職分を完遂し遂に護國の華と散つた。今や氏が壯容慈顔に接すべくもなく痛歎哀悼を禁じ得ずと雖も其の功績たるや皇軍砲兵の鑑として皇軍戦史に光彩を放ち其の芳名は永く後世に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 細砂重一

#### 擲彈筒彈藥手毎戰奮闘遂に姚官屯の陣地直前に散る

氏は鳥取縣岩美郡成器村の人にして父を重吉母をひなと云ひ明治四十五年七月十五日に生れ妻雪子との間に一子弘子を擧げた。資性温順業務に忠實熱心にして爲し遂げざれば已まざる氣概を有し郷黨の模範青年であつた。昭和二年三月成器小學校高等科を卒業し其の後は家業に従事しつゝ青年訓練所に通學し同七年十二月其の課程を修了した。昭和八年一月徵兵として鳥取歩兵聯隊に入營し同年二月所屬隊と共に滿洲事變に出動し同年十月まで討伐及警備に奮闘活躍し其の功により勳八等に叙せられ同九年十一月滿期除隊し其の後は家業の傍青年團幹部として團の向上發展に盡瘁してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊第八中隊に屬し第一小隊擲彈筒彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し爾後息つく暇もなく連日泥濘惡路飢渴の難行軍を續けて津浦沿線を南進し九月上旬には馬廠西側の諸要地を逐次席卷し漸次滄州に向ひ猛進した。此の間氏は克く飢渴を忍び困苦に耐へ疲勞困憊其の極に達するも



堅忍克く搜索警戒の任を完うし戦闘に當りては勇敢に奮戦以て中隊の任務達成を容易ならしめた。次で滄州附近の攻撃開始せらるゝや所屬中隊は二十一日午後六時より人合庄の敵陣地に向つて攻撃を實施した。氏は戦闘開始と共に敵の猛烈なる自動火器の射撃を物ともせず分隊長指揮下に一意勇敢に前進し其の射撃に際しては筒手と協力一體となりて擲弾筒の威力を發揮して敵の自動火器を制壓し斯くして逐次敵に近迫し午後十一時愈々突撃に際しては率先々頭に立ちて突入敵數名を刺殺し中隊は遂に該地を占領した。然るに午後十一時十分及午前

一時の二回に亘り敵は夜襲して來た。此の時氏は烈しき敵弾の下遺憾なく擲弾筒の威力を發揮し敵に多大の損害を與へ遂に敵は敗退するに至つた。



九月二十三日所屬中隊は大隊の第一線となり友軍砲兵三分間の集

中射撃を終ると共に午後五時姚官屯の敵陣地に向つて攻撃を開始した。敵は長日月を費して堅固に陣地を構築し多數の掩蓋機關銃座を設備し其の陣地前には鐵條網及幅三米深さ四米水深一米の水濠を繞らし極力我が前進を阻止すべく待ち構へてゐた。中隊攻撃前進を起すや敵は果して電線如く其の射撃を浴びせ來りしが氏は第一線小隊内に在りて之を物ともせず分隊長指揮下に率先して勇敢に前進し其の停りて射撃するや筒手と協力逐次敵の自動火器を制壓又は撲滅し斯くして高粱大豆粟等の畑を一進一止して遂に午後十時敵前五十米の第二線水濠に達した。當夜下弦の月は物凄く牙え渡れる月光の下壕内水中にあること六時間冷氣身に徹する中に我が工兵隊による鐵條網破壊を今や遅しと待つてゐた。愈々午前四時突撃路開設せらるゝや擲弾筒

分隊は眞先きに壕を進出して射撃陣地を占め敵の機關銃目がけて我が突撃の掩護射撃を開始した。氏は猛烈なる敵火の下更に屈せず突撃點附近の機關銃に擲弾の雨を浴びせ其の制壓下に小隊は突撃に移り敵陣地前二十米に達せし時敵は死物狂ひに無數の手榴弾を投擲せる爲我が死傷は續出するに至つた。此の時擲弾筒分隊は機を失せず他の分隊に續いて發進し氏は其の戦闘慘烈の間に猛烈果敢敵陣地目掛けて突進し敵陣地前十五米の地點に達せし時無念左胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより惡戦苦闘の後東天白む頃さしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏郷に在るや一村の模範青年と謂はれ曩には滿洲事變に参加して功を樹て今次再び召されて戦陣に臨むや毎戦彈雨の下活躍奮闘克く筒手と協力し遺憾なく擲弾筒の威力を發揮し又前進に突撃に常に奮戦力闘して中隊の戦勝に大なる貢献を爲した。實に斯くの如きは敵弾の下家をも身をも打忘れ唯々一身を君國に捧げ斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。征戦の初期氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に昇叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 本莊喜之助

## 孝子決死奉公の決意堅く毎戦奮闘遂に姚官屯の陣前に散る

氏は兵庫縣養父郡宿南村の人にして亡父を新藏母をけいと云ひ大正四年八月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして友情に厚く殊に親孝行であつた。氏は又業務に熱心にして遂行せざれば已まざる氣概を持つて居た。昭和五年三月宿南村小學校高等科一年を修了して神戸に出て川崎造船所に入り約一ヶ年勤務の後某料理店に奉公し入營時に至つた。昭和十年十二月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵翌十一年十二月一等兵に進級した。

支那事變起るや長野部隊第八中隊に屬し輕機關銃第三彈藥手として勇躍征途に就いた。其の出陣に當り遺言狀を母に渡し又故國出發時の書面には「御國の爲存分働いて一命を捨てる考へであります。今名譽の戦死をしても別に心残りはありません。此の手紙が最後で皆様と顔を見合はせることは出来ないかも知れません。兄上私の御頼みとして後に残る母上の事はいろ／＼御心配かけぬ様に(中略)名譽の爲一命捨てた後は花の一本も手向けて下さい。皆様より一足先に行きあの世で父と楽しく待つて居ります」とあり一死奉公生還を期せざる覺悟牢固たるものがあつた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し爾後泥濘飢渴炎熱の難行軍を續けて津浦沿線を南進し九月上旬には馬廠西側の諸要地を逐次席卷しつゝ滄州に向ひ前進した。此の間氏は堅忍不撓有ゆる困苦に耐へ戦闘に當りては奮戦克く其の任を完うし以て中隊の任務達成を容易ならしめた。次で九月滄州附近の戦闘は開始せられ所屬中隊は二十一日午後六時より人合庄の敵陣地に向つて攻撃を實施した。氏は戦闘開始せらるゝや敵の猛烈なる自動火器の射撃を受けつゝも之を物ともせず分隊長指揮下に一意前進し其の射撃に際しては彈藥の運送に活躍し又比隣分隊との連絡に努め斯くして逐次敵に肉薄し午後十一時愈々突撃に際しては率

先々頭に立ちて突入し遂に中隊が敵陣地の獨立家屋を占領するや午後十一時四十分及午前一時の二回に亘り敵は夜襲し來り其の第二回目には中隊は包圍せらるゝに至りたるも能く之を撃退した。其の際氏は烈しき敵彈の下克く彈藥手たる任務を完うし遺憾なく輕機の威力を發揮せしめ敵襲撃退に大なる貢獻を爲した。



續いて九月廿三日所屬中隊は大隊の第一線となり友軍砲兵三分間の集中射撃を終ると共に午後五時姚官屯の敵陣地に向つて攻撃を開始した。敵は長日月を費して堅固に陣地を構築し多數の掩蓋機關銃座を設備し其の陣地前には鐵條網及幅三米深さ四米水深一米の水濠を繞らし極力我が前進を阻止すべく待ち構へてゐた。中隊攻撃前進を起すや敵は果して電報の如く其の射撃を浴びせ來りしが氏は第一線小隊火線分隊内にありて之を物ともせず分隊長指揮下に率先して勇敢に前進し其の停りて輕機の射撃を實施するや危険を冒して彈藥の運送を圓滑ならしめ我が輕機の猛烈なる射撃に些の支障なからしめた。斯くして高粱大豆及粟等の畑を一進一止遂に午後十時敵前五十米の第二線水濠に達し茲に我が工兵に依り鐵條網を破壊するを得た。當夜下弦の月は物凄く冴え渡り其の月光の下水濠内にある事六時間冷氣益々加はる中に突撃の時刻到來を今や遅しと待つた。愈々午前四時突撃開始迫るや輕機分隊は中隊の先頭に立ちて壕外に進出し射撃陣地を占めて突撃の掩護射撃を開始した。氏は猛烈なる敵火の下更に屈せず勇敢に彈藥の運送に任じて輕機の火力を最高度に發揚せしめ其の制壓下に小銃分隊は突撃に移り敵陣地前廿米附近に達するや敵は死物狂ひに無數の手榴彈を投擲し爲に我が死傷續出する



に至りしが此の頃氏の輕機分隊も亦小銃分隊の線に到るべく發進し氏は猛烈果敢に敵陣目掛けて突進せしに途中無念左肩に盲貫銃創を受けた。併し氏は屈せず尙も猛進せんとせし時又も第二彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより惡戦苦闘の後東天白む頃さしも頑強なりし敵陣地を奪取する事を得た。氏郷に在りては孝子と讃へられ其の戦陣に臨むや毎戦彈雨の下活闘奮闘彈藥手として克く輕機の威力を發揮せしめ又前進に突撃に常に率先勇敢奮戦力闘克く其の本分を完うして遺憾なかつた。實に斯くの如きは忠孝一道出陣時披瀝したる決意の如く、一身を君國に捧げ斃れて後己まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。参戦幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として家門を飾り後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 富岡善三郎

#### 豪膽慧敏なる小銃手涿州及靈壽附近に奮闘し戦勝の礎石となる

氏は香川県香川郡上笠居村の人にして父を喜一母を瀧乃と云ひ大正四年八月五日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實殊に孝心深くして人情に敦く不言實行の人であつた。郷里の小學校を卒業後高松第一中學校へ入學し昭和九年三月同校を卒業其の後は鬼無郵便局に奉職し翌十年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵して優秀なる成績を挙げ

昭和十二年六月歸休に際しては善行證書並に表彰状を授與せられた。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月中旬召集令状に接したが同じ應召の友人宅を訪問し其の不遇の状況を見て之に同情し自己の財布を其の儘渡し「我が志を受けられよ」と勇躍應召した。斯くて召集部隊へ到着後は森田部隊平田中隊に編入せられ第一小隊第三分隊に屬して七月下旬北寧線唐山に到着し次で所屬小隊は天津東站附近の警備を命ぜられたが廿六

日は張自忠隷下の敵軍と衝突し激戦の後之を擊退し其の後南苑の警備を経て良郷に進出し爾後の作戰に備へて居た。

涿州會戦の戦機熟するや所屬部隊は九月十四日夜半良郷を出發し同月十六日午前八時半寶店鎮附近の敵陣地より約千米の高梁畑に攻撃準備を整へた。敵は部落の北端附近より其の東方鐵道線路に亘り堅固に陣地を占領して居た。此の日天氣快晴暑熱灼くが如く殊に黄塵に苦しめられたが氏は勇氣凛々第一線部隊内に在りて午前十一時攻撃前進に移つた。友軍飛行機は爆音勇ましく上空に飛び敵彈亦頭上を掠め刻一刻戦況は活氣を呈して來た。午後一時頃より敵迫撃砲彈の飛來甚だしく附近に落下炸裂し土砂爆煙渦巻き死傷續出するに至つたが豪膽不敵の氏は之に屈せず躍進又躍進して午後二時敵前百五十米に近迫した。敵は三方面より銃口火を吐いて我に猛射を浴びせて來たが氏は正確迅速なる射撃に依り逐次に要點の敵を射殺し遂に午後四時中隊主力と共に敵陣地に突入して寶店鎮部落の西南端を占領して之を確保した。

然れども敵は此の部落の西南方に在る琉璃河鎮附近に第二陣地を占領しありて其の陣地前には嚴重警戒網を張つて闘志





満々たるものがあつた。此の夜小隊長櫻村少尉は將校斥候として同方面の敵情地形の偵察を命ぜられた。此の際氏は斥候要員に選ばれ午前一時中隊主力の位置を出発し琉璃河鎮の北方部落たる蘆村を經由し慧敏豪膽にも敵歩哨線の間隙より潜入し克く斥候長を輔佐して敵情地形を搜索しつゝ琉璃河鎮北側水流に沿ひ東方に進路を取り敵主力の配備を偵知し午前五時頃諸偵察を終り歸路に就いた。今や敵の歩哨線を突破して高粱畑に差しかゝつたが此の時賣店鎮方面より南下し來れる約三十名の敵部隊と俄然遭遇した。氏は咄嗟の間に戦友一名と共に獨斷高粱畑を迂回して北方に出で敵の側背より手榴弾を叩きつけて敵に大損害を與へ續いて敗走する敵二名を刺殺し櫻村少尉以下三名の重傷者を收容して完全に其の任務を完了し午前八時中隊に歸來報告し爾後の戦闘指揮に重大なる利益を與へた。

所屬部隊は其の後敵を追撃して一意強行軍を續け石家莊陣地帯の一要害靈壽附近に向ひ前進を續行した。敵は工業都市たる正定石家莊の防衛に加へて京漢線最後の抵抗線として靈壽附近の防衛には特に意を用ひ北崗上及尹凡同の高地には極めて堅固なる陣地を設けて居た。北崗上附近の敵陣地は其の圍壁を利用するは勿論部落の西北にも又南方高地脚にも掩蓋陣地を設け機關銃迫撃砲を多數配備して陣前に十字火を集中し得る如く設備されて居た。所屬中隊は十月七日右第一線中隊として北崗上東北角の敵陣地に對し展開し午前十時頃より攻撃を開始した。待ち構へて居た敵は一齊に火蓋を切り嵐の如く熾烈なる猛射を浴びせて來た。氏は此の際小隊長傳令として重要連絡に任じ敵彈雨飛の中に活躍中無念一彈飛來頭部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り午前十一時十五分壯烈果敢なる突撃を敢行し同陣地を奪取するを得た。

氏は温厚にして慧敏思慮周密にして沈勇の人將兵一同の信頼特に厚かつた。今次聖戦に参加するや七生報國の決意鐵石の如く幾多の辛酸に堪え險難を物ともせず進んで難局に當り赫々たる武勳を奏して玉碎するに至つた。寔に是皇軍歩兵の

精銳一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や忠誠勇武の斯の精銳を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績は天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 土居 政雄

### 篤農の勇士山西省水嵐の山岳戦に奮闘し戦勝の端を開く

氏は大阪府泉北郡福泉町の人にして父を補作母をコマツと云ひ大正五年九月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實寡黙にして孝心深く弟妹を愛撫誘導し常に一家和樂の中心をなし又人に交はりて親切丁寧にして世人の愛敬を受け事に當るや熱誠眞摯遂げざれば息まざるの氣概を持つて居た。昭和六年三月明訓小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて父母を扶けながら青年訓練所へ通學し昭和十一年同所の研究科を修了したが氏は農業經營の合理化を企圖し施肥作物の改善及販賣方法等嶄新の方法を研究して着々其の實效を收め斯道老練家さへも舌を巻いて感歎し其の將來を深く矚目されて居た。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや間もなく森本部隊佐伯中隊に編入せられ第三小隊輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は逸早く平津地方に蟠踞せる支那大軍を撃破して要地守備に任じ九月十四日夜半良郷を出發し京漢線に沿ひ涿州保定及石家莊の諸會戦に参加した。氏の中隊は其の間馬家庄賣店鎮(琉璃河北方の部落)の戦闘を経て保定に進出し其の後引續



き追撃に追撃を重ね石家莊の西北方に當る靈壽附近の敵陣地を攻撃した。涿州會戦後は糧食も補給出來ず芋や粟を以て飢を凌ぎ又霜降る寒天に裸體となつて率先濁水を徒渉し或は數日に亘り一睡もせず山岳地帯に奮戦して輕機關銃の威力を發揮し以て戰勝の素因を作る等泪ぐましき活躍を續けて居た。殊に十月九日滹沱河畔の王母村の戰鬪に於ては中隊の左第一線小隊に屬し克く分隊長を輔佐し勇敢要地に進出し戰機に投合して有效適切なる猛射を以て戰勝の端を開いた。



所屬兵團は滹沱河畔の會戦には重要方面に活躍し赫々たる武功を奏したが引續き太原攻略戰に参加し更に正太線に沿ひ支那三大天險地帯に作戰するに至つた。此の際所屬部隊は其の先遣部隊を命ぜられ十月二十五日所屬小隊は尖兵となり午前九時白沙岩を出發し水嵐高地に向ひ前進を起した。見上ぐる山岳は愈々峻嶒の度を増し一夫關に當れば萬夫も通る能ざる感を深からしめた。されど氏は勇氣凜々重き輕機關銃を擔ひ續けて率先敵情搜索に任じ午後零時二十分頃敵兵らしき數名を發見し直ちに之を中隊長に報告した。中隊長は獨力之を攻撃して速かに水嵐高地の占領を企圖し攻撃命令を下した。

然るに敵は水嵐高地の南側に迫撃砲及機關銃を有する有力なる部隊を配備し更に部落北方の高地並に部隊の西北方高地にも堅固なる陣地を構築して之を固守し刺へ部落の東北方より約一千名の敵兵増援中にして其の兵力は中隊の十數倍に達して居た。午後二時頃氏は左第一線小隊に屬し篠つく雨の如き敵の猛射を意とせず敵の右側背にぐんぐん突進敵に猛射を浴びせて大なる損害を與へ中隊戰鬪に多大なる利益を與へたが彼我兵力の懸隔大にして遂に中隊は敵の全包围を受け苦戦に

陥つた。併し將兵一體となり寄せ来る敵に猛射を浴びせつつ黄昏となつた。氏は此の時目ざとくも敵の幹部らしき者を發見し忽ち之を狙撃して數名を射殺したが敵の將校以下數名であつた。然るに間もなく敵の機關銃は氏を以て猛射を浴びせ來たり憎くやその一彈の爲氏は顔面に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。中隊長は悲憤に堪え難く中隊主力を以て敵の右側背より突入し接戦格闘夜を徹し東天明くる頃遂に水嵐高地を占領し敵は百餘の屍體を遺棄して大敗潰走するに至つた。

氏は孝悌に厚く農村青年の鑑と推賞せられ又軍隊の模範兵として中隊將兵一同より厚き信頼を受けて居た。今次聖戰に参加するや選ばれて輕機關銃手たるの榮職を擔ひ百折不撓克く苦難を克服し險難を冒し常に分隊の中堅となり中隊戰鬪に貢獻せる處多大であつた。殊に山西省山岳戰に於ては惡戰苦鬪の中に企圖心旺盛其の卓越せる射撃技能を發揮して戰勝の一素因を作つて玉碎した。定に是皇軍精兵の鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠勇義烈の士を喪へるは痛歎哀悼に堪えざるも氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 東原辰男

至孝の勇士天津南方運河地區に奮戦し趙連庄の華と散る

氏は兵庫縣揖保郡林田村の人にして父を太作母をあいと云ひ大正五年二月四日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實に



して孝心特に深く月々少額の給料を節約しては両親の小遣錢に充て又両親の好む飲食物などを仕送りその喜びを以て吾が喜びとして居た。又業務に對しては終始一貫誠實勤勉にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和四年三月同縣内の津田小學校高等科を卒業し其の後は僧侶見習一ヶ年の後家庭の事情に依り大阪市西區本田通石岡洋裁店に弟子入りし七ヶ年修業の後一人前となり引續き同店の職人として勤続中昭和十二年一月現役兵として姫路歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。



支那事變起るや沼田部隊安武中隊に編入せられ擲彈筒手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し先づ京津地方に蠢動する敵に對し特に天津南方の運河地區の掃蕩に従事した。而して氏の所屬大隊は八月二十一日には潮宗橋の敵を攻撃せんが爲午前十時行動を起し運河の右岸地區より潮宗橋に向ひ前進し同十時半頃より攻撃を開始した。附近一帶の地形は高梁繁茂せる浸水地帯にして水深腰を没する所も尠からざる状態であつた。敵は部落の圍壁或は附近の堆土堤防等を利用し十字の銃砲火を浴びせて來た

が氏等は泥まみれとなり勇敢に攻撃前進し一時は苦戦にも陥つたが必勝の信念を以て奮戦し翌二十二日早朝遂に之を撃破するを得た。

所屬安永大隊は更に八月廿七日趙連庄附近の敵陣地を攻撃すべき任務を以て行動を起した。敵は第二十九軍に屬するものを主體とし土民軍、學生軍及正規軍を合して之を三線の防禦陣地に配置して馬廠陣地帯の前進陣地とし運河及高梁を障

碍に利用し掩蓋機關銃及迫撃砲を縱深に配備し頗る頑強なる抵抗を續けたのであつた。我が第一線中隊は同日午後三時より攻撃を開始したが敵火熾烈にして攻撃意の如く進捗せず敵前至近の位置に敵と相對峙して夜を徹するに至つた。此の時の所屬中隊は大隊豫備隊として控置されて居たが第一線であつた第七中隊は其の一箇小隊が全滅に等しき損害を受け且彈藥も缺乏せるにより肉弾を以て敵陣地へ突入するとの情報に接し所屬小隊は直ちには同中隊に彈藥を補給し且直ちに第一線へ増加すべき任務を受け勇躍第一線に進出した。敵は我が兵力の寡弱なると且彈藥の缺乏とを察知し二十八日午前四時半頃小嶺にも喇叭を吹きつつ大擧逆襲に轉じて來た。氏は第一線の位置に就くや機を失せず要點に對する距離測量を行ひ嚴重敵情を監視中であつたが此の逆襲を認むるや正確機敏なる擲彈筒の射彈を浴びせて敵に多大の損害を與へ爲に敵は大混亂に陥り將に潰亂せんとする時無念氏は左胸部に貫通銃創を受け「やられた」と叫んで後ろへ倒れた。所屬小隊長は直ちに氏を後方に收容させ衛生隊の手當を受けさせたが出血甚だしく氏も最早や之迄と覺悟せしものか「天皇陛下萬歲」と奉唱し續いて「小隊長殿！ 分隊長殿！ 色々お世話になりました」の一語を名残として從容護國の華と散つた。時に二十八日午後七時頃であつた。併し所屬部隊は氏等の勇戦と尊き犠牲に依り間もなく此の逆襲を粉碎するを得たのであつた。

氏は父母の喜びを以て我が喜びとなす程の孝子でありいまわの際にも尙 陛下の萬歲を奉唱し親とも頼める所屬上官に心からなる感謝を捧げて息を引き取つた。至誠一貫氏の如き人にして初めて此の豊かなる心境を堅持し得るものと察せられる。參戰以來北支稀有の大雨に遭ひ特に泥濘甚しき運河地區に不眠不休の掃蕩戰に従事し疲勞困憊其の極に達するも常に黙々として率先難局を打開し慧敏豪膽克く頑敵の逆襲破碎の重要素因を作つて遂に護國の華と散つた。斯かる忠誠勇武の士を喪ふ。眞に痛惜哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の尊き功績は天晴れ皇軍戰史に牢記せられて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に氏が生前夢寐の間も顧念息まざりし最愛の両親の前途に



尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 戸本市太郎

### 小寨村に大敵の奇襲を受け奮戦死闘自動車を焼却して之と運命を共にす

氏は京都府北桑田郡大野村の人にして父を房之助母をコキヌと云ひ明治四十五年一月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして恭謙而も事に臨み勇敢業務に熱心にして爲し遂げされば已まざる氣概があつた。大正十五年三月大野小學校高等科を卒業し其の後は父母を扶けて農業に従事し傍補習學校及青年訓練所に通ひ何れも優秀の成績を以て其の課程を終了し又青年團の中堅として活躍してゐた。昭和六年徴兵検査の結果第一補充兵役歩兵に編入せられ其の後和知自動車會社に入りて助手となり總て自動車運轉免狀を受け運轉手として各所に轉職し應召直前は京都市石川自動車會社に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召兵站自動車新庄部隊中西中隊に屬し第二小隊自動車手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し南口南山地附近より行動を起し敵の堅壘と恃む八達嶺を突破し泥濘地帯或は峻峻山岳地帯を運轉強行し近代機械化輜重の眞價を發揮した。此の間氏は有ゆる困難を克服し粉骨碎身克く其の任を完うした。次で九月二十二日所屬中隊は三浦部隊に配屬せられ同部隊が敵を追撃するに當り其の先遣隊の輸送に任じ將兵は意氣衝天の勢を以て長城線に程近き小寨村に向け出發した。然るに其の使用自動車は徴發車にして十分點檢整備の暇もなく行動

を起せる爲途中衰損破損等事故頻發し非常に困難せしが氏は不眠不休の努力を以て之を整備しつつ遂に輸送を完うし先遣隊の追撃に遺憾なからしめた。

九月二十五日所屬中隊は矢島中隊と共に至急靈邱に到り新銳の歩兵部隊を輸送し來るべき命を受け早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ小寨村を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に沁む朝であつた。露營地を後にして進むこと約二軒其の先頭が谷間の道に差懸るや敵は昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂回せるものと見え午前九時十五分俄然大敵と遭遇するに至つた。部隊は直ちに之に應戦せしが敵は迫撃砲重輕機關銃を有する正規軍にして千五百を下らざる大部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに百七十六名其の大部分は輜重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三方面より攻撃し來り忽ち我は全く敵の重圍に陥るに至つた。氏は僅少の人員にて自動車の直接警戒に任じ迫撃砲彈集中火により自動車の破損續出する中に毫も怯まず自若として警戒を嚴にし居りしが愈々敵が近迫し



來るや克く沈着正確なる射撃を爲し逐次之を射殺しつつ奮戦せしも敵は其の優勢を恃みて益々我に肉薄し來り氏等一同は白兵を揮つて之を撃退すること數次斯くして惡戦苦闘大敵を支へて奮闘實に約三時間半愈々敵の包圍線を突破して血路を開かんとするに當り其の直前敵弾により破損して運行不能となれる自動車を敵手に委せざる爲焼却するに決したが之等自動車附近は敵彈霰の如く飛來し其の燒却は容易の業ではなかつた。之が爲中司伍長を長とする決死隊を編成せらるゝ



や氏は西浦黒田福岡の三氏と共に欣然として之に加はり敵弾雨飛の下を疾驅して或は携行燃料を用ひ或は油桶の蓋を脱して火を放ち所命の如く焼却して其の重任を果せしが無念左下腹部に貫銃創を受け岡田其の他の戦友と共に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより約三時間半に亘り寡兵克く十倍の敵を支へ且自動車に敵手に委することなく午後零時四十分其の包圍線を突破して三浦部隊に合することを得た。

氏戦場に臨むや悪路險難加ふるに皇軍破竹の進撃に伴ふ晝夜兼行の急追隨と後方敗殘兵の出沒や衰損多き微用自動車の操縦等其の辛苦は想像以上なりしにも拘はらず終始一貫粉骨碎身優秀なる伎倆と相俟つて有ゆる困難を克服し近代輜重の全能を發揮せしめ常に前線の戦力を培養した。實に第一線快勝の裏に隠れたる此の涙ぐましき功績は没すべからざるものである。而も俄然不測の大敵と遭遇するや彈雨下沈着勇敢身を以て軍用物件を死守し尙且活躍決死焼却の重任を果した。氏素と軍隊教育を受けあらざるに壯烈實に斯くの如きは我が邦古來繼承尊重せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨盡きざるも奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るるであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級 戸 輕 恒 治

#### 夜間敵砲彈下に病院警戒中惜しくも空爆に散る (上海北店宅)

氏は愛知縣碧海郡上郷村の人にして父を友吉母をりゆうと云ひ明治四十四年九月十六日に生れ妻リセとの間に一女満子を擧げた。資性温良にして忠實勤勉如何なる難事も力行するの概があつた。大正十三年三月上郷尋常小學校を卒業し爾來兩親を輔け家事に精勵して居たが昭和八年二月特務兵として名古屋輜重兵大隊に入營し日夜勤勉優良の成績を以て二ヶ月の後除隊した。除隊後は一層家業に勵み孜々として産を作りつゝあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召近藤野戦病院に編入せられ特務兵として勇躍中支方面へ向け出發し九月上旬上海地方江岸の要地に上陸した。當時敵は上海北方より西南に亘り大小タリクの水濠と點在せる各部落を利用し上海を包圍する如く最も堅固なる數線の陣地帯を構成し近代兵器と中央軍の精銳とを以て配備し頑強に防戦しつゝあつたが皇軍の攻撃には抗し得ず一步一步攻略せられつゝあつた。併し晝夜間斷なき激戦に我が軍も多數の死傷者を生じ之が收容及醫療は想像も及ばざる難事であつた。

所屬野戦病院は九月十三日より十月三日に亘る劉家行及顧家宅附近の戦闘には曹家沙附近に、又十月四日より十五日に至る蕪蕩濱タリク附近の戦闘には北店宅に夫れ／＼病院を開設し日夜傷者の收容治療後送等に任じ氏は此の間病院諸材料の運搬傷者の搬送或は衛兵其の他の勤務に晝夜兼行眞に不眠不休の活動を續け而も常に疲勞困憊の色を現はさず進んで難局に當り病院業務の遂行に貢献せし所甚大であつた。越へて翌十六日より愈々敵の堅壁たる大場鎮附近の攻略開始せらるゝや病院は依然同地に在つて其の業務を繼續した。氏は行李特務兵として日夜諸勤務に奮勵努力した。敵は二十二日以



來連日連夜午後八時頃より夜半頃迄不法にも病院附近に猛烈なる掃射砲撃を加へ病院長以下甚だ危険なる状況下に於て服務せねばならなかつた。氏は此の間馬場及車廠の警戒其の他の各種勤務に服し特に夜間は毎夜前敵砲彈の集中下に敢然として危険を顧みず克く自己の重要任務を遂行しつゝあつた。二十四日午前零時五十分突如敵飛行機の空襲に對する警戒命令が發せられた。氏は機敏にも敵機の照明彈に對する對空遮蔽を完全ならしむべく敵彈下に在りて勇敢に戦友を勵まし活躍中前一時敵機の投下せる爆彈は不幸にも氏の身邊に落下炸裂し氏は他の戦友と共に全身爆彈破片創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の機敏適切なる處置に依り損傷を著しく軽減し得たのであつた。



氏は誠實恪勤にして家運の隆昌に努力し聖戦に参加するや僅か二ヶ月の軍隊教育を受けし身を以て寢食を忘れ諸勤務に勵み幾多の辛勞苦を克服し彈雨の下敢然として死生を顧みず一意任務の遂行に邁進し軍人の本領を遺憾なく發揮したのであつた。然るに惜しくも江南の華と散りたるは轉た痛惜の情忍び難き次第である。併し氏が累次の赫々たる武勳は皇軍戦史に光彩を放ち芳名は永く後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國特に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日勳重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岡本國三

忠勇なる歩兵砲々手琉璃河々畔夏村に奮戦し戦勝の端を拓く

氏は京都市上京區一條通御前通大東町の人にして亡父を龜太郎母をかねと云ひ大正五年一月五日に生れ未だ獨身であつた。性温良實直にして孝心深く事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和三年三月仁和尋常小學校を卒業し其の後は暫く家業を手傳ひ同五年五月より京都市丸安合名會社に勤務し入營時に及んだ。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し歩兵砲隊に編入せられて克く軍務に精勵し常に良成績を擧げて居た。

北支の風雲急を告ぐるや間もなく森本部隊大隊砲五番砲手として勇躍北寧線警備の爲出動した。斯くて所屬部隊は七月下旬以來唐山天津南苑等の警備に任じ九月上旬良郷附近に前進し爾後の戦闘準備を整へて居た。涿州會戰の戦機漸く熟するや所屬部隊は九月十四日夜半行動を起し翌十五日には馬各庄附近に於て敵を撃破し翌十六日には夏村附近に占據せる敵陣地を攻撃するに至つた。敵は夏村の北端附近に陣地を構築し更に其の陣前を側射し得る如く夏村の東北側に陣地を設け兩陣地の中間後方に迫撃砲を配置し陣地前方の諸部落の線に對し最も有効に火制し得る如く諸準備を整へて居た。此の附近一帯の地形は高粱繁茂し遠望を許さず細部の敵情に就ては搜索甚だ困難であつた。所屬大隊は拂曉頃敵前近く進出して攻撃準備の線に展開した。氏の所屬砲隊も萬難を排して豫定陣地に進入し午前六時卅分頃より砲撃を開始した。此所は琉璃河々畔蜿蜒たる敵陣地の一角にして豫め周到なる射撃準備を整へある敵陣地よりは相當正確なる精度を以てひた撃ちに猛射を浴びせて來た。所屬歩兵砲隊は之に屈せず敵陣地を猛射して友軍第一線歩兵の攻撃前進を誘發し彼我銃砲聲は河北の曠野を震撼し硝煙は高粱畑に立ち込めて刻一刻と激烈なる戦況となつた。されど我が第一線の前進と高粱の繁茂に依る



射界の減少とは必然的に歩兵砲隊の陣地變換を要するに至つた。歩兵砲隊長は午前八時敢然陣地變換の命令を下した。馭者は荒れ狂ふ鞍馬を鎮撫しつつ、氏等砲手は泥濘の如に砲車を操つて火砲の推進に協力し雨と飛び来る敵の猛射を浴びつゝ、敵前數百米に進出して放列を布置した。氏は其の間分隊の花形として活躍せるのみならず放列布置と同時に射界の清掃に任じ迅速なる射撃準備に貢献した。憎くや此の時敵の自動小銃は必死と我が放列線を猛射し來たり氏は無念にも左胸部に貫通銃創を受けて打倒れた。氣丈の氏は「此のチャンコロ奴生意氣ナ―」と二たび三たび立上らんとしたが力盡き微かにも「天皇陛下萬歳」と奉唱して悲壯の戦死を遂げた。所屬歩兵砲隊は間もなく敵陣地を猛射し一弾又一弾活躍中の敵を撲滅若くは制壓して突撃の動機を作り以て戦勝の途を拓いた。是全く氏等の尊き犠牲の賜であつた。



つた。

氏は在營間一人の母の意を汲みて質素儉約を旨とし貯金の現況までも通報して母に安心させ一意軍務に精勵して兵たるの本分を盡し上下の信頼も厚かつた。今次聖戦に参加するや北支數十年來稀に見る豪雨降りつゞき泥濘車軸を没し歩兵砲の行動は極めて困難なる中に率先勞を厭はず分隊長の意圖の如く活躍し又酷熱飢渴の中に常に志氣澄刺而も敵彈雨飛の中も責務の存する所最も積極的に奮闘を続け遂に玉碎するに至つた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛惜の情禁ずる能はずと雖も氏が累次の功績たるや天晴れ砲手の龜鑑として皇軍戦史に輝き其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大地徳次郎

忠勇なる小銃手涿縣及靈壽附近に奮闘し戦勝の素因を與ふ

氏は大阪市天王寺區寺田町の人にして父を捨吉亡母をヨシと云ひ大正二年七月十四日に生れ未だ獨身であつた。性純眞明朗にして責任觀念厚く事に當るや熱誠眞摯人と交はるや親切丁寧にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月郷里の高等小學校を卒業し其の後は實業に就きて父に孝養を盡し入營時に及んだ。昭和八年十二月徵兵として平壤歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に勉勵して良成績を擧げ同十一年十月歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森本部隊中島中隊に編入せられ第二小隊第一分隊小銃手として勇躍北支戦線へ向け征途に就いた。斯くて所屬部隊は天津南苑等の警備を経て九月上旬良郷附近に待機し爾後の戦闘を準備して居た。涿州會戰の戦機漸く熟するや所屬部隊は九月十四日夜半良郷を出發し同十七日琉璃河々畔清岡村、翌十八日は西城防及新庄頭附近の戦闘に参加し更に敵を追撃して九月二十三日先づ沈家佐附近の戦闘に於て小隊長金谷少尉に隨ひ抱陽嶺の敵陣地に突入して輕機關銃一、小銃彈及手榴彈の多數を鹵獲し又同日羅家井附近の戦闘に於ては率先勇敢に山上の敵陣地を突破掃蕩し中隊戦闘に寄與する處多大であつた。

此の頃京漢線方面の皇軍主力は大冊河畔の堅壘を突破し次で保定方向へ總追撃に移つたが所屬部隊は之に連繫して敵を急追し石家莊西北方の鎮鎗たる靈壽方面に向ひ晝夜兼行の強行軍を續けた。氏等は幾度か濁流を渡り行動困難なる山岳地



帯を踏破し食ふに食なく渴すれど水なき難行軍であつたが氏は常に志氣旺盛十月七日朝露露方面の前進陣地たる北崗上の前面に到達した。敵は此の附近を淳沱河畔陣地帯の左翼據點となし京漢線方面に於ける最後の抵抗を企圖して居た。されば北崗上及其の南方の尹凡同高地には堅固なる陣地を設け殊に北崗上の陣地は部落の圍壁を利用せるは勿論この部落の西北正面並に南方高地を利用し到る處に十字火を浴びせ得る如く設備を完了し多數の重機銃並に迫撃砲を配置し手ぐすね引いて我が軍の進出を待ち構へて居た。所屬中隊は大隊の左第一線、氏は中隊の左第一線小隊の小銃手として午前十時二十分より攻撃前進を起した。敵は正面及側方から猛烈なる小銃及輕機銃火を浴びせて來た。味方は據るべき地物更になく敵は地形を利用して刻一刻と銃砲火を驟雨の如く集中して來た。我が第一線諸隊は友軍砲兵の支援射撃に送られて漸く敵前百數十米に到達し得たが敵の小銃機銃火は愈々烈しく且相當な正確さを以て我が第一線に損害を與へて居た。此の時所屬小隊は敵陣地の右翼を包圍する如く攻撃前進を命ぜられた。氏は小隊の右第一線分隊に在つて敵の猛烈なる彈雨



を物ともせず一進一止率先敵陣地に近迫し戰友の前進を誘起した。分隊は僅か數分間内に四名の犠牲者を出した。折柄氏は小隊長より中隊長に對する重要連絡の重任を課せられ決死之が任務を完うして復命し直ちに散兵線に就いて左前方に見ゆる敵の機銃を狙撃し之を制壓中無念！右胸部より左背部にかけ貫通銃創を受け「デンノウ……」と聲も續かず萬歳を奉唱し壯烈なる戦死を遂げた。併し中隊長以下二十數名の尊き犠牲に依り午前十一時半頃當面の頑敵を粉碎して北崗上一

帯の敵陣地を占領するに至つた。

氏は忠誠にして明朗豪膽の人、今次聖戰に参加するや飢渴苦熱の中に幾山河を跋渉し警戒勤務に戰闘に難戦苦闘を續け常に優秀なる射撃技能を以て頑敵を制壓し中隊戰勝の尊き礎石となつて居た。而して動かば必殺さるべき情況下に勇躍重要連絡を全うせるが如きは實に滅私報國の士にして初めて能くし得べき所にして皇軍精兵の鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜極まりなしと雖も氏の功績は皇軍戰史に輝き芳名は永く後世に傳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 尾崎重行

#### 擲彈筒手偉功を樹て更に斥候として挺身重任を果して石板山に散る

氏は徳島縣那賀郡大野村の人にして父を勝美母をムメガと云ひ大正六年十一月九日に生れ未だ獨身であつた。資性温順寡黙にして兩親及祖母に對し克く孝をいたし又友情に厚く殊に金錢は一錢たりとも浪費せず克己心の強きこと一般青年の遠く及ばざる所であつた。昭和八年三月大野小學校高等科を卒業其の後徳島市喜久尾洋服店に約一年勤務の後退店し同九年四月大野青年訓練所に入り同十一年三月本科四年を修了精勤證を附與せられ引續き研究科に在学中昭和十一年十二月現役志願兵として朝鮮大邱歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵特に射撃は優秀の伎倆を有し中隊初年兵中の第一位にして擲彈筒手としての成績亦優良であつた。



支那事變起るや鈴木部隊古池隊に屬し第三小隊第四分隊擲彈筒手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後七月二十七日團河村の戦闘には氏の所屬小隊は豫備隊として軍旗護衛に任じ二十八日南苑の戦闘には中隊の豫備隊として戦闘に参加し續いて北平周邊の掃蕩及長辛店附近陣地占領守備に服し此の間氏は連日不眠不休熱心精勵克く警戒其の他の任務を完うした。次で九月十二日開古庄の戦闘に當りては所屬中隊は第一線となり午前五時より行動を起し同



六時三十分戦闘を開始せしが氏の所屬小隊は中隊の豫備隊として攻撃前進した。然るに午後二時頃重機關銃を有する約百名の敵は高梁如に隠蔽して突如中隊の左側至近の距離に現はれ攻撃して來た。當時小隊の位置せる地點は地隙内にして其の前崖斜面急峻の爲直ちに此の敵に向つて出撃するを得ず漸く小銃兵が前崖に足場を索めつゝ攀ち登り射撃し得るが如き状態であつた。氏は今こそ擲彈筒の威力を發揮すべき時なりと直ちに前崖に登り群がり來る敵に向つて泰然として平素の優秀なる伎倆を發揮し有效なる射弾を浴びせ敵に多大の損害を與へ他の筒手又之にない小隊の射撃と相俟つて遂に敵を

して其の企圖を挫折し敗走せしむるに至た。其の後九月十五日には房山東方高地の攻撃に翌十六日には辛庄士の攻撃に何れも第一線として参加し擲彈筒の威力を發揮して中隊の敵陣地占領を容易ならしめた。

九月二十二日保定攻撃に際し所屬部隊は石板山附近一帶の敵陣地を攻撃することとなつた。石板山は敵が保定陣地の最左翼の據點として峻嶮なる地形を利用し之に堅固なるトーチカ陣地を構築した重要陣地であつた。所屬隊は午前六時行動

を起して敵陣地に向つて前進し正午所屬中隊は大隊の右第一線となり我が砲兵の支援射撃下に勇躍攻撃前進を開始した。敵は我が攻撃前進開始と共に山嶺陣地より鼠の如く射撃を浴びせて來た。中隊は其の敵火を冒して勇敢に躍進又躍進し午後二時頃敵陣地前六七百米に達した。此の頃敵は正面の高地及其の中腹よりは勿論中隊の右側前方高地のトーチカ等より重機關銃を以て斜射側射を浴びせ來り我が攻撃前進は頗る困難となるに至りしが中隊長以下萬難を排して躍進を續け遂に敵前約四百米の高地脚に到達した。然るに敵の斜射は尙依然として激しかりしを以て小隊長は爾後敵に隠蔽前進すべき地形の偵察に苦慮しつゝありしが當時小隊長の側近にありし氏に其の地形偵察を命ずるや氏は彈丸雨飛の中を物ともせず單身勇躍して左前方約五十米の凹地方向に前進し偵察の結果該地が小隊爾後の前進に好適なりしを以て取敢へず此の旨記號にて報告し小隊長亦承知の旨記號し且其の位置に停り歸還を制止せしも氏は仔細に報告せんが爲再び小隊長の許に歸還せんと彈雨を冒して出發した。然るに其の途中敵の側射弾により腰部を打貫かれ其の場に倒るるに至つた。しかし氣力横溢せる氏は之に屈せず再び起き上り遂に小隊長の許に到着して親しく報告し終るや再び倒るるに至つた。依て直ちに後送せんとしたるに「なにツ之位のこと平氣だ」と中々肯んぜず飽くまで第一線に踏留まらんことを願ひしも如何せん重傷の身は復起つ能はず遂に後送されて保定第一野戦病院に入院衛生部員の手厚き醫療を受けたが遺憾にも其の甲斐なく十月十六日遂に護國の華と散つた。しかし氏の勇敢なる行動と尊き犠牲とにより小隊は勿論中隊も其の偵察せる地形を利用し敵の側射火に隠蔽してさしも峻嶮なりし敵陣地を奪取することを得たのであつた。

氏は元來孝子であつたが忠孝一如今次聖戰に従ふや平素温厚の氏は彈雨の下常に勇敢に奮闘活躍し殊に開古庄に於ては擲彈筒手として優秀なる伎倆を發揮して偉功を奏し石板山に於ては斥候として死生を顧みず挺身重任を果ししかも傷つくも屈せず其の任務に邁進し所屬隊戦勝の因を爲せるが如き是實に一身を君國に捧げ其の任務を遂行せざれば斃るるとも尙



已まざる旺盛なる責任觀念の發露にして畢竟盡忠至誠の顯現に外ならずと謂ふべきである。聖戰中途にして氏の如き忠孝の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戦力闘して以て樹てたる披群の武功は萬世に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は千載に轟はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に遺族の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小川 榮 一

#### 小銃兵彈雨の下挺身敵の側面に突入奮戦格闘し永定河畔に散る

氏は埼玉縣北埼玉郡共和村の人にして父を鏗三郎母をとみと云ひ大正五年三月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性眞面目にして盡忠の志厚く業務に積極且進取の氣概旺盛であつた。昭和五年三月騎西小學校高等科を同八年三月共和公民學校を又同十一年三月共和青年學校を夫れ々卒業此の間農業に従事し入營時に至つた。氏の入營前に於ける日誌中其の心境を披瀝して「甲種合格の此の身體は我がものにして我がものにあらず御國に捧げし此の身體を傷つけないやう今後特に注意せんと自ら誓ふ」とあり又支那駐屯軍に入營を命ぜらるるや「この若さにて外國の土が踏めるとは何たる幸福ぞ、ウントしつかりやつて来るぞ排日毎日の奴等ウント締めてやるぞ、帝國軍人の意氣を示してやるのだ」とあり先づ上京靖國神社に参拜し一死報國を誓つて昭和十二年三月徵兵として支那駐屯歩兵聯隊に入營第七中隊に編入豊臺に駐屯爾來軍務に精勵し成績優秀にして下士官候補者に採用せられ六月通州下士官候補者隊に派遣せられ將來有爲の幹部たるべく精進中であつた。此の頃家郷に寄せたる書信に「私は家の事は一寸も心配ありません軍隊に來た以上家事に就て心配する事は

天皇陛下に對し奉つて不忠だと思ひます。それは即ち親に對して不孝なる所以と信じてみます唯 天皇陛下の御爲に、それが私の信念であります。何一つ家の事に心配のない自分は努力健闘必ず立派な成績を御目にかけますから刮目してその日を御待ち下さい」と其の心境を述べてゐた。



支那事變起るや牟田口部隊積積隊に屬し第二小隊第一分隊小銃兵として出動した。而して七月八日拂曉中隊が永定河左岸の敵陣地を攻撃するや氏は第一線小隊の火線分隊内にありて鐵橋北方堤防上の敵陣地向つて攻撃前進を起せしに敵彈は雨か霰の如く注がれて來たが氏は分隊長の指揮下に其の猛火を冒して勇敢に前進し又停止に際しては沈着克く毎發必中の射撃を以て敵を制壓しかくして逐次敵に近迫し遂に左岸陣地の敵を撃退した。續いて中隊は永定河右岸の敵に向つて攻撃前進し氏の分隊は鐵橋北側の陣地向ひ勇敢に前進し中洲に於て左側方より敵の重機關銃の側射を受けたるも之に屈することなく奮戦中分隊長小島上等兵より敵の左翼を包圍すべく命ぜらるるや氏は中村大澤兩一等兵と協力し勇躍任に就き地形地物を巧に利用しつつ我が右側方より敵に肉薄し銃劍を揮つて一舉敵陣地の左翼に突入し敵數名を刺殺し奮戦格闘中無念其の北方陣地の敵輕機關銃より射撃せられて右大腿部に骨折貫銃劍を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし小隊は氏等の機宜に適せる攻撃により容易に該敵を撃破し更に追撃を敢行するに至つた。

因に氏の父は氏戦死の報に接するや當初其の情況不明なりしが爲入營後四ヶ月餘りの新兵なるが故に皇軍の一員として



恥かしからぬ死を遂げしか否やに付頗る憂慮せられたとの事である。洵に愛兒の死を哀しむに先だち戦績の如何を知らんと欲せる誠私奉公の觀念厚き父の子として氏の奮戦はさこそと頷かる次第である。

氏の軍籍に身を致すや屢々其の心懐披瀝の如く忠孝一如の傳統的信念に基き家を忘れ身を捧げ益々盡忠報國の赤誠に燃へつつあつた。果して今次事變勃發し其の戦陣に立つや居常の決意と忠誠の遡る所初陣なるに拘はらず彈雨の下率先勇敢挺身奮戦して以て偉功を奏し小銃兵たる本分を完うして遺憾なかつた。氏や参戦幾日ならずして永定河畔の華と散りしは痛惜盡きざるも士は百戦功なく瓦全を愧ぢ一戦玉碎名を残すに如かず。開戦勢頭暴慢不遜の敵に膺懲の一撃を加へて其の心膽を奪ひ皇軍の威武を宣揚したる技群の武功は千載の下皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に誦はれて譽を家門に遺し不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて措かぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大槻勢至郎

克く擲彈筒威力を發揮して戦勝の素因を作り遂に元氏に敵る

氏は茨城縣東茨城郡渡里村の人にして父を久平母をりんと云ひ大正五年十月二十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして明朗快活而も大膽にして進んで難に赴くの氣概があつた。昭和四年三月渡里尋常小學校を卒へ水戸中學校に入校したが家事上の都合に依り在學一年にして退學し爾來父母を扶けて農事に精勵し篤農青年と謂はれた。昭和十二年一月徴兵として水戸歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し選ばれて上等兵候補者となり優良の成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月石黒部隊に編入され勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は永定河北岸地區に進出し九月十四日同河を強行渡河して對岸の堅陣を攻略し更に敵を急追して拒馬河畔に進出した。敵は對岸に堅固なる陣地を構築し頑強に構へて居た。所屬部隊は九月十五日夜半拒馬河を敵前渡河し氏の中隊は十六日午前二時四十分頃望海庄附近に進出したるに迫撃砲を有する約一營の敵歩兵と遭遇し直ちに戦闘は開始された。此の時敵は小癩にも優勢を恃んで



我を包圍し來り中隊は一時苦戦に陥つた。併し中隊長以下堅忍奮闘寡兵克く大敵を支へ拂曉に及んだ。然るに天明と共に敵機は我が上空に現はれ爆彈を投下したが忽ち去つて中隊は遂に前面の敵を撃破した。併し氏は敵機の投下爆彈に右掌に破片創を受け野戦病院に收容された。其の後氏は治療の甲斐ありて三週間の後全治し十月六日原隊に復歸し擲彈筒手を命ぜられた。而して所屬部隊は十月十日滹沱河畔の敵陣地を攻撃するや所屬中隊は第一線となり同河を渡河して陳村附近の敵陣を攻撃し遂に之を占領した。此の攻撃に氏は擲彈筒手として勇戦奮闘遺憾なく擲彈筒の威力を發揮し中隊の戦勝に大なる貢献を爲した。斯くて所屬部隊は敵を追撃して同月十一日石家莊南方元氏附近に敵を壓迫した。敵は以前より元氏附近に陣地を堅固に構築し其の優勢なる敵は我が進出に乘じ攻勢に轉じ來り午後九時三十分頃郝村東方に於て彼我の遭遇戦は惹起された。此の時所屬中隊は大隊の第一線となり猛攻を續けて敵に大なる損害を與へたが敵は頑強に抵抗し戦闘は拂曉まで續けられた。斯くて夜明けとなるや新なる敵は更に陳村西門より潮の如く寄せて來た。氏は前日來勇戦奮闘したが



此の新なる敵近迫し来るや今こそと擲弾筒の猛射を浴びせて蜷集せる敵に大損害を與へ中隊は此の機に乗じて敢然突撃に轉じ遂に敵を潰亂に陥らしめ續いて敗敵を掃蕩しつゝ午後鐵屯附近に進出した。然るに該地附近を占領せる敵は尙頑強に抵抗し再び激戦となつた。此の時所屬中隊は大隊左翼後の豫備隊として疎開隊形を以て敵の銃砲弾を冒し躍進しつゝあつたが其の躍進中敵の一弾は氏の胸部を貫通し惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦力闘に依り元氏附近の敵は大損害を受けて南方に敗走したのであつた。

氏は今次聖戦に参加するや有ゆる危険困難を冒して奮戦克く其の任を完了し殊に突撃に際しては毎回適時適切に擲弾筒の威力を發揚して中隊の突撃を成功に導き中隊の戦勝に大なる貢獻を爲した。其の武動は正に拔群であつた。然るに聖戦の初期殊に豫備隊に在りて前進中敵の兇弾に斃れたるは洵に痛惜極まりなき次第である。然し氏が拒馬河畔に又漳沱河の激戦に將又元氏攻撃に樹てたる赫々の武動は千載に亘り皇軍戦史に輝き芳名は萬古に誦はれ不滅の英靈は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 大竹 貞 雄

優秀なる擲弾筒手拒馬河畔駱駝灣に奮戦し戦勝の途を拓く

氏は群馬縣北甘樂郡福島町の人にして父を覺治母をみちと云ひ大正三年十一月一日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして氣概に富み事に臨みて勇猛果斷であつた。福島小學校高等科を卒業し其の後は家業を手傳ひ乍ら福島青年訓練所

充用の福島實業學校に通學し昭和九年三月同校課程を修了し同年十二月徴兵として岐阜歩兵聯隊留守隊へ入營間もなく滿洲に出動中の所屬聯隊に派遣せられ吉林省掖河に到着同地に於て初年兵教育を受け其の後平陽鎮に移駐警備の業務に従事し其の間小石頭河子大石道河子黃泥河子附近討伐に参加し又十一年一月には全廠溝附近に於てソ聯正規兵と戦ひて右前膊骨折貫通銃創、右臀部貫通銃創を受けて掖河病院に收容せられ同年五月内地歸還、翌六月歸休除隊となり功に依り勳八等白色桐葉章を賜つた。歸郷後は家業に精勵して父母に孝養を盡し又

福島消防組小頭を囑託された。



支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊篠宮中隊に編入せられ第一小隊擲弾筒手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し九月十四日永定河股家舖附近の敵前渡河戦闘に参加し同河南岸の敵陣地を奪取するや所屬中隊は尖兵中隊となりて敵を進撃し破竹の勢を以て門村の敵陣地を占領した。然るに同夜々半約二中隊の敵兵より逆襲を受けたが氏は第一線に在りて奮戦し敵に多大の損害を與へて之を撃退し翌十五日拒馬河南岸宮村嶺の攻撃に當りては大隊豫備隊に在りて左側の警戒に任じ敵をして乘ずるの機會なからしめた。

翌十六日拒馬河畔駱駝灣附近の戦闘に於ては所屬中隊は午前十時半行動を起し午後一時第一線として戦闘を開始するに至つた。駱駝灣附近の敵陣地は村落の外内に柳樹多く且陣地の偽裝遮蔽巧妙にして敵陣地の發見甚だ困難であつた。所屬中隊は駱駝灣の北方臺上より敵火の間斷を利用して逐次躍進を重ね敵線に近づけば敵の機關銃は部落の中央部北端及東北角



より我が中隊を斜射するの關係に在りて爾後の攻撃前進は甚だ困難となつた。どこからとなく飛來する迫撃砲弾は附近に落下炸裂して物凄き土砂煙を挙げ氣たゞましき敵機關銃の銃聲は村縁に響き渡れども未だ其の姿を發見し得なかつた。所屬小隊長は村落の北側にある堆土にかけよつて敵情を觀察して漸く其の位置を發見し氏の擲彈筒分隊長に敵機關銃の所在を示して之が制壓を命じた。氏は敵彈雨飛を物ともせずその堆土の東側に位置を占め有効適切に敵機關銃を猛射し其の一銃を沈黙せしめ續いて他の側防機關銃に對して射向を變換したが此の時敵の迫撃砲弾は空氣を切つて飛來し氏の身邊近く落下炸裂し物凄き火焰と共に其の破片を四散した。無念！ 其の瞬間に氏は右下腿部骨折と首貫砲弾破片創の重傷を受け午後一時三十分遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども所屬中隊は氏の正確機敏なる猛射に依り狂暴なる敵機關銃の活躍を頓挫せしめ勇躍攻撃前進を續けて敵に徹底的の大損害を與へ同日午後四時半之を撃退し感激の日章旗をひるがへすを得た。

氏は温順にして沈勇の人、義に滿洲事變に従軍して其の驍勇を顯はれ今次聖戦に参加するや選ばれて擲彈筒手となり歴戦の勇士として所屬小隊に重きをなして居た。而して今次戦線に起つや其の優秀なる射撃技術と豪膽不敵の行動とに依り赫々たる武動を奏し戦勝の途を拓いて遂に玉碎するに至つた。蓋し忠君愛國の赤誠に燃え武技亦精到の士にして初めて能くし得べき所定に皇軍歩兵の精銳と謂ふべきであつた。今や其の壯容に接すべくもなく痛惜極まりなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて芳名は後世に顯はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大角雄市

### 擲彈筒手馬廠河敵前強行渡河に奮戦惜しくも陣前に散る

氏は岡山縣吉備郡福谷村の人にして亡父を伴行亡母を梅野と云ひ大正四年八月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温順質朴にして寡言實行の人郷間の模範青年であつた。昭和三年三月成器尋常小學校を卒業し其の後は家業に従事し傍同七年四月より福谷青年訓練所に入り同十一年一月同所本科を修了し同年同月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや昭和十二年七月歸休の處續いて召集赤柴部隊に編入せられ擲彈筒手として八月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後八月二十日より津浦沿線の戦闘開始せらるゝや氏は當初敵本曹長指揮下に良王莊驛の警備に任じ四月二十九日唐官屯附近の戦闘に際しては小野少尉の指揮に屬し火線分隊内にありて奮戦克く其の任を完うした。

九月十日馬廠河の敵前渡河攻撃に當り當初部隊の豫備隊たりし第三中隊が渡河部隊たる第二大隊に増援を命ぜらるゝや氏は擲彈筒手として第三中隊に臨時配屬せられ午後四時後屯東側より工兵隊の發動艇に分乗し我が砲兵の掩護射撃下にもかも白晝猛烈に敵彈雨下する河中を急速力を以て運河を通航し運河分岐點より上流三百米に達して敵岸に上陸した。敵は其の陣地總てに掩蓋を設備して河岸に直接配備し各種火砲を備へて堅固に死守してゐた。従つて上陸前既に相當死傷者を生ぜしが其の上陸するや敵前僅かに百五十米、正面は勿論特に陸官屯附近よりの敵の猛射は全く我を側射ししかも河岸據るべき地物とて無く忽ちにして死傷者續出するに至つた。此の際氏は之を物ともせず突撃援助に適する擲彈筒の射撃位置を求めて彈雨の下勇敢にも敵の遺棄せる河岸の壕内に躍進し我が突撃を阻止する敵特に我が砲火の及ばざる死角等に着眼



して之に有效なる射弾を浴びせ第三中隊の突撃を容易ならしむる事に奮闘努力しありしが依然側方に在りて猛射を繼續しつゝありし敵は我が擲弾筒陣地に其の火力を集中し來り爲に午後四時頃無念氏は頭部に其の一弾を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲によりさしも頑強なりし敵に多大の損害を與へ午後七時此の陣地を占領することを得た。



氏郷にありては模範青年であり出でて戦陣に臨むや歩兵の重要火器たる擲弾筒手に選ばれ弾雨の下毎戦勇敢適時的確なる射撃により其の威力を發揮して敵の重火器を制壓し小隊戦勝の因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで重任を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。参戦幾日ならずして馬廠河畔の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戦力闘して以て樹てたる披群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙

も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岡田 幸一

豪膽機敏の勇士北滿濠江縣境に奮闘し遂に護國の華と散る

氏は徳島縣麻植郡森山村の人にして父を國一母を光と云ひ大正八年四月一日に生れ未だ獨身であつた。性温良快活にして氣概に富み事に當るや熱誠眞摯進んで難局に當るの美風を持つて居た。昭和八年三月麻植郡鴨島高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家事を手傳ひながら鴨島青年學校へ通學し所定の課程を終了し昭和十二年現役志願兵として關東軍獨立守備歩兵隊へ入營して初年兵教育を受けつゝ北滿警備の重任に服して居た。氏は克く軍務に精勵して良成績を擧げ同年九月には一等兵に進級し中隊隨一の元氣者として賞讃されて居た。其の後氏は森上等兵の隷下に樺甸濠江縣下の頭道關門砦子分遣所詰となり人煙稀なる僻陬の地に警備の重任に就いた。

十月下旬頃より樺甸濠江縣境附近の共產匪は皇軍各部隊より討伐を受けて少數群に分散し密林中に潜伏するに至つた。氏の所屬分遣所は十一月十二日に至り分遣所の東南方約一里半の密林内に匪賊出沒せりとの情報を得分遣隊長森上等兵は直ちに之を撃滅するに決し部下七名を指揮し同日午後二時半分遣所を出發し五斤頂標高七四三高地に向ひ急行した。北滿の氣候は早や薄日さす肌寒き晝下り五斤頂に至る間は雜木の密林且地形峻峻で道路以外は單獨兵さへ通過不能であり十米以上は通視の出來ぬ場所も尠からざる有様であつた。指揮官森上等兵を先頭に次は輕機關銃手の久米田二等兵其の次は岡田一等兵の順序を以て一列側面縱隊となり意氣既に匪賊を呑んで稜線傳ひの小徑を五斤頂を目指して前進した。午後五時半頃五斤頂高地南方の標高七二二高地に達するや突如前方の密林内より射撃を受けた。森上等兵は直ちに散開せしめ前面の敵に對し射撃を命じた。此の時分隊の左翼に散開せる久米田輕機關銃手が射撃開始後幾何もなく左胸部に貫通銃創を受



けて打倒れた。其の右側に在りし氏は獨斷輕機鎗を執つて速かに前方に進出し敵の右側から俄然猛射を浴びせかけた。敵匪はあわてふためき忽ち射撃を中止して密林の中に姿を没し一目散に退却した。敵匪の兵力は密林の爲不明であつたが其の後の調査に依れば二、三十名位であつたらしく氏の猛射は相當の損害を興へしものゝ如く附近の枯草は血痕に染まつて居た。併し無念なるかな敵匪が退却に當り發射せる兇弾の爲氏は腹部に貫通銃創を受け叢の中に打倒れた。分隊長以下は「岡田、久米田の仇敵だ！ 遁すな！」と敵匪に尾して猛追した。



が夕陽全く山の端に没し匪影を見失つた。分隊長等は無念の齒がみをなしつつ、氏等の許に引返し手當を施さんとすれば哀れや氏は銃を確つかと握り緊め軍服は鮮血に染められ何の苦痛もなかりしものゝ如く其の顔は平常のまゝでいとも莊嚴なる戦死を遂げて居た。森分隊長は斷腸の思ひにて筆を執り「實に人間最高の感激でした。到底筆舌に盡し得る事ではありません。同町出身である幸一君、而も日本人一人居らない山中の關門砦に於て四ヶ月餘の間一つ釜の飯を食べ乍ら毎日の辛苦を共にした私よく故郷の話が出たものでした、

そしてお互の健康を祈り合ひ勵まし合ひ一誠以てお國の爲に盡して居たのでした」と氏の遺族に戦死状況を報じ思は同じ戦友一同は無言のまゝに悄然として氏の尊き遺骸を分遣所へ運び心許りの供物を捧げ涙ながらに氏の冥福を祈つたのであつた。其の後共産匪は氏等の勇猛に恐れ杳として姿を見せなかつた。

氏は志操堅確進んで現役兵を志願して待望の北滿警備の重任に就いた。時恰も北支の風雲日を追ふて險惡を加へ不逞の共産匪は滿洲國內の擾亂を企圖し且滿ソ國境の情勢亦一觸即發の危機を藏して居た。氏等は寡兵克く僻陬の地に堅忍持久日夜警備の重任に服し以て今次聖戦と密接不可分の關係に在る滿洲國の安寧秩序を擁護し遂に氏は惜しくも共産匪の兇弾に玉碎するに至つた。斯かる忠勇義烈の勇士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の尊き功績は天晴れ皇軍戦史に牢記せられて其の芳名は千載に驅はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 岡田 正明

#### 傳令猛火を冒して重任を果し更に奮戦遂に人合庄に玉碎す

氏は兵庫縣城崎郡豐岡町の人にして父を繁造亡母をハルと云ひ大正二年二月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温良業務に忠實にして責任觀念強く爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。大正十四年三月豐岡小學校尋常科を卒業引續き町立商工實習學校に入學し昭和三年三月同校を卒業同五年四月大阪關西工學校豫科第二學年に入り同七年九月本科建築科を卒業し同八年一月より豐岡町小山建築事務所勤務してゐた。昭和八年十二月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營同月より翌九年四月まで滿洲に派遣せられ各地の討伐警備に任じ其の功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。又在隊間は熱心軍務に精勵特に武技に長じ射撃に於ては大隊長より劍術に於ては中隊長より夫々賞狀を附與せられた。而して同十年十月歸休除隊後は在東京大倉土木株式會社に入社し大阪出張所建築科に勤務してゐた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊藤井中隊に屬し第三小隊傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し泥濘飢渴の難行軍を續けて津浦沿線を進み九月月上旬には馬廠附近の戦場に於て敵陣の西北鎮鎗たりし小王莊流河鎮の堅壘を屠り續いて馬廠西側の諸要地を逐次席卷して敵を猛追し續いて九月十三日より滄州附近の戦闘開始せらるるや先づ姚庄子魏庄子李家婁の敵を攻撃して該地を占領した。此の間氏は小隊長傳令として或は悪路を冒し或は彈雨に屈せず中隊長及各分隊長間の連絡に終始活躍し小隊長の指揮掌握を容易ならしめた。



九月二十一日所屬部隊は人合庄の敵陣地に對し攻撃を開始した。敵は鐵條網及水濠を繞らし掩蓋を設備して堅固に陣地を占領し極力我が攻撃を拒止すべく準備してゐた。所屬中隊は當日午後六時興濟鎮を出發して北部人合庄に向ひ前進し逐次敵に近迫して敵前四百米に達した。而して愈々午前二時を期し夜襲敢行の爲此の地點に於て準備を整へ夜襲隊形に移らんとするや敵は逸早く之を察知し篠つく雨の如く猛射を浴びせて來た。當時中隊兩側の地形は沼及濕地の爲疎開すること能はず爲に忽ち死傷者續出するに至つた。此の時中隊長は爾後の進出と損害を減少する爲後方にありし氏の所屬小隊に對し速に獨立家屋を占領せよとの命令を傳達すべく氏に命じた。當時敵陣は頗る熾烈を極め加ふるに何等遮蔽の地物なく危険極まりなかりしにも拘はらず氏は勇躍任に就き彈雨を冒して勇敢に小隊長の許に到り此の旨傳達して重任を果した。爾後小隊は所命の獨立家屋に向ひ逐次肉薄し突撃を敢行せんとせるも敵彈猛烈を極め容易に突撃の機會を得な

かつた。之が爲敵前至近距離に於て我が火力を最高度に發揚し奮戦以て其の機熟するを待つ内敵は熾んに手榴彈を投擲すると共に一面退却の兆あるを發見し小隊長は獲れりと大聲突撃を命令すれば氏等は小隊長に従ひ勇猛果敢に敵陣に突進した。然るに無念其の途中氏は敵彈左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより午前八時には南部人合庄を奪取することを得た。

氏戦陣に臨むや選ばれて小隊長傳令となり毎戦積極活躍其の重き使命を果し又率先して勇敢に奮戦し中隊戦勝に貢獻する所頗る大なるものがめつた。實に斯の如きは一身を君國に捧げ斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戦幾何もなくして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪えざるも奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に昇叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 尾崎俊一

決死の工兵分隊員津浦戦線に毎戦武勳を奏し遂に牛新庄に玉碎す

氏は兵庫縣掛保郡香島村の人にして父を定吉母をきわと云ひ大正五年七月十三日に生れ未だ獨身であつた。性豪膽沈着にして責任觀念に富み事に従ふや熱誠眞摯人に接しては明朗親切であつた。昭和六年三月香島小學校高等科を卒業し其の後播磨造船所附屬徒弟教習所に入所し二ヶ年の修業を終へて仕上工となり同造船所へ就職し熱心勉勵して良成績を擧げ



諸人の愛敬を受けて居た。昭和十二年二月現役補缺として岡山工兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵して居た。支那事變起るや間もなく須磨部隊某中隊に屬して勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し津浦線に沿ふ地區を南進した。然るに北支は數十年來稀なる豪雨降り續き河川は汎濫し道路は泥濘膝を沒し諸部隊の行動は名狀すべからざる苦難に遭遇した。所屬小隊は先づ獨流鎮附近の運河に架橋すべき重要命令に接し八月十八日行動を起し泥濘の



惡路を同地に向ひ前進したが氏は連日連夜の疲勞にも屈せず率先應  
用材料の運搬及架橋作業に従事して小隊の任務遂行に貢献し以て赤  
柴歩兵部隊の行動を容易ならしめた。次で所屬小隊は同月二十一日  
より赤柴部隊に配屬せられ道路補修橋架設及鐵道補修に従事し又  
野戰重砲兵隊の前進掩護に任ずる等連日の降雨泥濘と敵彈雨飛の中  
に毅然として工兵技術の眞價を發揮して居た。殊に二十一日午後三  
時半府君廟西端に於て約百五十名の敵が俄然所屬小隊の背後より奇  
襲し來るや所屬小隊は獨力之に應戦し氏は豪膽にも率先要點に進出  
し正確迅速なる猛射を以て敵を壓倒し以て友軍の志氣を鼓舞し遂に  
敵をして西南方に潰亂敗走せしむるの重要要因を與へた。之に依り我が歩兵砲隊及彈藥小隊は危機を免がるを得たので  
あつた。

八月二十六日より九月七日にかけ所屬小隊は依然赤柴部隊に配屬せられ道路補修橋架設、展望臺設置、輕渡河材料及  
民舟の蒐集並に患者及彈藥輸送等に寧日もなかつた。連日の雨は未だ降り歇まず地上は到る所泥沼となり行動愈々困難と

なつたが氏は克く分隊長を輔佐し優秀なる工兵技術を發揚して馬廠本陣地に對する攻撃準備に餘念もなかつた。九月三日  
我が第一線部隊は唐官屯の敵陣地前三四百米の線に攻撃準備陣地を占領した。此の夜徹宵豪雨降り續き濠内はすつかり水  
浸しとなり將兵皆寒さに震い戦いて居た。豫め周到なる夜間射撃の準備を整へて居た敵は小銃機關銃迫撃砲を以て小而憎  
き程正確に三方より集中火を浴びせて來た。斯かる中に所屬小隊は唐官屯に設けある埋設地雷の位置と水濠との偵察を命  
ぜられた。氏は率先其の決死偵察隊に加はり度旨歎願した。將兵一同は悲壯を通り越した氏の莊嚴なる赤誠に深くも胸を  
打たれて居た。既にして決死隊は尺取虫の如く闇夜の中に消えて行つた。そこは敵の鼻先き云はずとした其の猛射を浴  
びた。豪膽不撓の氏は平然として地雷を搜索しては除去し水濠をも偵察して完全に任務を遂行して歸來した。而して翌四  
日早朝よりの攻撃には敵の猛火を冒して敵陣地に肉薄し携帶梯子を水濠に渡して突撃路を開設し以て歩兵の突撃動作を容  
易ならしめ戦勝の途を開いた。

九月十日我が軍は馬廠本陣地に對し總攻撃を開始した。所屬小隊は午前六時丁莊の北端より約五百米の地點に位置して  
居たが我が左翼方面より輕機關銃を有する敵部隊が小嶺にも逆襲して來た。所屬小隊は敢然此の敵に向つて攻撃を開始し  
た。氏は此の際小隊の先頭に立ちて奮闘し全員の志氣を鼓舞し敵に痛撃を與へ之を東南方に潰走せしめた。其の後所屬小  
隊は丁莊附近の阻絶濠二箇所の復舊作業と敵前水濠の架橋作業を擔當したが氏は常に決死的行動を以て此の作業に貢献し  
見事に成功するを得た。其の後我が軍は敵を所在に擊破しつつ逐次滄州の堅陣に向ひ敵を壓迫南下したが敵は退却に方  
り大潘沽附近の堤防を決壊して我が前進を遲滞せしめた。同月十四日所屬小隊はその決壊箇所を偵察せんが爲同部落に向  
ひ前進したがその部落には敵兵約百名蟠踞して我が小隊に猛射を浴びせて來た。所屬小隊は直ちに之を攻撃したが氏は機  
敏にも堤防の線に達して破壊箇所を發見し敵兵擊退後直ちに之が防水作業に従事し歩兵の行動を著しく容易ならしめた。



滄州本陣地に對する總攻撃も目睫の間に迫れる九月十八日所屬小隊は牛新庄趙官營間の河川及道路の偵察を命ぜられ又張家碼頭附近に於て左岸地區に轉進する歩兵部隊の大隊砲通過の爲輕渡河材料に依る架橋作業に従事した。翌十九日早朝小隊は張家碼頭を出發し午前六時二十分頃牛新庄に差しかかるや輕機關銃を有する敵兵約三百名對岸より猛射を浴びせ來りし爲所屬小隊は直ちに之を攻撃するに決し戰鬪隊形に移つた。氏は此の際も率先陣頭に起ち篠つく雨の如き敵の猛射を物ともせず攻撃前進中無念！左胸部左肩胛部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬小隊は氏等の勇戦奮闘に依り同日午前七時三十分當面の頑敵に大損害を與へて之を潰走せしめた。

氏は忠誠にして豪膽沈勇の人聖戰參加以來歴戰實に十二回其の都度赫々たる武勳を奏し命知らずと迄歎賞せられて居た。又晝夜不眠不休の作業にも或は泥濘飢渴疲勞其の極に達せる場合にも常に明朗にして率先難局に當り友軍の志氣を無言の裡に振作して居た。眞に得難き勇士にして一般軍人の龜鑑たる者であつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛嘆哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に光彩を放ちて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 若林喜作

戰鬪慘烈の間に傳令の重任を果し自己の負傷を忘れて上官を介抱し大册河畔に散る

氏は栃木縣上都賀郡粕尾村の人にして亡父を喜一郎母をトミと云ひ大正五年十月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性



活潑にして事に臨み勇敢而も親切心に富み業務に頗る勤勉負け嫌ひの人であつた。昭和六年三月粕尾小學校高等科を卒業したが在學中は成績優秀各種の場合生徒代表に推されてゐた。其の後農業及自動車運送業に従事し自動車運轉手免許證を附與せられた。氏は又居村青年團支部長として盡瘁してゐた。昭和十一年徴兵検査に合格するや氏は男五人の兄弟中唯一の入營者たる光榮に感激し十二分に御奉公し決して人に後れを取らぬと其の覺悟を示し同十二年一月欣び勇んで宇都宮歩

兵聯隊に入營爾來一意軍務に精勵し其の成績良好にして同年六月選ばれて歩兵學校に分遣せられ負けじ魂の氏は學歴優れたる他兵に一步も譲らざるべく専心努力を續けて居た。

支那事變起るや原隊に復歸を命ぜられ坂西部隊成島中隊に編入第三小隊第二分隊小銃手として勇躍征途に就いた。氏は機會ある毎に滿洲節を好んで口吟せしが「今や滿洲は野菊の盛り花に劣らぬ手柄を樹てよ」の歌詞の如く大いに奮闘郷土の期待に副ふべく固き決意を披瀝して出征した。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十五十六日は拒馬河畔北相附近の戰鬪に次で十八十九日は南義安の戰鬪に参加し爾後敵を急追して九月二十一日大册河左岸に到着した。

大册河は河幅百數十米水深一米三四十釐敵は此の障礙を利用し河中には水雷を敵岸には地雷を敷設し其の後方には鐵條網及水濘を繞らし其の陣地は數線に設けて掩蓋を設備し頗る堅固に陣地を占領して極力我が進撃を阻止すべく待構へてゐた。従つて此の堅陣に對する晝間の攻撃は損害頗る多きに鑑み所屬部隊は夜襲を以て之を奪取するに決し直ちに渡河準備



備に着手した。此の時所屬中隊は部隊主力に先んじ王谷莊堡附近大冊河の渡河點を確保すべき任務を受けた。中隊長代理佐藤少尉以下一同は曩に拒馬河畔の戦鬪に戦死したる成島中隊長の弔合戦を爲すべく決死の覚悟を固め未だ戦はざるに意氣衝天の概があつた。斯くて同夜午前二時恰も十七日の皎々たる月光を背に浴びつゝ渡河を開始するや敵は逸早く我が夜襲を察知し果然猛烈なる射撃を開始せしが氏は之を物ともせず小隊長指揮下に率先勇敢に濁流に躍り込み而も敵陣に近くに従ひ頭にも達する流線を押し切り對岸に取り着き所屬小隊は中隊の左第一線として河岸より約五十米前進し寡兵を以て主力の渡河を掩護すべく散兵壕を構築した。然るに此の邊一帶は平坦なる砂地であり僅々數十米に過ぎざる敵陣地との間には僅かに黍畑があるのみであつた。従つて正面及側面よりする輕機關銃掩蓋重機關銃迫撃砲彈は益々猛威を逞しふするに至り中隊長代理佐藤少尉の戦死を始めとし我が死傷積出するに至つた。併し氏は更に之に屈せず當日小隊長傳令として中隊長及第一線分隊長との間を駆け廻り命令報告の至難なる傳達連絡に活躍し克く小隊長の戦鬪指揮を容易ならしめつゝありしが佐藤少尉戦死後小隊長渡邊准尉中隊を指揮奮戦中同准尉亦胸部に重傷を負ふに至るや氏は准尉を激勵しつゝ敵彈に遮蔽せしめんとせしが如何せん自らも手に重傷を負ひ居りし爲已むなく戰友を促して壕を堀らしめ准尉を此に收容し准尉亦氏に對し「敵彈に氣を着けよ」と注意せしが無念第二彈は氏の右大腿部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。而して中隊は惡戰苦鬪殘員僅か二十名となりしも氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲とにより午前十一時敵の堅陣を奪取し全軍戰勝の端緒を拓き時の軍司令官より光輝ある感狀を附與せられた。

氏や郷にありては良民出でて戦陣に立つや彈雨の下頗る勇敢にして戦鬪慘烈の極所に立ち不屈不撓萬難を排して傳令の重任を完うし小隊長の戦鬪指揮を容易ならしめて遺憾なかりしのみならず自己の負傷を忘れて上官を介抱せる如き洵に床しき限りであつた。實に斯くの如きは出陣時決意披瀝の如く一身を君國に捧げ只管重任に邁進せる盡忠至誠の發露にして

正に軍人の鑑と謂ふべく參戰幾何ならずして氏の如き忠良の傳令を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戦力闘以て愛唱せる「花に劣らぬ手柄を樹てゝ」の宿志を貫徹せる拔群の武功は皇軍戰史を飾り其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。  
氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 和久井富三郎

#### 院家村の陣前十字火の下に輕機銃の故障を排除して小隊の苦境を救ふ

氏は栃木縣上都賀郡北犬飼村の人にして父を清吉亡母をタケと云ひ大正五年一月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實孝心深く事に當り實直勤勉爲し遂げざれば已まざる氣概を持つてゐた。昭和四年三月委川小學校高等科を卒業其の後は農業に従事し昭和十二年一月徵兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや坂西部隊に屬し小銃手(工務兵)として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し爾來酷暑泥濘飢渴を克服しつゝ敵を永定河畔に擊破し保定の堅壘を攻略し次で石家莊に向つた。此の間氏は工務兵として數度の激戦により破損せる兵器の復舊修理に寢食を忘れて精勵努力し爾後の戦鬪に支障なからしめ十月十七日の大孫村附近の戦鬪には第一線散兵として奮戰敵を撃退し次で十月八日より十日に亘る滹沱河の渡河戦鬪に際しては敵砲彈下に於て渡邊准尉指揮下に砲兵及車輛通過の爲の道路補修に任じ該河畔の戦勝に貢獻せし所多大であつた。

十月十日午後所屬隊は石家莊を占領し引續き收退せる敵を急追して十一日午後石家莊南方約十五里院家村附近に達する



や午後一時三十分頃該村附近に於て頗る優勢なる敵と遭遇するに至つた。敵は村落に據り機關銃迫撃砲等を以て猛烈に射撃し來りしが破竹の勢を以て追撃せし我が軍は寡兵に拘はらず直ちに展開して猛攻を開始した。此の時氏は中隊の右第一線小隊の火線分隊内にありて敵の猛射を物ともせず率先して勇敢に前進し又停止の際は沈着克く每發必中の射撃を爲して敵を制壓し斯くして一進一止しつゝ逐次小隊の攻撃目標たる院家村東方福元庄の敵陣地に向ひ近接し敵前二百米にまで迫つた。然るに其の際敵は院家村東側地區及福元庄西側地區の兩方面より重機關銃を以て猛烈なる射撃を浴びせ來り爲に小隊の戦闘は頗る苦境に陥るに至つた。加之突如小隊の輕機關銃に故障を生ぜし爲同分隊の輕機關銃手は必死となりて之が排除に努めしが遂に爲し遂げ得なかつた。第三分隊内にありて戦闘中なりし氏は斯くと知るや當時敵彈頗る猛烈を極め戦線の横行移動は必死の状況なりしにも拘はず氏は進んで輕機分隊の位置に到り工務兵として平素の技能を發揮し忽ち其の故障を排除し輕機關銃の戦闘を繼續することを得せしめ小隊の苦境を救つて爾後の戦闘を有利に進展せしむることを得



せしめた。而して再び自己分隊に歸らんとせし途中午後四時二十分無敵彈頭部を貫通し其の場に昏倒し纏て綱帶所に收容せられて衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく同日午後九時十分遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。併し小隊は氏の決行的行爲に依り午後五時過には敵に甚大なる損害を與へて敵陣を奪取することを得た。

氏や素と實直の人其の戦陣に臨むや第一線に立ちては毎戰勇敢に奮闘せしのみならず工務兵として他兵休息の間も不眠

不休精勵努力して兵器の補修に努め中隊の戦力を保持せしめて遺憾なかつた。殊に院家村の陣前身の危険を忘れ進んで輕機故障を排除し小隊の苦境を救ひし如き之畢竟一身を君國に捧げ棄るるまで其の職分を果さんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戰中途氏の如き獻身忠實の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 若林朋一

傳令彈雨を冒し一死重任を果して小隊戦勝の端を拓き小趙村に散る

氏は長野縣更級郡共和村の人にして父を要作亡母をりんと云ひ大正二年一月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして寡言事に當り積極不撓責任觀念強く爲し遂げざれば已まざる氣魄があつた。昭和二年三月共和小學校高等科を卒業し爾後家業に従事して同八年十二月徴兵として松本歩兵聯隊に入營其の月滿洲に派遣せられ新京附近の警備に任じ翌九年五月内地に歸還し事變の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はつた。氏は在隊間は軍務に精勵精勵勳章を授けらるること二回に及び同十年十月善行證書を附與せられて歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊恒吉中隊に屬し小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し九月中旬所屬小隊は軍兵站監の直轄となり豐臺長辛店附近の警備に任ぜられ四月下旬鐵道に依り敵を追撃



し鐵道沿線及附近部落の敗殘兵の掃蕩に任じた。此の間氏は常に積極勇敢に活躍し克く所命の任務を完うした。九月廿七日新樂縣附近の戦闘に際し所屬中隊は午前六時より行動を起し午後四時に至り戦闘を開始した。此の時氏の小隊は中隊の左第一線となり氏は其の最左翼火線分隊の一員として當日分隊長と小隊長間の連絡專任を命ぜられ攻撃前進を起すや敵彈烈しく飛來せしが氏は之を物ともせず據るべき地物もなき平坦地を左右に疾驅して其の連絡を確保しつつ分小隊の前進に伴ひ一進一止して逐次敵に近迫し遂に敵陣地前至近の距離にまで達した。然るに敵は地の利を占め益々頑強に抵抗し敵彈は



一層熾烈を極むるに至り小隊の前進は頗る困難なる状況となつた。加之此の頃敵は現在陣地の右翼に更に兵力を増加して我が小隊主力を側射するに至り之を制壓せざれば小隊の損害は時間の経過に伴ひ益々増大する形勢となつた。然るに氏の所屬分隊は小隊の左翼より敵を包圍すべく逐次敵の翼側に向ひ前進せし爲漸次小隊主力と離れ爲に小隊長の命令意圖の傳達は益々困難の状況となつた。此の際氏は小隊長より此の敵を速かに制壓すべく所屬分隊長に其の傳達を命ぜられた。當時敵彈は雨か霰の如く而も離隔せる分隊との間戦線の横行連絡は頗る危険困難なりしに拘はらず氏は決死の覺悟を以て勇躍其の任に就き一進一止疾驅し或は匍匐し各種の手段を盡して邁進し遂に幸にも微傷だも負はず所屬分隊に到達し首尾よく此の旨を傳達した。之が爲分隊は直ちに小隊主力に對し熾に側射しつつある敵に極力猛射を加へて之を制壓し遂に之を撃退するに至つた。氏は其の重要使命を果すや再び小隊長の許に復歸すべく歸途に就きしが其の途中無念敵

彈前頸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし小隊は氏の決死的傳達により爾後の前進容易となり間もなく敵陣に突入して其の一角を占領し延いて中隊の戦闘を有利に展開せしむることを得せしめた。

氏や精勵にして責任觀念旺盛の人であつたが其の戦陣に臨むや彈雨の下常に積極勇敢克く活躍して小銃手たる本分を完うして遺憾なかりしのみならず小趙村に於ける命令傳達の行爲に至りては眞に傳令の鑑と爲すべきである。是畢竟一身を君國に捧げて斃るるまで其の任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべく參戰幾何もなくして氏の如き良傳令を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも決死奮闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の英靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るることであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 河本 作夫

#### 重機彈藥手積極活躍克く其の任を完うして馬廐河畔に散る

氏は岡山縣勝田郡吉野村の人にして父を醇一母をせきと云ひ大正三年九月八日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして責任觀念強く事に臨み不屈不撓勇敢であつた。昭和四年三月居村小學校高等科を卒業し其の後家業に従事しつつ傍公民學校に入校同十年一月同校を卒業し同月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營在隊間軍務に精勵翌十一年七月善行證書を附與せられ歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月應召赤柴部隊第一機關銃中隊に編入第三小隊第六分隊六番銃手として八月十日勇躍征途



に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着し八月二十日より津浦沿線の戦闘開始せらるるや氏の所屬分隊は良王莊に於て列車の警備に任じ中隊が東邊庄の敵を攻撃するに際し追及して二十七日靜海入城と同時に中隊に復歸した。而して九月三日唐官屯附近の攻撃に際しては所屬小隊は同日午後三時右第一線たる第三中隊に配屬せられ其の左翼に陣地を占領し敵前僅々四百米の地點に於て敵と相對峙し四日午前七時砲兵の掩護射撃下に敵前百米の地點まで匍匐前進して陣地を占領し以て



第三中隊の戦闘に協力し同中隊が愈々突撃を敢行するに際し猛火を冒して更に右側方に陣地を變換して最後まで突撃援助射撃を爲し第一線歩兵の敵陣地奪取を容易ならしめ其の奪取を見るや直ちに第一線に追及更に前方に進出した。然るに敵の收容隊に會し忽ち其の猛射を受けたるも機を失せず之に應戦し約一時間の後之を撃退した。此の間氏は盛に雨下する敵弾の下終始勇敢に彈藥搬送に任じ分隊をして彈藥の顧慮なく十分其の威力を發揮せしめた。

九月六日所屬小隊は第二中隊に配屬せられ午前九時趙官屯を出發し難なく靜官屯を占領するや其の南方三百米寺院高地より猛烈なる射撃を受けた。此の時氏の小隊は速かに支那家屋を利用して銃眼を穿ち猛威を逞しうせる敵輕機に對して猛烈なる射撃を加へて之を制壓し其の夜は敵と相對峙したる儘至敵の警戒裡に夜を徹し七日午後六時三十分より砲兵の掩護射撃下に第一線歩兵と共に逐次前進し續いて突入したが敵は馬廠河を渡りて續々退却中なるを目撃せる氏の分隊は機を逸せず寺院高地東南側に進出して之に猛射を浴びせた。此の際氏は彈藥補充に活躍せるのみならず其の着弾に留意し克く之を誘導せる爲

射撃的確是等の敵を水中に於て殆ど全滅せしむることを得た。次で此の頃左岸に於て渡河準備に狂奔せる敵兵及河に阻まれて行動の自由を失ひ狼狽せる敵兵に對し射向を轉じて猛射を開始するや對岸よりする敵の掩護射撃猛烈を極めしも氏は其の彈雨の下之に屈せず勇敢活潑に彈藥を補給し射手をして彈藥に懸念なく最高度の火力を發揚せしめ且射撃を觀測して適時適切に之を誘導し敵死體は河岸河中に累々として其の數實に百を下らざる偉功を奏せしめかくして靜官屯寺院高地を確保し部隊の馬廠攻撃に於ける據點を得せしめた。爾後渡河攻撃準備間高地を警備し熱心に敵の動靜監視中十日午前十時敵の迫撃砲彈身邊に落下炸裂し氏は惜しくも兩大腿部及下肢に爆創を受け遂に後送せられ唐官屯第四野戰病院に入院の上衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく同日同病院に於て遂に護國の華と散つた。

氏は元來責任觀念旺盛にして毎戰彈雨の下勇敢常に積極的に活躍して彈藥補充の重任を完うし又射撃の觀測誘導に努力して重機關銃分隊の威力を十分發揮せしめて遺憾なかつた。かくの如きは畢竟一身を君國に捧げて斃るるまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして馬廠河畔の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)



### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 上村 信 五

#### 輕機彈藥手馬廠滄州攻撃に奮戦して姚官屯に玉碎す

氏は鳥取縣岩美郡浦富町の人にして父を正三母をふりと云ひ明治四十二年三月十二日に生れ妻嘉子との間に一子信孝を挙げた。資性温順業務に熱心にして不屈不撓爲し遂げされば已まざる氣概があつた。大正十一年三月浦富小學校尋常科を卒業引續き岩美實業學校に入り同十四年三月同校を卒業し其の後は農業及水産業に従事し傍青年團役員及西部青年會支部長に推され團の向上發展に盡瘁してゐた。昭和五年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營七月には一等兵に進級し翌六年七月歸隊除隊した。在隊間は熱心軍務に精勵し精勳章を授けられ除隊の際には善行證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊原中隊に屬し第一小隊第六分隊輕機關銃第五番彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し連日泥濘飢渴の難行軍を續けて津浦沿線を南進し九月上旬馬廠攻撃には馬廠西側の諸要地を逐次席卷し更に滄州に向ひ敵を猛追した。此の間氏は不屈不撓惡路萬難を克服し其の戦闘に際しては彈雨の下奮戦克く其の本分を完うし中隊の任務達成を容易ならしめた。次で愈々滄州附近の戦闘開始せらるゝや所屬中隊は九月二十一日午後六時より人合庄北端の敵陣地向ひ攻撃を實施した。氏は此の攻撃に於て彈雨の中を物ともせず分隊長指揮下に前進又前進逐次敵に近迫し其の突撃に際しては率先勇敢に突入し爾後部落内を掃蕩して二十二日午前九時完全に之を占領することを得せしめた。

九月二十三日所屬中隊は大隊の第一線となり午後四時友軍砲兵の支援射撃終ると共に姚官屯の敵陣地向つて攻撃を開始した。敵は長日月を費して堅固に陣地を構築し掩蓋機關銃座を多數に設備し其の陣地の前方數十米の線には鐵條網を更

に其の前方には幅六米深さ三米の水濠を繞らし極力我が前進を拒止すべく待ち構へてゐた。中隊が攻撃前進を起すや敵は篠つく雨の如く銃砲彈を浴びせ來りしが氏は第一線火線分隊内にありて之を物ともせず分隊長指揮下に率先勇敢に前進し其の停止に際しては危険を冒して活潑に彈藥を運送して克く輕機關銃の威力を發揮せしめ斯くて高粱大豆粟等の如を一進一止遂に敵前百米水濠の線に達し之を泳いで前崖に取り着きしが其の前方には鐵條網あり敵彈烈しく容易に破壊し得ず



午後十二時漸く突撃路の開設を完了するに至つた。當夜は下弦の月物凄く冴え渡り其の月光の下全身濡れ鼠となりて突撃時刻の到來を待ち愈々午前四時鐵條網の突撃路に煙幕を展張し之に蔽はれて突撃を開始するや敵は猛烈に手榴彈を投擲し爲に我が死傷續出するに至つた。併し氏は更に屈せず分隊長と共に猛烈果敢に陣地の一角を目標けて突進したが途中無敵敵の手榴彈を頭部に受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。而して中隊は本夜襲に於て多數の死傷者を出したるも氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより惡戰苦闘の後東天白む頃さしも頑強なりし敵陣地を奪取し日章旗を翻すことを得た。

氏戦陣に臨むや彈雨の下毎戦勇敢克く其の任務に邁進し輕機の威力を發揮せしめて中隊戦勝に偉大なる貢獻を爲した。實に斯くの如きは家を忘れ身を忘れ一身を君國に捧げ棄れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。征戦中途にして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮闘玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として千載に轟はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼



し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。  
氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川 端 義 満

#### 温良忠誠の勇士上海戦線に奮闘し遂に齊家宅激戦の華と散る

氏は宮崎縣北諸縣郡志和池村の人にして亡父を善蔵亡母をフミヨと云ひ明治三十三年二月十一日に生れ妻シヅエとの間に文二、千歳、和美、アイ子、照夫及スゞ子の子を授けられた。性温厚篤實にして交際圓滿誠實身を修め妻子を善導誘掖して家業に精勵し郷人一般の信頼厚かつた。大正四年三月志和地高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて農業に従事して居た。大正九年十二月徴兵として都城歩兵聯隊へ入營し克く軍務に勉勵し翌十年十一月歸隊に際しては善行證書を授けられ歸郷後は再び農業に就き一家の柱石として日夜精勵近隣の模範として推賞されて居た。  
支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召郡司令部沼口中隊に編入せられ高田小隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬上海戦場に到着して直ちに重要任務に就き續いて陸家宅より上海市政府方面の戦闘に参加し同月廿一日には唐家橋の戦闘に従事したが當時所屬小隊は當初中隊豫備隊を命ぜられ其の後戦闘の進捗と共に第一線に増加するに至つた。氏は勇躍所命の位置を占め正確迅速なる射撃技能を發揮して要點の敵を制壓し戦勝獲得に貴重なる一素因を與へた。其の後十月九日には王家宅方面の敵を撃破追撃して孫家宅を占領し爾後同地の警備に任じて居た。氏は其の間歩哨斥候となりて晝夜の別なく周到大膽なる行動を以て警戒搜索の重任を全うし所屬中隊の任務遂行に寄與せる所多大であ

つた。

越えて十月十四日所屬中隊は齊家宅の敵陣地を奪取すべき命令を受け同日午後八時卅分行動を起し午後九時頃敵の警戒陣地を夜襲して之を占領した。折柄月冴え渡り齊家宅南方に當る唐家宅を占領しある敵部隊より突如疾風の猛射を受け爾後の攻撃前進は頗る困難となつた。沼口中隊長は已むなく部下を地に伏せ月の没するを待つた。午前二時を衝き泥濘



地を踏破して隱密に齊家宅の北部陣地に向ひ肉薄した。敵は我が接近を覺りて熾烈なる猛射を浴びせて來たが午前三時半萬難を排して敵陣地に突入し北部陣地を占領した。此の際氏の所屬小隊は第二突撃隊として部署されて居たが第一突撃隊に尾して勇猛果敢に前進し北部陣地の占領に引續き中部齊家宅の敵陣地を席卷して之を占領した。所屬中隊は更に南部齊家宅及其の後方の最堅壘を突破せんと攻撃を續行したが敵の陣地前には大なるクリク横はり且鹿柴生垣の障物物を設け又敵陣地にはトーチン及掩蓋陣地に重機銃を配置して我が第一線の進出を今や遅しと待ち構へて居た。我が決死工兵

部隊は突撃路を開設すべく障物物の爆破を企てたが敵の猛射を受けて作業不成功に終り續いて前面及側面の三方より嵐の如き集中火を受け所屬中隊は死傷續出するに至つた。中隊長は悲憤の涙を吞みつゝ敵前二十米に掩體を構築し後圖を計つた。氏は斯く惨烈なる戦況下にも拘はらず豪膽不撓上官の命に従ひ彈雨を浴びつゝ作業中無念一彈飛來右上膊部に貫通銃創を受け遂に野戦病院に收容さるゝに至つたが同月十八日傷狀革まり従容として護國の華と散つた。併し所屬中隊は氏等



の尊き犠牲に依り其の後攻撃重點を右正面に移し頑敵を撃破して所命の任務を完うするを得た。  
 氏は温良にして膽勇の人今次聖戦に参加するや泥濘飢渴を克服して常に難局に當り東部上海戦線の堅壘を突破し以て赫々たる武勳を奏した。蓋し至誠一貫忠節に透徹せるの士にして初めて能くし得る所であらう。今や斯かる忠誠勇武の士を費ふ眞に痛惜哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや皇軍戦史に牢記せられて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。  
 氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 加藤 藤 平

剛膽群敵中に突入奮戦小隊側背の危機を脱せしめて西保障に散る

氏は長野縣小縣郡長久保新町の人にして父を正實母をとめと云ひ大正三年十二月三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順寡黙にして剛膽且孝心極めて深く又責任觀念強く爲し遂げざれば已まざる氣概を持つてゐた。尙氏は在隊間零細なる給料の殆ど全部を貯蓄して之を親に渡し親の喜びを以て己れ唯一つの楽しみとする近來稀なる感心すべき青年であつた。昭和四年三月長久保小學校高等科を卒業し爾後家業に精勵して家運の挽回に努め其の傍引續き青年訓練所充當實業補習學校に通ひ本科を経て同十年三月同校研究科を卒業し昭和十一年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營熱誠軍務に精勵して上下の信望を一身に集め同十二年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊關中隊に屬し小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬

北支に到着し同月中旬琉璃河畔瑪頭鎮附近の敵を撃破し九月下旬大冊河畔黃村附近及官昌屯附近の敵堅壘を攻略次で保定附近の殘敵を掃蕩して十月中旬滹沱河を敵前渡河し石家莊元氏順德附近に敵を追撃して遂に磁縣驛に突進敵を潰滅せしめた。此の間氏は有ゆる危険辛酸を克服し誠實堅忍所命の任務を完うして所屬部隊の任務達成を容易ならしめた。



十月二十一日所屬中隊は大隊の右第一線となり所屬小隊は其の右第一線として西保障東南方高地を占領し之を確保すべく陣地構築中同日夜十二時頃敵は我に占領せられたス同高地の奪回を企圖し山砲迫撃砲機關銃の集中火を我が陣地に浴びせ來り之と同時に優勢なる敵兵は我が陣地正面綿畑を逐次匍匐近接して來た。此の際氏は恰も雨や霰の如く注ぎ來る敵彈の下而も我が死傷續出せるにも拘はらず剛膽沈着克く毎發必中の射撃に専念し逐次敵の墜るゝを見て快哉を叫びつゝ奮戦を續續し遂に敵の逆襲を撃退することを得た。然るに二十二日午前五時拂曉に乗じ敵は又もや大舉逆襲し來り小隊は遂に苦戦に陥りしが敵は優勢を恃みて我が左側背にも迫り爲に小隊の戦況愈々容易ならざるに至つた。しかも我は寡兵なる爲側背の敵に對し多くの兵を割くことは到底不可能であつた。依て此の際小隊長は特に剛勇の兵若干名を選抜し側背掩護に充てた。其の選にあづかりし勇士は新山分隊長以下岡田小林寺尾等にして氏は固より其の一人であつた。今しも正面の敵機關銃火は猛烈を極めつゝある時新山分隊長以下氏等は勇敢にも其の彈雨を冒して小隊の左側背に移動し迅速に火線に就き敵の包圍部隊に對し直ちに射撃を開始し其の火力を最高度に發揚して奮戦敵の前進を阻止せしが敵は衆を恃みて益々近



迫し來り遂に肉薄して手榴彈を亂投し我を小勢と侮り將に我に向つて突撃し來らんとするの氣勢を示すに至つた。かくと見たる氏は敢然起つて銃剣を揮ひ喊聲を揚げて我に數倍せる敵中に突入一人克く數敵を刺殺し敵の心膽を奪ひ且敵に多大の損害を與へて之を撃退し遂に小隊側背の危険を排除することを得た。然るに其の直後敵は復讐的に砲火を集中し來り其の一彈により岡田小林の兩氏と共に氏は頭部及左胸部に爆創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や至孝勤勉の人其の戦陣に立つや毎戦彈雨の下頗る勇敢克く小銃手たる本分を完うして遺憾なかりしのみならず中にも西保障に於て側背に迫れる群敵中に壯烈剛膽突入奮戦して小隊主力の危機を脱せしめたる行爲の如き正に鬼神をも避けしむるものがあつた。實にかくの如きは忠孝一道家を忘れて一身を君國に捧げ斃るゝまで其の任務に邁進せる盡忠至誠の發露にして眞に軍人の鑑と謂ふべきである。参戦幾何ならずして氏の如き至孝誠忠の士を喪へるは洵に痛惜極まりなきも其の奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は軍民の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 河井 勇

京漢線方面の戦場に活躍し且娘子關の天險に勇戦して玉碎す

氏は山口縣大島郡家室西方村の人にして亡父を傳助母をキタと云ひ明治四十五年三月三日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして義務心厚く事に當るや熱心勉勵遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。三歳にして父を喪ひ母の慈育に

人と爲り孝心特に深かつた。大正十三年三月小積尋常小學校を卒業し其の後は大工職に弟子入りし職務に忠實にして毫も表裏なく弟子一般の模範となつて居た。昭和八年一月徴兵として山口歩兵聯隊へ入營し誠實軍務に勉勵して兵精勳章を附與せられ翌九年十一月満期除隊に際しては善行證書を授與された。歸郷後は仁川府に於て大工職に従事し益々世人の厚き信用を受けて居た。



北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月中旬應召小林部隊補充隊に編入せられ脾肉の歎を啣ちつゝ時機の到來を待つて居た。八月二十七日遂に待望の日が來た。九月一日には早くも北支良郷に到着し通信隊の掩護に任じて居たが間もなく第十一中隊に編入され九月七日には琉璃河々畔房山附近の戦闘に参加するに至つた。房山は京漢線方面に於ける重要鎖鑰點であつた。所屬中隊は大隊の右第一線中隊となり氏は第三小隊第一分隊兵として俗稱虎高地の奪取に引續き午後四時房山の堅壘に突撃し激戦の後之を占領した。越えて九月十七日より同月廿五日にかけ房山の西方部落たる周口店より保定

西方の完縣に至る間の追撃戦闘に参加し粗悪なる給養と不眠不休の猛追撃に依る疲労困憊は其の極に達したるに拘はらず氏は常に志氣旺盛分隊長の掌握下に積極的に其の任務に邁進し二十四日午後七時卅分には方須橋驛の西方約一里なる北城に進出して敵の退路を遮断する事を得た。次で十月二日には完縣附近を出發し滹沱河畔平山方面に向ひ追撃を續行した。途中地形錯雜して追撃行動極めて困難なりしも氏は各種の困苦缺乏に堪えつゝ前進を續け所屬中隊は十月八日より十日に



かけ所屬兵團右翼隊の陽動部隊に屬し東洞兒村及南田鎮附近の敵陣地を攻撃し以て兵團主力方面の渡河動作を容易ならしめた。

漳沱河畔に於て勝利を得たる所屬兵團は其の後正太線に沿ふ地區より山西省に侵入し太原の攻略戦に参加するに至つた。當時所屬中隊は暫く留營口附近に於て警備中であつたが舊關附近に於て苦戦なりし右縱隊に増援を命ぜられ十月十六日急遽留營口を出發し勇躍舊關の敵陣地攻撃の爲要點に邁進して敵に多大の損害を與へ見事に敵を撃退した。

所屬中隊は大隊長代理前田大尉の指揮に屬し愈々支那三大難關の一たる娘子關附近の戦闘に参加する事となり十月十九日午前二時行動を起し大隊の右第一線中隊となり井陘の西方俗稱三角山及鉢卷山を攻撃したが氏の所屬第三小隊は中隊の豫備隊となつて居た。中隊主力が前記敵陣地を占領するや午後零時三十分中隊長は更に氏の小隊をして俗稱三ツ穴山の敵陣地を攻撃せしめた。氏は率先敵の彈雨を冒して躍進を續けたが敵陣地内の輕機關銃より猛射を浴び地形の險難と相俟ち所屬小隊の攻撃前進は漸次困難となつた。此の日は狙撃手を命ぜられて居たが此の状況を見るや否や機を失せず適切な射撃位置を選定し正確有效なる射撃に依り一時此の機關銃を沈黙せしめ以て小隊の攻撃前進を誘起し更に勇躍所望地點に向ひ躍進中無念！一彈飛來胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り當面の敵に殲滅的打撃を與へ天險地帯の突破に大なる貢獻を與ふるに至つた。

氏は家庭に在りては唯一人の母親を勞はり慰め孝養至らざるなかつた。而して今次聖戦に参加するや大義親を滅し生死を超越して其の職分に勇往邁進し幾度か濁流を渡り險難を越え或る時は不眠不休の苦難に堪え辨々たる戦勝の獲得に貢獻し遂に天險地帯の激戦に玉碎した。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは痛惜哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑

略を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 川崎武男

#### 決死敵の側防機關を撲滅して大冊河畔に玉碎す

氏は茨城縣那珂郡額田村の人にして父を市之助亡母をまつと云ひ明治四十五年五月六日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして而も積極敢爲の氣概を持つて居た。昭和三年三月額田高等小學校を卒へ爾後家業を手傳つて居たが同七年四月更に東洋商業學校に入校し同八年十二月第三學年在學中に徴兵として旭川歩兵聯隊に入營爾來日夜軍務に精勵し翌九年一月駐滿部隊として所屬隊と共に北滿に派遣され各地の警備並に匪賊討伐等に参加し十年三月内地に歸還し同年十月滿期除隊となり功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊に編入せられ第十中隊安達小隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支上陸後所屬部隊は豪雨泥濘飢渴の難行軍を續け京漢沿線の大黃堡に前進し九月十四日永定河の敵前渡河を敢行して對岸の敵陣を攻略し敗敵を追撃して拒馬河の線に進出し續いて同河畔の敵を突破し琢州南方松林店を経て大冊河の線に向ひ強行軍を續け二十一日該河北岸地區に進出し對岸の敵に對し攻撃を準備した。大冊河對岸の敵陣地は保定の外周陣地として大冊河の障壁を陣地前に控へ數線の陣地帯となし且各要點には鐵條網及壕を設け所謂據點式の最も堅固なるもので優勢なる兵力を配備して居た。所屬石黒部隊は對岸の要衝たる石頭村西南方高地を夜襲に依り奪取すべく二十一日夜正子行動



を開始した。此の時氏の所屬中隊は第一線となり全員決死の白旗を掛けんとし前進した。然るに其の前進地區は幅員約二吉米に達する大濕地帯で而も陰曆十六日の月は時々雲を破つて我が前進を敵に知らしめんとし我が行動の困難は言語に盡せぬものであつたが將兵一同は水深腰に達する濕地帯を黙々として一步一步前進し二十二日午前二時三十分頃敵の抵抗を排除して大冊河を渡河し目前近き敵の本陣地に向つて全身ズブ濡れの儘攻撃前進した。敵の迫撃砲機關銃は一齊に火



を吐き熾烈なる火力を集中して來た。所屬中隊は猛火を冒して只管前進に努めたが中隊の左前方にある敵の掩蓋機關銃は我が第一線を側射し爲に我が死傷相次で生じ前進は頗る困難に陥つた。此の時中隊長は安達小隊長に此の敵側防機關銃を撲滅すべく命令した。此の命令を受けた安達小隊長は直ちに敵の機關銃を目掛けて肉薄したが敵陣地の直前には幅約五米水深約三米の壕を廻らし且要所には鐵條網を設け小隊の一舉突入は不可能であつた。小隊長はやむなく信頼する數名の決死隊員に依り手榴彈を以て敵機關銃を撲滅するに決し氏も亦其の選に入つた。氏は勇躍匍匐して壕岸に到り敵陣に手榴彈を投擲すると共に壕内に飛び込み漸くにして對岸に登り敵機關銃の左側背に迫つたが其處にも亦敵の輕機關銃が頑張て居た。此の時氏の傍には漸く梶山上等兵が來着し兩人は相協同し敵機關銃に匍匐肉迫して手榴彈を投ずると同時に突撃して之を撲滅し轉じて敵の側防重機關銃の側背に迫り突如手榴彈を投擲した瞬間突入したが其の刹那無念山脚方面より飛來した敵の一彈は氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏及梶山上等兵の剛膽なる行動奮戦に依り敵の側防機關

銃は撲滅せられ小隊は壕を越へて突撃し小隊長亦壯烈なる戦死を遂げしも突撃は遂に成功し敵は其の一角より崩壊をはじめ午前五時三十分石頭村高地の敵陣は遂に石黒部隊の占領する所となつた。

氏は今次聖戦に参加するや有ゆる危険困難を克服し奮戦克く其の責務を完うしたのであつた。特に大冊河畔の戦闘に於て敵の堅陣は晝間攻撃を断念し夜間襲撃に依るの命令を受けた時氏は既に百戦功なき瓦全を耻ぢ一戦功を奏して名を残すに如かずと堅き決意をしたのであらう。果せる哉小隊長の背く所となり選ばれて敵の側防機關銃奪取の命は下つた。氏は危険且至難なる此の任を遂行すべく一死報國は此の秋なりと勇躍其の擧に出で肉弾を以て其の重任を完遂して所屬中隊の夜襲成功の一大要因を作るに至つた功績は正に拔群であつた。斯かる忠勇義烈の士を喪つたことは洵に痛恨の極みである。然りと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は其の芳名と共に皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 川崎 博 邦

敵陣近く煙幕を展張して突撃を誘起し敵陣内に奮戦して元氏に玉碎す

氏は茨城縣行方郡立花村の人にして父を介治母をとくと云ひ大正三年一月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして而も機敏敢爲の氣象に富んで居た。昭和二年三月立花尋常小學校を卒業し爾後父母を扶けて農業に従事し傍同村青年學校に通ひ八年十一月其の課定を修了同年十二月徴兵として水戸歩兵聯隊留守隊に入營間もなく北滿に派遣中の所屬聯隊に



編入され爾來日夜軍務に精勵しつゝ各地の警備並に匪賊討伐等に参加し同九年五月所屬部隊と共に内地に歸還し十年十月滿期除隊となり功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。其の後十一年十二月警視廳巡查を拜命し東京三田警察署に勤務し良好の成績を挙げ大いに將來を囑目されて居た。



を経て十月十一日元氏附近に敵を壓迫した。

敵は早くより元氏附近に堅固に陣地を構築し其の守備を嚴にして居たが我が進出に乘じ優勢なる敵は攻勢に轉じ十一日午後九時頃此に端なくも彼我の遭遇戦は惹起された。此の時所屬大隊は部隊の豫備隊であつたが其の間敵の一部は我が右側面に向ひ攻撃の企圖あるを偵知し氏の所屬第一中隊は此の敵を撃攘すべき命を受けた。之迄豫備隊として脾肉の敷に堪

後所屬部隊は永定河北岸地區に進出し同河對岸の敵を攻撃すべく諸準備を整へ九月十四日敵彈下に渡河を強行し南岸の敵陣を攻略した。其の際所屬中隊は第一線大隊の豫備隊であつたが續いて北相谷莊の攻撃には第一線部隊として奮戦し更に十五十六日拒馬河畔に於ては優勢なる敵を驅逐し之を猛追して二十一日には大冊河北岸に進出し帶岸一帶に數線に設けたる敵堅陣中の要點たる石頭村高地の堅壘を攻略して二十四日保定に入城した。此の間氏は有ゆる危険困難を克服して勇戦奮闘し中隊の戦勝に寄與せる所甚大であつた。斯くて所屬部隊は九月末再び前進を起し滹沱河畔の敵陣を突破し石家莊

へざりし將兵一同は大いに勇躍し敵の出鼻を打破すべく直ちに出發し忽ち此の敵と遭遇するや一舉勇猛果敢に突撃し敵は周章狼狽屍體を遺棄して潰走した。然るに敗退したる敵は南杜村附近の既設陣地に逃入し砲を有する優勢なる敵と合して中隊に向ひ猛烈に銃砲火を浴びせて來た。中隊は引續き此の敵を攻撃したが敵は頑強に抵抗し我が攻撃は意の如く進捗せず中隊長は拂曉を待ち攻撃を再興すべく隊伍を整へ爾後の攻撃を準備した。斯くて天漸くあかるくならんとする以前中隊長は十名よりなる煙幕班を編成し敵陣地直前に煙幕展張を命じた。此の時氏は選ばれて其の一員となつた。煙幕班は未だ明けやらぬ朝靄にかくれて匍匐前進し敵前近く迫りて發煙筒を投ずるや濛々たる白煙は敵陣地を覆ひ敵は夫れと察して小銃機關銃の亂射を始めたが中隊は其の機に突進し一齊に手榴彈を投擲すると共に敵陣に突入し不意を打たれた敵は周章狼狽して潰亂敗走した。之より先氏は中隊の突撃と共に之に加はり陣頭に銃剣を揮つて勇敢に突撃し逃ぐる敵を追つて猛進したが途中敵の一弾は無念！ 氏の下腹部に命中して打倒れた。間もなく氏は衛生兵の手當を受けたが其の甲斐もなく氣息奄々たる裡に「天皇陛下萬歳」と奉唱しつゝ壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦力闘に依り中隊は優勢なる頑敵を屠り捕虜六十名野砲八門馬四十頭其の他多數の兵器彈藥を鹵獲し又戰場に遺棄したる敵の屍體は百に達し稀有の大捷を博したのであつた。

氏は警察官拜命の機會に於て身心の修養鍛錬に専念し一朝事ある秋に備へつゝあつたが今次聖戦に参加するや分隊の中堅として其の奮戦力闘は確かに群を抜いた。就中突撃の直前に於ける煙幕展張の適否は中隊戦闘最後の決に大なる影響を及ぼすのであつたが氏は篠つく雨の如き敵彈下に於て全く一身を顧みず死線を越へて的確且機敏に煙幕を展張し中隊の損傷を最少限に止めて最大の突撃力を保持し一舉縦深ある敵陣を突破し以て優勢なる敵を潰滅せしめ中隊をして甚大なる戦果を獲得せしめた功績は全く拔群で軍人の模範と稱すべきである。斯かる忠烈なる勇士を喪ひたるは洵に痛恨の至りであ



る。然りと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は皇軍戦史に光を放ち芳名は萬古に誦はれ不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T M)

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 貝原 巖

#### 忠孝兩全の勇士涿州近傍寶店鎮に奮戦して戦勝の礎石となる

氏は岡山市古京町の人にして亡父を佐市母をマサエと云ひ大正三年五月二十日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして氣概に富み孝心極めて深く又如何なる貧困者如何なる悪人と呼ばるゝ者に對しても之を輕蔑する事なく自己の修養に盡し世人の感激と敬愛とを受けて居た。昭和二年三月岡山市三動尋常小學校を卒業し其の後は暫く家庭に在りて家業を手傳ひ昭和七年三月より神戸市佐野順方に酸素充填員として勤務し入營時に及んだ。昭和九年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し間もなく滿洲事變の爲國境警備の重任に服し功を以て勳八等白色桐葉章を賜はつた。氏は特に銃劍術の伎倆優秀にして屢々賞狀及徽章を授與せられ輝かしく滿期除隊した。氏は家思ひの孝子にして在隊間四五十圓の貯金を母に送り又除隊當日より家業に従事する等稀に見る良兵良民であつた。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召森本部隊深野中隊に編入せられ第二小隊第一分隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は南苑良郷等要地の警備に就いて居たが涿州會戰の機熟するや九月十四日夜半良郷を出發し寶店鎮方向に向ひ強行軍を續けた。途中輕敵を驅逐し十六日午前八時三十分寶店鎮の敵陣地前約千米の高梁畑に攻撃準備を整へ

た。此の日朝來快晴にして無風、暑熱と黃塵に苦しんだが午前十時三十分愈々攻撃前進に移つた。敵彈は頭上を掠め友軍飛行機亦上空に活躍して居た。敵の陣地は寶店鎮部落の北部より其の東方鐵道線にかけトーチカ陣地あり地雷埋設地區ありて意外にも堅固なる陣地を作り手ぐすねひいて我が軍の進出を待ち構へて居た。午後一時前後敵前四五百米の線に進出するや敵の銃砲彈は十字を切つて猛射を浴びせて來た。所屬中隊にも漸次死傷者を増して來た。斯かる情況なるにも拘は



らず氏は泰然自若彈雨を冒して躍進を續くる間慧眼にも鐵道線路の東側より逆襲し來る敵を發見して速かに之を分隊長に報告し以て機宜に適する處置を取らしめ又戦死傷者の彈藥を蒐集しては戦友に分配する等適切機敏に分隊長の戰團指揮を輔佐しつゝ遂に敵前百五十米に達した。時に午後二時頃であつた。此の時敵は三方面より熾烈なる猛射を浴びせ來り敵彈は正確にして地を這ふ如く低く飛び我が第一線は死傷相次で生ずるに至つた。中隊長は悲痛な齒がみをなし「各個掩體を掘れ！」と令した。是極力損害を避け突撃の好機を待たんが爲であつた。氏等は交互に頑敵に應戦しつゝ壕を掘つた。右

翼第一線小隊長は敵陣地の弱點を搜索すべく單身斥候に出で行つた。氏は斯かる苦境の中にも豪膽沈着にして活躍中の敵の銃眼目掛けて正確なる狙撃を行つて居た。午後二時三十分頃所屬小隊は一時に數名の犠牲者を出した。其の内に氏は左下腹部に貫通銃創を受け元氣に「天皇陛下萬歲」と奉唱した。戦友は貝原！と連呼すれば氏は「残念だ！畜生！」と残念だ！和泉！」と烈々たる闘志に燃えて居たが敵彈は益々猛烈となり纏帯半ばにして又もや氏は頭部に貫通銃創を受けて



壯烈なる戦死を遂げ弾丸の餘勢は戦友和泉の大腿部をかすめて飛び去つた。あゝ事既に終れりと雖も決死の右翼小隊長は天佑にも敵陣地の弱點を看破するを得同日午後五時頃黄昏を利用し恨み骨髓に徹する敵陣地に壯烈果敢なる突撃を決行し見事に之を粉碎し壘上に日章旗をひるがへした。新戦場を眺むれば釣瓶落しの夕陽は河北の曠野を眞紅に染めて夕燒空に立のぼる一筋の煙、是尊き犠牲者等が茶毘の煙であつた。生存者等は感無量最後の黙禱を捧げて居た。

氏は陣中より家人に宛て「生きては還らぬ」愈々決死隊へ加はりました」等の手紙を寄せて居た。既に幼少より力の及ぶ限り孝養を盡し又弟妹に限りなき慈愛を垂れ而して今次聖戦に参加して大義の前に清く尊く身命を捧げた。氏や縦令前途洋々たる幾春秋を此の一戦に短縮したとは云へ無爲長生に勝るや萬々而も敵の大軍が抗日意識に燃えつゝ涿州の大會戦を豫期し小瘡にも其の陣前に皇軍の撃滅を企圖せるに拘はらず跳くも大敗潰走するに至りしは實に氏等精銳の尊き犠牲の賜であつた。今や斯かる至忠至孝の勇士を喪ふ痛惜哀悼を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 葛西伊久

#### 連絡兵活躍奮闘克く其の重任を果して南苑に散る

氏は大阪市西成區西今船町の人にして亡父を松太郎母をツルと云ひ大正四年十月三十日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實事に當り積極勤勉にして不屈不撓遂行せざれば已まざる氣概があつた。昭和五年三月居住地小學校高等科を卒業

し其の後は牛乳商の店員として四年間勤務し入營時に至つた。昭和十年十二月徵兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵して居た。

支那事變起るや南雲部隊大江中隊に屬し小隊長傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着するや七月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は戰雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完



うした。次で七月二十七日團河村附近の戰鬪に際しては雨飛する敵彈の下而も酷暑灼くが如く加るに通視行動共に困難なる高粱畑中を縦横に馳驅活躍して中隊長と第一線小隊長及分隊長間の連絡に活躍し各隊長の部下掌握指揮を容易ならしめ斯くて小隊が行宮兵營東方五十米の丘阜に進出するや氏は第一線分隊に加はり沈着克く精密なる射撃を敵に加へ多大の損害を與へて潰亂せしめ午後七時小隊をして兵營を占領することを得せしめた。

七月二十八日所屬部隊は南苑攻撃の爲午前五時より行動を起し拂曉までに攻撃準備を整へ午前八時三十分より攻撃を開始した。敵は高さ四米の土壁を利用し深さ三米の水濠を繞らし重機銃迫撃砲等多数の火器を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我が攻撃地區は利用すべき地形地物とてなく丈餘の高梁は連續繁茂し通視行動共に頗る困難なりしのみならず當日は前日同様無風にして氣温百四十度に昇り其の炎熱灼くが如くしかも渴すれど水はなく本攻撃の困難は敵彈以外に想像以上の困難があつた。而して中隊が攻撃前進に移るや敵は我が飛行機の爆撃野砲の砲撃にも怯えず頑強に抵抗し機關



銃迫撃砲を猛烈に浴びせ来りしが氏は各部隊の通視不可能なりし爲敵彈雨下する高粱畑を勇敢にも駆け廻り中隊長との連絡に待たず第一線分隊長との連絡に奮闘大いに努め常に其の連絡を確保して小隊長の戦闘指揮を容易ならしめかくして前進又前進して逐次敵に近迫し敵前五十米に到達した。然るに此の頃敵彈一層熾烈を極めたが氏は之に屈せず益々勇奮第一線分隊長と緊密なる連絡をとり又小銃を執りて沈着克く火力を最高度に發揚して其の突撃準備に奮戦中無念敵の迫撃砲彈身邊に炸裂して頭部に其の破片創を受け遂に其の場に倒れ重傷の爲再び起つ能はず聽て收容せられて黄村に到り衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく遂に七月二十九日惜しくも護國の華と散つた。しかし中隊長は氏等の奮戦により午後二時には敵に多大の損害を與へてさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏は選ばれて小隊長傳令となり其の戦陣に臨むや毎戦彈雨の下天候地形の困難を克服し至難且重要な連絡勤務に任じ終始勇敢奮闘其の都度重要使命を果し小隊長の戦闘指揮を容易ならしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ任務の爲には斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして河北の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮闘玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 鎌田 益 惠

#### 慧眼勇猛の小銃手重傷を負ふも尙奮戦遂に居庸關の華と散る

氏は鹿兒島縣揖宿郡額娃村の人にして父を當市母をチヨと云ひ大正五年十月三十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして責任觀念旺盛進んで難局に當るの概があつた。昭和六年三月宮脇高等小學校を卒業し續いて額娃公民學校に入校二年にして其の課程を修了し次で青年學校に入り同十一年三月卒業に際しては學術優秀且精勤の賞状を授與された。高等小學校卒業後は修學の傍父母を扶けて家業に精勵克く孝養を盡して居た。昭和十二年三月徵兵として滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來軍務に熱心勉勵し優良の成績を擧げ上下の信望厚かつた。

昭和十二年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊下芝隊の小銃手として出動し長城線の國境を越へ北支懷柔附近に到り待機警備に就いた。其の後北支の風雲は益々險惡となり遂に我が北支駐屯軍は七月二十八日より北京周邊の敵第二十九軍に對し膺懲の攻撃を開始した。之と相俟つて氏の所屬部隊は清河鎮附近の敵陣を攻略し續いて西苑附近の敵第二十九軍に對し殲滅的の大打撃を與へた。然るに當時既に京綏線方面に進出せし有力なる支那中央軍は八月初め以來長城線に向つて進軍を續け挑戰的行動に出て來た。茲に皇軍は此の新敵を撃破すべく軍を進め所屬部隊は八月九日萬壽山附近より前進を開始し十一日より難攻不落を誇る南口附近の天險に據る頑敵を猛攻して晝夜激戦の後之を突破し息つく暇もなく西北方に急追した。而して十八日所屬中隊長は第二大隊長の指揮下に入りて精勵章山の敵陣を突破し更に同夜第一大隊長の隸下に皺山の敵を強襲撃退し尙進路兩側の山岳重疊地帯に據り抗戦を持續する敵を逐次に撃破しつゝ敵を長城線に壓迫した。此の間氏は不眠不休有ゆる困難危険を冒して勇戦奮闘し中隊長の戦勝に貢献する所甚大であつた。



斯くて所屬隊は十九日愈々居庸關西南方最高峯を攻撃することとなつた。此の時氏は小隊長大參少尉の指揮する第二突撃班に加はり午後一時五十分第一第二突撃班の順序に前進し敵の猛火を冒して敵陣地直前に達したが敵は頑強に抗戦し彼我近く相對して激烈なる手榴彈戰は開始せられた。我が決死突撃隊の手榴彈は相次で美事敵陣地内に命中炸裂し大參少尉以下は其の機に決然敵陣に突入して奮戦格闘敵の大部を殲滅し遂に該地を占領した。之が爲爾後の戰闘は有利に進展し二



十一日には長城線の望樓を攻撃するに至つた。望樓は長城線の要所要所に構築されたる一つの城廓であつて守るに易く攻むるに難く遂に一舉夜襲を以て之を奪取するに決し中隊長は澤小隊長に突撃班の編成を命じた。此の時氏は進んで之を志願し林伍長の指揮する第三突撃班の一員に加へられた。澤小隊長は第一突撃班を先頭とし第二第三突撃班の順序に午後八時行動を開始し第二望樓に向つた。然るに此の夜月明なりし爲敵の發見を避くることに非常に苦心し峻峻なる岩間を辿り辛ふじて第一第二突撃班は望樓下に近迫し得たが此の時敵の發見する所となり樓上よりは手榴彈の雨を浴びせて來た。小隊

は一舉に望樓を奪取せんと企てたるも城壁高くして攀登し得ず加ふるに其の後方及左の高地より輕機關銃の猛射を受けて死傷相次で生ずるに至つた。第三突撃班に在つて此の光景を察知したる氏は分隊長に報告し第三突撃班は直ちに望樓の背後に迫つた。之を知つた敵は第三突撃班に向つて熾んに射彈を集中し此の機に第一第二突撃班突撃を敢行し續いて氏の屬する第三突撃班も亦望樓の背後より突撃した。此の時氏は勇敢にも先頭に突進し奮戦格闘逃ぐる敵を追撃中無念敵の一手望樓を占領したのであつた。

氏は今次聖戰に参加するや常に第一線に出で、屢々勇猛果敢なる肉弾突撃を敢行して中隊戰勝の素因を作り殊に天險たる望樓攻略に際しては慧眼戰機に投じて小隊主力を死地より救出し突撃成功の主因を作爲し且率先獅子奮迅の勢をもつて突撃し重傷を負ふも尙奮闘を續けて玉碎した、是畢竟君國の爲に一身を捧げ斃れて後息まんとせる盡忠報國精神の發露である。聖戰の初期斯かる忠勇義烈の士を喪ひしことは洵に痛惜忍び難きも氏が奮戦玉碎して樹てたる拔群の功績は芳名と共に燦として皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 片岡 博

清原縣下の討匪戰に積極果敢に重任を完うし戰勝の途を拓く

氏は茨城縣那珂郡神崎村の人にして父を寅次郎亡母をけさと云ひ大正五年九月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして孝心深く事に當るや熱心勤勉進んで難局に當るの美風を持つて居た。昭和五年三月神崎高等小學校を卒業し其の後は父を扶けて家業たる農業に従事し乍ら同村横堀農業青年學校へ通學し昭和十一年三月同校を卒業した。翌十二年



三月徴兵として關東軍獨立守備歩兵隊へ入營し朝陽鎮に於て初年兵教育を受け熱心勉勵良成績を挙げ早くも第一期教育期間より海龍縣附近の討匪戦に参加し更に八月中旬には車路溝附近の討匪戦に参加して奮闘した。

昭和十二年七月蘆溝橋事件勃發以來北支の情勢は日一日と險惡を加へたが反滿抗日及共產黨の不逞匪は相呼應して滿洲國の擾亂を企圖し各所に蠢動蜂起するに至り氏等の警備も亦多事多端の日を迎ふるに至つた。所屬北郷部隊増田中隊は清原縣に在りて勤務中であつたが九月五日夜半清原縣第三區南山城子



匪首不明の共產匪約七拾名來襲し同地の警察自衛團は交戦中との急報に接し所屬中隊長は緊急集合を命じ急遽駐屯地を出發し南山城子に向ひ急進した。氏は此の際小銃手として勇躍之に参加し同地に到着したが敵匪は我が鋭鋒を避け南山城子東南方約二里半の懷包信子東側の標高七五四高地に遁入し頑強なる抵抗をなすに至つた。所屬中隊は翌六日敵を追撃し直ちに同高地の敵を攻撃するに決したが敵は天險を利用し小銃機關銃の猛射を以て我が軍を阻止して居た。

氏は此の時第一線分隊に屬し分隊長を核心として敵の彈雨を冒し峻を攀ち登りては正確迅速なる猛射を以て有効適切に頑敵を制壓し更に率先好機を捉へて逐次躍進を續け敵前至近の位置に進出した。其の豪膽機敏なる事は眞に衆兵の模範であつた。然るに當面の敵は圖太くも一步も退却せず頑として抵抗を續けて居た。此の時所屬中隊長は稜線の北方に迂回せる米村小隊に重要命令を與ふべく氏に傳令を命じた。氏は欣然決死傳令の重任を全うすべく敵火の集中最も盛なる稜線を超え迅速確實に之を米村小隊長に傳達し且其の小隊を案内して敵

の側背に進出せしめて敵匪を包圍し討伐隊の攻撃態勢を極めて有利に導き戰勝獲得の第一素因を與ふるに至つた。氏は傳令の重任を果し再び所屬分隊へ復歸せんと稜線傳ひに急行中七四五高地に於て猛威を逞しうしある敵の輕機關銃を發見した。氏は憤然として獨斷之を猛射して其の戰鬪力を奪ひ敵兵退却の動機を作つた。併し此の時氏は敵の猛射を浴び其の一弾は無念！氏の左腰部より臀部を貫通し出血多量の爲遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬部隊は氏の豪膽適切なる行動に依り包圍態勢を完了し同高地に於て殆ど敵を捕捉殲滅し潰走せる一部の敵は四散潰走するに至つた。時に六日午前十一時頃であつた。

氏は温厚にして沈勇の人滿洲警備の重任に服するや數度の討匪戦に参加し克く上官の命に遵ひ小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず一死報國を心に誓ひて勇往邁進し殊に氏が最後の討匪戦に於ける行動の如きは鬼神の如き働きとも謂ふべく眞に皇軍精兵の本領を發揚して餘す所もなかつた。皇軍主力が支那大陸に活躍するの時氏は人目も引かぬ滿洲の僻地に匪賊討伐の犠牲となつたと考ふる者なきにあらざるも是思はざるも甚だしき者にして今次の討匪戦たるや實に聖戦と密接不可分の關係にあるは勿論滿蘇國境の情勢は一觸即發の危機に直面して居つた。氏等の勇戰奮闘ありて初めて皇軍の背後安定し氏等の尊き犠牲ありて共產匪の蠢動を撲滅し滿洲國に對する第三國の野望を封じ得たのであつた。今や氏の壯容に接すべくもなく痛恨哀悼禁する能はずと雖も氏の功績たるや皇軍戦史に輝きて其の芳名を後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川上 勇 吉

## 敬虔豪膽の勇士熱河省討匪戦中一身に大敵を支へ戦勝の途を拓く

氏は沖繩縣宮古郡平良町の人にして父を三郎母をマツと云ひ大正五年四月三日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして責任觀念に富み又敬神崇祖の心厚く起床及就寢の時刻には心を罩めて宮城を遙拜し又業務の餘暇には伏見桃山御陵及男山八幡宮に參詣する等近代青年中稀に見る敬神家であつた。昭和六年三月平良高等小學校卒業後暫らく家事を手傳つて居たが志を立て同年十一月大阪市に出で港區吾妻町の實兄榮一方に於て自動車運轉助手となり同九年十月よりは自動車運轉手の免狀を受け叔父棚原繁方に勤務して居た。氏は諸事に周到敬虔にして熱誠罩めて車輛の手入整備を行ひ愛車の使用前後に於ては車に對し感謝の禮を行ふを通例として居た。斯くの如きは感謝感恩の生活に透徹せる人にして初めて能くし得べき所にして氏の修養の非凡なるを卜知し得るであらう。氏の半面は潑刺たる活躍そのものにして柔道を學び器械體操を練習し又荒浪を蹴つて小舟を操縦し節制を重んじ以て常に體力氣力を養成し又諸種の參考書を讀獵して識見を高むる等向上進歩を求めて息まなかつた。昭和十二月一月大阪歩兵聯隊へ入營し熱誠軍務に勉勵して良成績を擧げ同年四月滿洲派遣部隊に編入せられ暫らく新京に駐屯して居た。新京警備間支那事變勃發するや氏等も亦多事多忙の日を迎へたが氏は諸種の警戒勤務に服するの外トラツク運轉を命ぜられ特技の妙を發揮し警備隊の任務遂行に著大なる貢獻を與へた。

八月中旬に至り所屬山津部隊は熱河省葉柏壽方面の警備を命ぜられ錦承線の警備に就く事となつた。氏は待望の日來ると勇躍し實兄宛に「兄上様喜んで下さい。小生等の山津部隊は選ばれて第一線に立つて居ます。我が帝國に及向ふ奴輩を撃ちまくる祖國日本を護る重大任務を負うて立つてゐます。祖國の爲潔よく身命を捧げる覺悟で來たのです。此の邊には

匪賊も澤山居ります殆ど毎日のやうに戦闘があるとの事です。お蔭で勇吉も一等兵に進級しました今後益々努力致す覺悟です。ではお婆様や父母様方にも見さんから宜しくお傳へ下さい云々」と書いてあつたが此の手紙が遂に絶筆にならうとは神ならぬ身の知る詮もなかつた。



十月十日から二十二日にかけて建昌縣内の秋季討伐を行はれたが當時匪賊は縣内東部山岳地帯に活躍して居た。氏は小銃手として中隊主力と共に十日駐屯所を出發し勇猛果敢匪賊を索めて之を撃破した。移動間屢々トラツクの故障を起したが氏特有の技能を以て神速に故障部を修理し部隊の移動を戦機に投合せしむるを得た。又匪首孫玉殿が合流匪約三百名を指揮して老溝附近に於て頑強に抵抗するや氏は第一分隊兵として沈着正確なる射撃を以て敵匪を次々と射殺して攻撃前進を容易ならしめ且突撃の動機をも作る等目覺しき活躍を續けて居た。

超えて二十三日有力なる敵匪が黃家杖子南側の高地一帯を占領しあるを知るや所屬中隊は先づ第三分隊を右第一線、第二分隊を左第一線として攻撃を開始した。敵は我が兵力の僅少なるを知り愈々頑強に抵抗するに至つた。此の時第三分隊に連繫すべき警察隊の展開位置は後退に過ぎし爲第三分隊は敵の包圍火を受け又第二分隊も優勢且廣正面の敵火より斜射縱射の十字火を浴び就中敵の最右翼に在る輕機關銃は最も猛威を逞しうせる爲遺憾乍ら爾後の攻撃前進は至難の状態となつた。茲に於て中隊長は第二分隊との連絡に兼ねて應援の目的を以て中原准尉に氏を附して第二分隊方面へ派遣した。中原准尉は該機



關銃の右側に迂回して之を撃退するに決し峻峻なる起伏地を突破して速かに目的地に進出し氏は一發必中の正確さを以て敵機關銃を射撃すれば敵は驚愕忽ち姿を没した。氏は機を失せず制高地點に躍進して第二分隊正面の敵に猛烈なる側射を以て撃ちまくれば敵は周章狼狽氏に對して猛射を浴びせて來た。氏は嚴然としてその集中火を一身に引受け奮闘する間に第二分隊は猛然敵に肉薄し戰勢を挽回するを得た。此の時不幸氏は下腹部に貫通銃創を受けたが一語も漏らさず苦痛を忍んで射撃を續け第二分隊の果敢なる攻撃と相俟ち敵に多大の損害を與へて潰亂敗走せしめ茲に勝敗一決したが氏は渾身の力も盡き心靜かに息を引取つた。所屬中隊長及中原准尉は氏の尊き遺骸に取りすがり「川上！ よくやつてくれた！」と休へ切れぬ感謝の聲涙と共に氏の冥福を禱り續けたのであつた。

ああ敬虔神に通じ至誠天地を貫く眞に是氏に應はしき言葉であらう。氏や小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず敢然として難局に立ち戰勝の途を開いた。而も過去幾多の討匪戰に其の俊敏なる技術判斷と優秀なる手腕とを以て兵員移動用自動車故障を排除し所屬中隊の任務達成に貢献せる處亦偉大であつた。皇軍主力が支那大陸に活躍するの時之と密接不可分の熱河討匪戰の重要な役割たりしは敢て喋々を要する迄もなく氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き芳名永く後世に瀾はるるであらう。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛歎哀悼禁する能はずと雖も氏が不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 鎌ヶ迫春夫

擲彈筒手敵機關銃を撲滅して工兵隊の敵前作業を遂行せしめ居庸關の華と散る

氏は鹿兒島縣肝屬郡大根占町の人にして父を甚計佐亡母をミオマツと云ひ大正七年三月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性率直にして不屈不撓の氣概に富んで居た。昭和八年三月宿利原高等小學校を卒業し續いて大根占町中等公民學校に入校した。氏の父は日清日露の兩戰役に從軍し長兄も亦軍人となりし爲氏は幼時より軍人たらん事を希望し昭和十一年五月中等公民學校在學中十九歳にて現役を志願し十二年三月滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し優良の成績を擧げつゝあつた。

同年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊に編入され長屋隊の擲彈筒手として七月中旬北支に出動した。斯くて所屬部隊は滿支國境を越へ北支懷柔附近に到つて待機警備に就いた。其の後北支の風雲は益々險惡となり遂に皇軍は七月二十八日拂曉より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對し攻撃する事となつた。此の日所屬部隊は清河鎮附近に陣地を占領せる歩兵約四大隊を基幹とする敵を攻撃して之を撃破し續いて小南庄西苑等所在の敵を掃蕩して第二十九軍に殲滅的大打撃を加へたる後萬壽山附近に兵力を集結し爾後の攻撃を準備した。當時京綏線方面に進軍し來りし新銳なる支那中央軍は八月に入るや長城線に向つて進軍を續け挑戰的行動に出て來た。茲に於て北支の皇軍は此の新敵に大鐵槌を下すこととなり八月九日所屬部隊は前進を開始し十一日南口附近の敵を攻撃した。南口は山岳地帯の突端にして天然の城壁を爲し敵は難攻不落と誇つて居た所である。我が各砲兵隊は午後二時三十分より一齊に砲撃を開始し其の掩護の下に一進一止攻撃前進し夕刻敵陣近く迫り夜を徹した。斯くて翌十二日所屬中隊は大隊の第一線となり未明より虎峪村南方



俗稱二ツ山の敵壘を攻撃した。此の時氏は第一線小隊第四分隊擲彈筒手として此の戦闘に参加したが敵は我を敵制する天險の高地上に堅固に陣地を占據し多くの自動火器と有力なる砲兵を配備して頑強に抗戦し我が攻撃前進は頗る困難であつた。中隊は適時全火力を發揚して敵を制壓しつつ躍進を重ね遂に敵陣地直前に肉薄し火力を最高調に發揚すると共に氏等擲彈筒手は今こそとばかり擲彈を敵の頭上に浴びせ同時に中隊は決然敵陣に突入奮戦格闘遂に午前七時五十分二ツ山の堅



陣を占領した。當時に於ける氏の奮戦振りは洵に目覚ましく中隊の突撃成功に甚大なる貢献を爲したのであつた。南口附近の頑敵を撃破したる所屬部隊は息つく暇もなく敵を急迫したが敵は更に居庸關の堅壘に據つて頑強に抵抗した。居庸關は有名なる支那三關の one にして峻山屏立一夫路に當れば萬夫進む能はずと云ふ所であつた。我が軍は炎天下百三十度の灼熱をまともに受け前人未踏の道なき山嶺を數倍の敵に向つて晝となく夜となく進撃を續け食糧彈藥の輸送も杜絶えて草を食ひ大根をかじりつゝ進撃し其の困苦缺乏辛酸は名狀し難きものであつた。斯くして所屬部隊は八月二十日夕居庸關の南門近く迫り突撃を準備した。此の時氏の屬する矢野小隊は障礙物破壊の工兵決死隊掩護を命ぜられた。矢野小隊長以下氏等決死の勇士は欣然として工兵隊と共に其の夜午前二時暗に乗じて隱密に行動を開始し工兵隊は午前三時三十分頃障礙物の位置に到達し作業を開始した。此の時氏は小隊の左側に位置し側方の警戒に任じて居たが暫くして障礙物に裝置しありし敵の地雷は轟然爆發し同時に敵は我が作業を察知し一斉に猛射を開始し機關銃は暗夜に火を吐いて眼も目映ゆきばかり

にて我が工兵隊の作業は頗る氣づかはるゝ状況となつた。

茲に於て矢野小隊長は火光を目標に敵機關銃を撲滅すべく之を氏等擲彈筒手に命じた。氏は猛火を潜つて良射程の位置まで進出し沈着勇敢に火を吐く敵機關銃に連續數發を發射して遂に之を撲滅したのであつた。然るに其の瞬間敵の迫撃砲彈は無念氏の背後に炸裂し肺部に其の破片創を受けて昏倒した。併し氏等の奮戦に依り工兵隊及掩護隊は死力を盡して重任を完遂し斯くして翌々二十三日朝天下の峻居庸關は皇軍の有に歸したのであつた。氏は其の後收容せられ天津の陸軍病院に入院し手厚き醫療を受けたが其の甲斐もなく人事不省の間にも絶えず戰場の譁言を云ひつゝ九月二日惜しくも護國の華と散つた。

氏は今次聖戦に参加するや一死報國の赤心は有ゆる困難辛酸を克服して勇戦奮闘殊に居庸關南門附近に於ける敵機關銃の撲滅は工兵隊の重任達成に偉大なる貢献を爲したのであつた。實に斯くの如きは一身を君國に捧げ斃れて後息まんとせる軍人精神の發露である。參戰幾日ならずして斯かる忠勇の士を喪ひしことは洵に痛恨の極みであるが氏の樹てたる赫々の武勳は芳名と共に皇軍戦史に光彩を放ち不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)



## 陸軍工兵上等兵勳八等功七級 片貝政雄

## 沈勇豪膽なる鐵道機關兵天津鐵橋を死守して重任を全うす

氏は富山縣中新川郡東加積村の人にして父を幸平母をフヨシと云ひ大正五年二月二十九日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして長上を敬ひ幼者を慈しみ又事に當るや献身的にして毫も努力を厭はず身を持する事堅實にして農業の閑散期には賣藥の行商に出づる等勤勉努力の青年として一般世人の信頼厚かつた。昭和五年三月東加積小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業の傍賣藥行商に従事し相當の収益を得家計を助けて居た。昭和十一年十二月徵兵として關東軍鐵道隊へ入營し翌十二年三月選ばれて機關員教育隊へ派遣せられ機關術を専修して居た。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月戸澤部隊水野中隊に編入せられ谷村小隊の機關兵として勇躍北滿より天津方面へ南下し所屬小隊は天津總站及同地所在の部隊用器材の警備に任ずる外一部を以て同驛西南方に當る鐵道橋の守備の一員となつて居た。當時支那第二十九路軍並に其の變裝公安隊等は抗日意識に燃え物情騒然として所在に不穩の形勢を示して居た。而も我は敵兵力に比し甚だしく少數にして氏等の警備行動たるや全く敵の包圍圈内に於て大なる危険に曝されて居たのである。斯くて七月下旬以來は北寧線沿道に駐屯せる支那軍の形勢は我が軍を劣勢と見て愈々露骨となつて來た。天津周圍には第三十八師の諜下部隊と公安隊とを加へ其の兵力九百名に達し包圍の態勢を整へて居た。

七月二十八日夜谷村小隊長は「今夜もまた敵襲があるぞ、皆鐵帽を冠つて居れ油斷するな！」と注意を與へ暫し疲勞を休ませて居た。其の夜半午前一時五十分突如銃聲一發！又一發！靜寂の夜暗に響き渡つた。是鐵道橋の左岸地區より來襲せる敵部隊を發見せる我が歩哨よりの射撃であつた。やがて橋の右手に當る製粉工場から豆を煎る如き氣たゞましき



敵機關銃聲が聞え正に鐵橋方面への襲撃とわかつた。守兵は豫定の陣地に就き應戦した。敵は優勢なる兵力を持って橋梁に押寄せて來た。午前三時頃我が守兵は憤然として群がる敵中に突入し線路内に侵入せる敵を撃退したが氏は此の時率先敵中に突入して數名を刺殺し更に敗退する敵を撃つて撃ちまくつた。橋梁守備隊は長追する事なく再び守地に就いた。午前六時頃敵は懲り性もなく再び襲撃して來た。守備隊は敵を近寄せて第二回の突撃を行つた。氏は又もや先頭を切つて二三の敵兵を刺殺した。敵兵は我が守兵の勇敢に抗しかね約百

米餘も後退して地上に嘯ちりつた。氏は分捕の青龍刀をかざして戦友二三名と共に鐵橋上を占據し當面の敵に對し百發百中の正確さを以て之を射殺して居た。其の時敵は白旗を立て、此方へ前進するやに見えたが之を欺瞞せる逆襲行動であつた。氏は憤然として之を射撃し次々と命中彈を得たが守備隊の彈藥は將に盡きんとして居た。幸にも装甲自動車に依り彈藥を補給され敵は部落内に姿をかくした。氏は彈藥を受領せんとして頭を擧げし其の一瞬時憎むべき敵の一彈の爲右眼上の前額部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り所屬小隊は橋梁守備の重任を全うし且爾後の作戰に重大なる利益を收めた。氏は志操堅實にして沈勇不撓の人今大聖戰に参加するや既得優秀の技術を以て軍事輸送に任じ北寧線上重要驛たる天津停車場の警備を擔當中我に幾十倍する大敵より夜襲を受けたるも豪膽不撓克く衆敵を撃破し驍勇眞に鬼神をも避けしむるの概があつた。實に氏は眞の大勇者として一般軍人の鑑たるものであつた。然るに聖戰の初期早くも斯かる忠誠勇武の



士を喪ふ痛恨哀悼極りなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 川上勤一

清河鎮の決死砲兵隊員重傷に屈せず頑敵を撲滅して重任を全うす

氏は長崎縣西彼杵郡福田村の人にして父を寅八母をしかと云ひ大正五年一月二日に生れ未だ獨身であつた。性剛毅闊達にして報國の志厚く又責任觀念に富み酒煙草は一切用ひず常に體育に注意し極めて優良なる體格に恵まれ徴兵検査官より賞讃せられし程であつた。昭和四年三月福田尋常小學校卒業後直ちに長崎市東山學院へ入學し第三學年終了後同市鎮西中學校へ轉校し昭和十一年三月同校を卒業した。在學間は水泳選手として名聲を博して居た。昭和十二年三月現役志願兵として關東軍錦縣砲兵隊へ入營し日夜軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

昭和十二年七月七日蘆溝橋事件勃發するや間もなく入江砲兵部隊土岐中隊に編入せられ第一分隊の四番砲手として勇躍屯營を出發し山海關天津通州を経て板橋村に進出し七月二十八日には奈良歩兵部隊に續行し清河鎮方向に向ひ前進した。氏は此の間炎熱百二十度不眠不休の強行軍を續け克く分隊長を輔佐し他砲手に協力し完全に其の任務を遂行した。然るに清河鎮の敵は其の兵力約四箇聯隊とも稱せられ部落の周圍は土壁と外濠をめぐらし尙四周は高粱密生繁茂して全く通視を妨げ短小射界のみを設けて居た。午前九時頃清河城郊外後屯附近に於て我が前衛部隊は敵の一部と衝突したが所屬中隊

は逸早く我が第一線歩兵に協力して之を撃退し更に友軍歩兵の前進に連れ午後一時頃清河城の敵陣地を距る千二百米内外に位置する永泰莊の西南端に陣地を變換したが高粱に妨げられて敵陣地を明確に認識する事は出来なかつた。わが第一線歩兵隊は高粱畑の縁端まで出たがそこは敵前僅かに五十米、敵の機關銃や迫撃砲に射すくめられて死傷續出し一步も前進が出来なかつた。茲に於て所屬中隊長は當面の歩兵戰鬥に協力の爲悲壯の決意をなし午後二時半第一小隊長遠藤准尉に氏



の所屬分隊を指揮せしめ第一線に陣地變換を命じた。小隊長以下は九死に一生だも期待し得ぬ難局に直面し重責を双肩に擔ふたのである。「では唯今より出發します」と中隊長に挨拶し勇躍死地に赴いたが中隊長は「成功を祈るぞ」と其の眼には涙が光つて居た。あゝ砲車の進路！ 一列動く高粱の波、暫しも息まぬ小銃機關銃の亂射、地響あけて落下炸裂する迫撃砲の盲撃ち其の物凄き射弾は氏等の身邊に蜷集して居た。豪膽不敵の氏は神色自若として一意分隊長の命に従ひ畑の縁端目ざして無言の前進を續けた。小隊長は縁端の後方間近に分隊を止めて射撃準備を完了せしめ一部の要員を縁端に導き



に右前方に現れたる敵機關銃及迫撃砲は氏等の分隊目がけて集中射を浴びせて来た。之が爲氏は下腹部に貫通銃創を受け打倒れた。併し豪膽不撓の氏は此の重傷に屈せず更に三發の發射を續けたが無念！嵐の如き敵銃砲彈の爲墨丸に貫銃創右手に砲彈破片創を受け「撃て〜」と連呼しつゝ戦友數名と共に壯烈なる戦死を遂げた。當面の歩兵部隊は氏等の目覺ましき奮闘に依り遂に突撃を決行し同日の午後七時半清河鎮の一角を占領し之を確保するを得た。

氏は夙に純情赤誠の人、其の入營前に於ける日誌の一節に「今は非常時の世だ、兵役に服する事は覺悟して居らねばならぬ。出た以上は再び歸らぬ覺悟で居るべきだ。昨夜東亞の曉と云ふ映畫を見たが友邦滿洲國を背景とした映畫だつた。そうだ！ 俺は之を見てどれ丈け参考になつたかわからぬ。大和櫻の如く潔よく散つたあの沖、横川の雄々しい最期、日本人ならではの見る事が出来ない。俺は近い内に滿洲へ行くぞ〜」此の崇高なる感激の下に終始一貫上官の命に従ひ如何なる辛苦も險難も眼中になく壯烈鬼神を泣かしむる偉勳を奏して玉碎するに至つた。あゝ聖戰の初期早くも斯かる忠勇義烈の士を喪ふ。痛惜哀悼を禁じ得ざるも氏の功績たるや皇軍砲兵の本領を發揮して遺憾なく天晴れ皇軍戰史に不朽の芳名を轟はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍衛生上等兵勳八等功七級 勝田 武夫

忠勇なる衛生兵上海戰場に活躍し惜しくも蘇州河畔に散華す

氏は三重縣鈴鹿郡神邊村の人にして父を宗次郎亡母をみはと云ひ大正五年八月二十日に生れ未だ獨身であつた。性温厚

篤實にして同情心に富み義務心厚く事を行ふや思慮周到熱誠眞摯にして遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。昭和六年三月神邊高等小學校を卒業後直ちに龜山公民中學校へ入學したるも都合に依り翌七年九月中途退學し大阪鐵道局奈良機關庫々内手を拜命し誠實業務に精勵し同十年十月機關助手を命ぜられた。昭和十二年一月徴兵として伏見工兵聯隊へ入營し衛生兵として教育を受け常に良成績を擧げて居た。



支那事變起るや昭和十二年九月吉野部隊岩井中隊に編入せられ衛生兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月下旬上海戰場に到着し直ちに上海北部戦線に活躍するに至つた。當時戰場は殘暑尙厳しく夜間急に冷却し晝夜温度の激變あるのみならず敵は退却に方り井水に撒毒せる徴候などもありて惡疫流行し加ふるに良水を得る事困難にして衛生上考慮を要すべき點頗る多かつたが中隊は日夜固家宅新陸宅間の道路構築並に架橋作業に従事して居た。氏は其の間晝夜兼行中隊衛生に献身的の努力をなし遂に一名の患者をも出さざりしは氏の周到積極的に活躍せる賜と云ふも過言ではなかつた。

十月二日より數日間劉家行大場鎮附近戰闘の爲所屬中隊は廟村大王宅寺前村を含む地域に於て軍路の構築架橋作業に従事したが氏は絶え間なく作業場を巡視し戦友等の靴傷の手當や保健に就き自己の勞苦を惜しまず親切に手當を施し且上司に其の狀況を報告して上官の適切なる指導に資する等戦友皆氏の友情に感激して居た。斯くして十月六日よりは數日に亘り雨天が続いた。然るに中隊の露營設備は未だ不完全にして衛生上極めて懸念すべき状態であつたが氏は積極的に上官に



意見を具申し又惡疫豫防に關する注意を各兵に徹底せしめ心より親切を盡し自らの疲勞を顧みず活躍を續け又作業者敵彈に負傷せる者に對しては沈着機敏其の處置を誤らず危急を救ふ等完全に衛生兵の重任を果し以て大宅馬橋宅顧家宅張宅を含む地域に於ける中隊の擔任作業に支障なからしめた。次で所屬中隊は十月十一日より廿日にかけて後方幹線交通路たる大宅宅—張宅間の道路補修を初めとし敵の牙城たる大場鎮の堅壘攻略の爲大場鎮の北方地區及西北方地區に於ける新設道路及所要の架橋作業の爲晝夜兼行の大作業に従事するに至つた。然るに連日の降雨に加へて重軽車輛の通過に依り主要なる道路及橋梁は殆ど破損し剩へ敵陣地よりは晝夜の別なく亂射亂撃を受け兵員の疲勞並に負傷者も漸次増加するに至つた。氏は此の間に處し彈雨を冒して負傷者に手当を施し又病者を勞はり極力兵員の減耗を防遏し以て中隊の任務遂行に甚大なる貢獻を與へた。

十月廿八日より蘇州河畔に向ふ總追撃戰を開始せらるゝや所屬中隊は砲兵の陣地進入援助並に後方幹線路の補修橋梁架設等の重任を與へられた。當時彼我の戰線は大牙錯綜の状態で所屬隊は危險界に在りて作業に従事したが氏は從容機敏敵の彈雨を冒して傷者の手当に任じ又露營地炊事場等の陣中衛生に細心の注意を用ひて當事者に協力した。十一月二日所屬中隊は蘇州河鐵橋の改修作業を命ぜられ上海西南中山路上を前進中蘇州河の北方約五百米に差しかゝりし時敵の銃砲彈の猛射を浴びるに至つた。氏は神色自若忠實に中隊兵員の狀態に注意を拂ひつゝ行進中第四小隊の寺島一等兵が橋梁の修理材料を運搬中凹地に轉落して受傷した。斯くと見たる氏は逸早く駆けつけて手當中敵彈は益々氏等の身邊に蟻集して來た。氏は小隊長の命に依り負傷者と共に附近の壕内に這ひ込んだ。此の時憎むべき敵彈飛來氏は右肩胛部に盲貫銃創を受けた。されど責任觀念に燃ゆる氏は之に屈せず完全に戰友の手當を終り小隊長に報告せる後自己の負傷を届出でた。氏は同日夕刻野戰病院に收容され手厚き治療を受けたが十一月三日午前三時容態急變し從容として護國の華と散つた。中隊の

將兵一同は氏の散華に限りなき哀愁に沈み中には氏の遺骸に取すがつて慟哭し離れ得ぬ戰友さへもあつた。是氏が平素將兵一同より如何に信頼と愛敬を受けありしかを如實に物語るその一端であつた。

氏は人格高邁にして到る處諸人の信望を受けて居た。今次聖戰に参加するや粘土質の泥濘地帯而もクリーク網の如く流れて行動を妨げ際限もなく掃比せる敵の堅壘よりは晝夜絶ゆる事なき亂射亂撃の中に毅然として神の如く活躍し中隊附衛生兵の本分を全うして玉碎した。蓋し七生報國を期し得る人にして初めて能くし得べき所であらう。今や斯かる忠誠有爲の士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ衛生兵の鑑として皇軍衛生史に輝き其の芳名を後世に驅るべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日衛生上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 米田友市

#### 勇敢なる擲彈筒手克く我が突撃隊を支援し東花園に玉碎す

氏は兵庫縣養父郡廣谷町の人にして父を軍治母をつねと云ひ大正五年三月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして克く父母に仕へ忍耐心強く又弟妹を愛し今次出征後も寸暇を割いて弟妹に激勵誘掖の手紙を送り越せし事は度々であつた。氏は又仕事に熱心にして常に黙々として働き倦むことを知らず爲に郷黨の褒め者となつて居た。昭和五年三月廣谷高等小學校を卒業し續いて廣谷農民學校に入り同九年十月本科研究科第二學年を修了爾後父母を扶けて只管家業に精勵し十二年一月徵兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵良好の成績を挙げ同年九月には一等兵に進級した。



支那事變起るや八月上旬長野部隊中川中隊に編入せられ勇躍北支に向け出動した。其の出發に方り氏は父に手紙を寄せ「愈々今度北支に出動する事に成り日本男子として最も名譽である悦んで下さい。此の上は一身を捧げて君國の爲に働きます皆様も御身大切に仲よく御暮し下さい。死後は茂も居ることです自分も安心して我が廣谷町の名譽にかけて働きます御心配下さいませぬ。どうかをちい様を御大切に御願ひ申上ます云々」と一死君國に報ぜんとする牢固たる決意を述べて居た。斯くて所屬部隊は北支に到着するや折柄北支一帯の大出水に



居た。斯くて所屬部隊は北支に到着するや折柄北支一帯の大出水に會し有ゆる困難飢渴を克服しつゝ汎濫浸水地帯の難行軍を続け九月九日より馬廠附近の攻撃開始せらるゝや所屬部隊は敵の左翼要衝たる沈河鎮の堅壘に向つて同夜十一時行動を起し泥濘脚を没する高梁畑を前進し敵前五百米に達して夜を徹し翌十日拂曉と共に我が砲兵及空軍協力の下に敵を猛攻して遂に之を奪取した。當時氏の中隊は第一線となり氏は擲弾筒手として中隊の第一梯子班に加はり全身泥人形となりて勇敢に敵前近く前進し十日突撃に際しては雨下する敵弾下に沈着剛膽敵の重機關銃に向つて射弾を浴びせ遺憾なく擲弾筒

の威力を發揮して小隊の突撃を容易にし其の戦勝に寄與せし所大なるものがあつた。此續いて所屬部隊は滄州攻撃の爲前進し二十三日滄州附近敵陣地帯の堅壘と謂はるゝ東花園を攻撃することとなつた。此の日氏の中隊は大隊の豫備隊として敵の猛火を冒し午後六時半頃南部人合庄と堤防の間を前進し二十四日午前三時大隊の右第一線たる第四中隊の右に増加を命ぜられ午前四時三十分第一線に進出し續いて攻撃前進したが天漸くあかるくなるや

敵は熾に迫撃砲機關銃火を集中して来た。中隊は之を物ともせず一意前進し午前八時東花園東側に進出し直ちに南運河左岸にある敵の第二トーチカに向つて攻撃した。敵弾は愈々猛烈となり恰も篠つく雨の如く特に敵の重機關銃は猛威を揮つて居た。此の際氏は擲弾筒手として沈着勇敢克敵の機關銃目がけて有效なる射弾を集中し之を制壓して居たが愈々突撃の機迫るや氏の分隊は小隊長より突撃支援射撃を命ぜられ氏は敵のトーチカに對し猛烈に射弾を集中した。暫くして發煙班に依り煙幕展張せられたと思ふや中隊は濛々たる煙幕にかくれ決然敵の第二トーチカに突撃して遂に之を奪取し氏の分隊又續いて進出した。此の時第三トーチカの敵は猛烈に射撃を開始し爲に我が死傷續出するに至つたが小隊は屈せず前進を続け遂に第三トーチカの前五十米に達し氏は勇敢に敵自動火器に對し射弾を浴びせて居たが無敵敵の一弾は氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り間もなく第三トーチカを奪取し續いて東花園を

攻略し午後六時二十分所屬長野部隊は滄州を占領したのであつた。氏は出征に際し一死報國の牢固たる決意を父に披瀝して居たが果して戦陣に立つや死を見る歸するが如く雨下する敵の猛火の中に沈着剛膽每發必中の射弾を敵に浴びせ特に東花園攻撃に於ては重要時機に挺身死地に入り遺憾なく擲弾筒の威力を發揮して敵の重火器を制壓し小隊の突撃を支援した功績は正に披瀝と謂ふべきである。親に孝弟妹に優しき氏が斯かる勇敢決死の活躍を爲せしは蓋し氏の燃ゆるが如き盡忠至誠と忠孝一如の信念に發せるものと謂ふべきである。參戰幾何ならずして斯くの如き忠孝義烈の士を費ひし事は惜しみて尙餘りあるも氏の赫赫たる武勳は千載に互り皇軍戦史を飾り其の芳名は千古に傳へられ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又兩親弟妹の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(OS)



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉田 義 之

## 擲彈筒手率先挺身して奮戦突撃の動機を作爲し南苑の華と散る

氏は岡山縣淺口郡玉島町の人にして父を庄市母をさかえと云ひ大正四年十一月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑にして正直事に當り積極勳勉遂行せざれば已まざる氣概を有し郷土の模範青年であつた。昭和五年三月玉島小學校高等科を卒業したが在校八年の間六ヶ年精勤章を受けた。高等小學卒業後は家事を手傳ひ亦鹽田稼等を爲して家計を扶け入營時に至り昭和十年十二月徵兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵同十二年六月には上等兵勳務を命ぜられた。支那事變起るや南雲部隊米滿中隊に屬し擲彈筒手として勇躍征途に就いた。かくて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は戰雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完うした。七月二十六日團河村附近の戦闘に際しては氏は火線に在つて敵彈雨飛の下沈着正確なる射撃により敵を制壓して小隊の前進を容易ならしめ其の突撃に際しては機を失せず敵の機關銃を制壓して小隊突撃の動機を作爲し奮戦以て午後七時小隊をして敵陣地を占領することを得せしめた。

七月二十八日所屬部隊は南苑攻撃の爲午前五時三十分より行動を起し拂曉までに攻撃準備を整へ午前八時四十分より攻撃を開始した。敵は高さ四米の土壁を利用し深さ三米の水濠を繞らし重輕機關銃迫撃砲等多數の火器を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく高粱は連續丈餘に繁茂して通視行動を妨げしかも當日無風にして氣温は百四十度上昇し炎熱灼くが如く我が攻撃の困難は豫想以上であつた。中隊は部隊の豫備隊として攻撃前進に移るや敵は我が飛行機の爆撃野砲の砲撃にも拘らず頑強に抵抗し機關銃迫撃砲弾を猛烈に浴びせ來りしが前進又前進一

意敵に近迫し午前十一時稍過ぎ敵前二百米に達せし頃第一線は間もなく突撃に移らんとする狀況なりしも正面土壁に據れる敵の抵抗意外に頑強にして我が第一線の突撃は困難の狀況であつた。かくと見たる中隊長は豫備隊の擲彈筒を以て此の頑敵を制壓すべく「擲彈筒手出て來い」と命ずるや氏は率先勇躍して進出し他の擲彈筒手數名の先頭に立ちて射撃に適する第一線附近の陣地まで勇敢に挺身し機を失せず土壁上の敵機關銃に對し沈着精密なる數彈を發射して見事之を制壓し第一線部隊に突撃の動機を與へしが其の際無念敵の迫撃砲彈顔面に命中し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし部隊は氏等の奮戦と尊き犠牲により敵に多大の損害を與へて午後二時にはさしも頑強なりし敵陣地を占領することを得た。



氏郷に於ては模範青年と讃へられ戦陣に立つや剛膽勇敢彈雨の下身の危険を顧みず率先挺身して奮戦し擲彈筒の威力を發揚し部隊戦勝の端を開きて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて任務に斃れんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。参戦幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛恨に堪へざるも氏が奮戦玉碎

して以て開戦劈頭暴慢不遜の敵を膺懲したる抜群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)



## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉 田 勇

## 夜間單身敵前近く猛火を冒し傳令の任を完うして東花園に散る

氏は兵庫縣宍粟郡安師村の人にして亡父を牛太郎母をむめと云ひ大正五年五月六日に生れ未だ獨身であつた。資性眞面目にして意志鞏固事に當り着實勤勉爲し遂げざれば已まざる實行力を有し青年の模範として讃へられてゐた。昭和六年三月安師小學校高等科を卒業其の後は家業に従事し傍青年學校に通ひ同十二年一月同校を卒業した。在校中は成績優秀にして青年訓練査閱官より賞詞を受け又郷土青年の統一團結に大いに盡力し母校をして模範青年校にまで築き上げたる功績は没すべからざるものであつた。昭和十一年十二月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵成績優秀にして四月には上等兵候補者に選ばれ七月には精勳章を附與せられ一等兵に進級し殊に射撃は小銃輕機關銃共に中隊第一位であつた。支那事變起るや長野部隊田巻中隊に編入中隊指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し九月七日より馬廠附近の攻撃開始せらるゝや所屬中隊は九月九日夜襲により小王莊の敵陣地奪取の命を受け九日午後十一時四十分姚家庄を出發し肅々として敵陣地に向つた。氏は中隊長と共に中隊の最前方を前進して逐次敵に近迫し中隊愈々突撃に移るや陣地前身を没する大水濘を勇敢に徒涉し猛烈果敢に第一陣地に突入して之を奪取した。然るに敵は我が中隊の奇襲的夜襲により第一陣地を奪取せらるるや本陣地方向より猛烈なる火力を集中し來り爲に我が死傷續出するに至りしが氏は毫も之に屈せず中隊長に従ひ敢爲前進して第二陣地に突入奮戰格闘の後之をも奪取し餘勢を以て更に其の後方小王莊部落の一角をも占領した。總て敵は優勢なる兵力を以て之を奪回すべく逆襲し來りしも氏は第一線に加はり沈着正確なる射撃を以て奮戰之を撃退し遂に小王莊を確保し中隊爾後の戰鬪を容易ならしめた。



九月二十三日大隊は午前六時砲兵の支援射撃の下に東花園北方敵の主陣地に向つて一齊に攻撃前進を開始し所屬中隊は人合庄より東花園に通ずる道路上機關銃四銃を收容せる掩蓋陣地を奪取すべく此の敵に向つて近迫した。此の時氏は中隊長と共に雨下する敵陣を冒し歩行至難なる泥濘水濘縱横に走れる地帯を勇敢に一進一止して遂に突撃距離に達した。此の間氏は萬難を排して大隊本部比隣中隊各小隊間の連絡に任ずること數回悉く迅速確實に其の任務を達成し中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ夕暗迫る午後六時三十分愈々突撃命令下るや中隊長に従ひ勇猛果敢に第一陣地に突入之を奪取し息をもつかず逐次其の後方に點在する第二第三線の陣地に突撃又突撃し此の間我が死傷相次で生じたるも之に屈せず猛進し遂に堅固に設備せられたる敵の本陣地前約五十米に達した。時恰も下弦の月光は物凄く戰場を照らしトーチカよりする射撃は一層猛烈を極めしも益々勇奮猛威を逞しふしつあるトーチカに向つて奮戰を續けありしが此の時既に中隊の左方に進出すべき筈の第三中隊と連絡絶えたる爲中隊長は氏に第三中隊を搜索し速に連絡すべく命じた。氏は勇躍任に就き單身夜間猛火と有ゆる困難とを冒し遂に其の連絡を確保して歸還し將に中隊長に復命せんとせる刹那(午後十時)輕機銃の猛射を被り胸部に貫通銃創を受けた。併し氏は之に屈せず鮮血に塗れながら中隊長に復命した。中隊長は感謝感激の涙に咽びつゝ氏の功を賞して激勵したが氏は既に起つ能はず衛生兵の手當を受けながら任務を完遂せるを喜び莞爾として微笑に 天皇陛下の萬歳を奉唱し間もなく看護の甲斐もなく護國の華と散つたのであつた。併し中隊は氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲とに



より二十四日午前一時三十分には敵の第一線陣地を同日朝までには全く敵の堅陣を抜くことを得た。氏郷に在るや模範青年と謂はれ軍隊に入るや優良兵として忽ち上等兵候補者に選ばれ出征に際しては初年兵にも拘はらず選ばれて中隊指揮班員となり弾雨の下沈着勇敢常に死線を越へて其の責任使命を完うし中隊長の戦闘指揮を容易ならしめて遺憾なかつた。實に斯くの如きは一身を君國に捧げて其の重任に斃れんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き忠烈有爲の士を喪へるは洵に痛恨に堪へざるも奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高松喜一郎

#### 勇敢機敏の小銃手拒馬河何時婁桑舗に奮戦散華す

氏は茨城縣西茨城郡東那河村の人にして父を泰一郎母をよくと云ひ大正四年二月一日に生れ未だ獨身であつた。資性剛毅にして敏捷進んで難局に當るの人であつた。昭和四年三月東那河高等小學校を卒業し爾來父母を扶けて農業に従事し同十一年一月徴兵として水戸歩兵聯隊に入營日夜軍務に勉勵し優秀なる成績を揚げ上官より厚き信頼を受けて居た。支那事變起るや昭和十二年八月石黒部隊第八中隊に編入され小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は豪雨泥濘飢渴の難行軍を續け永定河畔に前進し同河對岸の敵を攻撃すべく諸準備を整へ九月十四日午後敵前渡河を敢

行して南岸の敵陣を攻略し息つく暇もなく敵を急追して之を拒馬河畔に壓迫した。當時敵は拒馬河對岸一帶に最も堅固なる既設陣地を構へ敵を合して優勢なる兵力を配備し我を待ち構へて居た。拒馬河は河幅百數十米剩へ連日の豪雨に依り河水頓に増加して水深一米六〇内外に達し濁流滔々として一大障礙を呈して居た。所屬部隊は速かに敵を攻撃すべく十六日夜半敵の抵抗を冒して拒馬河の渡河を強行し對岸北相附近の堅壘を強襲して之を奪取し更に敵を捕捉殲滅すべく猛進した。此の時氏の所屬小隊は砲兵掩護隊となり砲兵と共に婁桑舗附近に前進した。然るに十七日午前六時頃約百五十名の敵は我を攻撃して來た。小隊の兵力は敵に比し甚だ劣勢ではあつたが小隊長は斷然此の敵を撃攘すべく同村南側地區に展開し攻撃前進に移つた。此の時氏は右火線分隊の最右翼兵として勇敢に攻撃前進した。然るに約三十名の新なる敵は小隊の右翼を包圍する如く前進して來た。氏は素早く之を發見し小隊長をして機を失することなく對應適切の處置を講ぜしむる事が出來た。斯くて小隊は雨や霰と飛ぶ敵弾を冒して銳意猛攻を續け全火力を發揚して敵に大なる損害を與へ我が攻撃



は逐次有利に進展しつゝあつたが惜しくも攻撃前進中敵弾を受けて倒れた。體て氏は衛生隊に收容せられ手厚き醫療を受けたが其の甲斐もなく其の日護國の華と散つた。併し小隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り遂に敵を撃破潰走せしめたのであつた。

氏は今次聖戦に参加するや有ゆる危険困難を冒して勇戦奮闘し時に夜間追撃の連絡兵となり動もすれば離脱せんとする



小隊と中隊長間の連絡を確實に保持せしめ又戦闘間火線に在りては沈着勇敢に正確なる射撃を以て敵に大損害を與へ或は時々刻々變化する敵情を適時分隊長に報告し又特に小隊の右翼を包圍せんとする敵の状況を速かに報告して戦闘を有利に導きたる等其の功績は偉大である。是畢竟一死君國に奉ぜんとする盡忠至誠の顯現にして聖戦の初期斯かる忠誠勇武の士を費ひたるは洵に痛恨の至りである。然りと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は千載に亘り皇軍戦史に輝き芳名は千古に誦はれ不滅の英靈は靖國の神となり神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高羅 文 雄

傳令活躍奮戰團河村の追撃戦に玉碎す

氏は三重縣飯南郡花岡町の人にして父を宮藏母をキタと云ひ大正五年十月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして孝心深く職務に忠實にして不屈不撓の氣概を有し事に臨みては頗る勇敢であつた。昭和六年三月育生小學校高等科を卒業し其の後は津市中井呉服店に勤務し同九年九月家事の都合により退店の上同郡大石村製材工場の職工となり入營時に至つた。昭和十一年十二月徴兵として大邱歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵其の成績も良好であつた。

支那事變起るや鈴木部隊第十一中隊に屬し小隊傳令として勇躍征途に就いた。其の出陣に當り家郷に書を寄せて「我が隊にも出動命令が下りまして〇〇日戦地に向ひます一死報國元氣で戦地に行きます故御安心下さい」とあり文簡なるも其の牢固たる決意を披瀝してゐた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着直ちに連日連夜集結地たる張家灣に向つて行軍した。然るに炎熱灼くが如く殊に雨の爲道路は泥濘膝を没し加ふるに睡眠不足の結果落伍者頻出するに至つた。氏は此の難

行軍に終始志氣旺盛萬難を克服して遂行せしのみならず其の休宿に當つては極度の疲勞に拘らず進んで各種勤務に服する等中隊の任務達成に貢献せし所多大であつた。

七月二十七日所屬中隊は行軍縱隊の本隊たる大隊の先頭にありて午前六時張家灣出發其の西南方約六里馬駒橋に向つて急行軍を實施した。然るに其の附近一帶は一面の畑地と泥濘の濕地にして高粱は丈餘に繁茂ししかも炎熱百四十度灼くが



如く頗る難行軍にして落伍者續出する状態なりしが氏は終始奮勵志氣旺盛午後四時三十分所期の如く團河村附近に到達した。然るに此の時第一線部隊は既に激戦中にして其の聯隊砲中隊は敵の包圍攻撃を受け苦戦しつゝありとの情報に接し中隊は直ちに其の包圍中の敵の側面を攻撃すべき命令を受けた。依つて中隊は此の敵を攻撃すべく急速に展開し我が砲兵及重機關銃の支援射撃下に直ちに攻撃前進に移るや氏は第一線小隊の傳令として地形の困難と酷暑を冒し雨か霰の如く飛び来る敵弾を物ともせず小隊長と分隊長間を勇敢に駆け廻り小隊長の命令意圖の傳達に活躍し以て小隊長の戦闘指揮を容易ならしめかくして小隊は前進又前進して敵に肉薄し遂に突撃に移り敵を撃退して機を失せず追撃に移るや氏は小隊長に従ひ率先々頭に立ちて勇進し沈着克く敵を喰ひ更に追撃中無念左胸部に貫通銃創を受け午後七時四十分遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲とにより益々勇奮敵に多大の損害を與へて之を撃滅することを得た。



氏郷に在るや孝子出で、戦陣に臨むや不屈不撓萬難を克服し彈雨の下積極活躍克く傳令たる重任を完うせしのみならず率先して勇敢に奮戦し小銃兵の本領を發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは出陣時決意披瀝の如く忠孝一道一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして河北の野に散りしは痛惜極まりなきも一戦奮闘玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田 邊 剛

勇敢沈着適時的確の輕機射撃により戰勝の端を拓きて團河村に散る

氏は岡山縣都窪郡妹尾町の人にして父を順平母を松と云ひ大正四年八月三十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚寡言事に當り積極忠實爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和十一年三月妹尾尋常小學校を卒業其の後は農業に従事し傍同七年十二月青年學校に入り同十年三月同校を卒業した。昭和十年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優良にして翌十一年十二月選ばれて歩兵學校に分遣せられ同十二年五月原隊に復歸六月九日歸休除隊した。支那事變起るや早速應召南雲部隊中川中隊に屬し輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月二十六日まで唐山附近の守備に任じたが當時北支は暗雲低迷し氏は頗る緊張裡に日夜勤務に精勵し克く其の任を完うした。七月二十六日早朝所屬部隊は唐山出發列車に依り午後十一時黃村驛に下車し南苑を攻撃すべく氏の中

隊は尖兵中隊たる第九中隊に續行し二十七日午後零時五十分黃村を出發した。當日は天氣晴朗無風にして氣温は百四十度に昇り炎熱灼くが如く而も高粱茂る間道を南苑に向つて前進した。途中斥候の報告に依り敵は行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り部隊は此の敵に對し展開し攻撃準備を整へた。敵は堅固に陣地を構築し其の陣地前には深さ胸にも達する水壕を繞らし重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。中隊は大隊の右第一線となり所屬小隊は其の



最右翼小隊として敵の翼側に向ひ攻撃前進を起すや丈餘の高梁連續し我が戰場行動は頗る困難なりしが氏は火線分隊内にありて有ゆる困難を物ともせず雨下する敵彈の下分隊長指揮下に前進又前進して勇敢に敵陣地に近迫し中隊は午後二時三十分より戰鬥を開始するや氏は銃眼に據れる敵に對して沈着克く精密なる射撃を加へて之を沈黙せしめ以て小隊の前進を容易ならしめ逐次躍進近迫して突撃距離に達せる頃偶々一本木附近に掩蓋を有する敵の自動火器現はれ我に猛射を浴びせ來り爲に小隊内死傷續出するに至つた。氏は素早くも此の敵自動火器の位置を發見確認して機を失することなく獨斷之を猛射し忽ち之を沈黙せしめ以て小隊突撃の動機を作為し次で分隊長の突撃號令と共に將に發進せんとせし刹那無念胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲により午後七時には敵に多大の損害を與へてさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏軍隊に入るや熱心精勵良兵として將來を囑目せられ其の戦陣に臨むや輕機射手として彈雨の下積極勇敢沈着正確なる



射撃と機宜に適せる獨斷奮戰とにより中隊の敵翼側包圍の企圖を容易ならしめ戦勝の端を拓くに至つた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るるまで輕機射手たる重任を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎は百戰功なき瓦全に優る。氏が此の一戰に奮戦力闘して以て開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 谷所卯之助

#### 狙撃手重傷に屈せず尙奮戰遂に行宮の陣前に散る

氏は兵庫縣有馬郡貴志村の人にして父を芳之助母をはつと云ひ大正五年八月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實眞面目にして孝心深く業務には几帳面且責任觀念旺盛であつた。昭和五年三月貴志小學校高等科を卒業し引續き補習學校に入り同八年三月同校卒業其の後農業に従事し傍尙續いて青年訓練所研究科に入り其の課程を終つた。昭和十一年十月二日徵兵として平壤歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績良好にして上等兵候補者に選ばれ修業中であつた。支那事變起るや輕登部隊第三中隊に屬し第三小隊第一分隊狙撃手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて北支戰線到着後氏は家郷に書を寄せ其の中に「僕は速者で御奉公してゐます。どうぞ僕のことには心配せずにおて下さい。男子としての花ですから」とあつた。而して七月二十六日郎坊附近の攻撃には所屬中隊は部隊豫備として參加し午前八時

三十分頃敵兵退却を開始するや中隊は列車にて敵を追撃し其の夜部隊宿營に就くや氏は含營衛兵として徹宵緊張勤務し克く其の任を完ふした。

七月二十七日所屬中隊は尖兵中隊となり午後一時三十分黃村を出發し南苑に向つた。然るに途中行宮附近に敵あるを以り午後三時三十分此の敵に對し攻撃を開始した。敵は土壁及墓地等有利なる地形地物を利用し銃眼掩蓋等を堅固に構築し



重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく炎熱は百四十度に達して灼くが如く加ふるに丈餘の高梁繁茂して我が行動は頗る困難であつた。所屬小隊は當初中隊の豫備隊として第一線小隊の左翼後を前進せしが敵前約三百米附近に於て第一線兩小隊の中間に増加を命ぜられ爾後第一線となり攻撃前進した。氏は其の火線分隊内にありて機關銃迫撃砲彈雨飛する中を物ともせず沈着して常に有利なる目標に對し毎發必中の狙撃に専念し且一進一止率先して勇敢に前進しかくして惡戰苦闘の後漸く敵前百五十米附近に達するや敵の集中火は一層烈しく前進愈々困難となるに至りしが氏は之に屈せず益々志氣を鼓舞して奮戦中午後六時五十分敵彈大體部を貫通し其の場に倒るるに至つた。しかし剛氣の氏は更に屈せず應急手當後尙も任務を續行したが遂に氣力盡き衛生兵の看護を受けし其の甲斐なく茲に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲により午後七時十分頃敵に多大の損害を與へて行宮の西北角を奪取することを得た。



氏や孝子出でて戦陣に臨むや彈雨の下或は勇敢に率先進し或は沈着正確なる狙撃を爲し小銃兵たるの本分を完うして遺憾なかつた。しかも瀕死の重傷を負ふも屈せず尙も射撃を繼續す、實にかくの如きは忠孝一道一身を君國に懸けて驚るるまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして散りしは痛恨盡きざるも士は百戰功なき瓦全を愧ぢ一戰玉碎名を残すに如かず。實に氏が行宮の一戦に玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國の前途を守護すると共に一家の將來に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田 邊 稔

大場鎮の激戦に敵の彈雨を冒して連絡の重任を果し玉碎す

氏は岡山縣淺口郡長尾町の人にして父を醇平母をヨシノと云ひ明治四十二年六月六日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして不言實行事に臨みては不屈不撓遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。大正十三年三月長尾町尙中小學校高等科を卒業後岡山縣兒島商船學校に入學したが同年十月家事の都合に依り退學し其の後は家庭に在りて農業に従事し誠意兩親に孝養を盡して居た。昭和五年一月徴兵として岡山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を挙げ特に小銃射撃に習熟し優等賞狀並に第二種射撃徽章を授與せられた。翌六年七月には歸休除隊となり歸郷後は再び農業に従事し郷里在郷軍人分會並に消防組の役員に推舉され公共事業にも盡力し世人の信頼厚かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召三技部隊青山中隊に編入せられ泊擊砲隊砲手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬上海戰場に到着し天谷支隊に配屬せられ月浦鎮附近の戦闘開始せらるや九月九日三濱に陣地を占領し塘家宅附近の敵陣地を制壓して第一線歩兵部隊の攻撃に協力し翌十日前方に陣地變換を行はんとするや敵は小嶺にも我が第一線歩兵に對し猛烈なる逆襲に轉じて來た。所屬中隊は速に之を猛射して多大の損害を與へ撃退したが此の際氏は敵彈雨飛

の中を物ともせず最も勇敢に活躍して砲手の本分を全うし所屬中隊の戦闘に大なる貢獻を與へた。



九月十三日より羅店鎮附近の攻撃を開始せらるや所屬中隊は南曹南側に陣地を占領し同月廿一日の總攻撃には巽家宅、周家宅の壘を猛射して之を壓倒震駭して殲滅的打撃を與へ以て第一線歩兵の同陣地奪取に至大なる協力を與へ續いて翌二十二日には李家宅西南方クリークの線を死守せる頑敵に巨彈を浴びせて之に多大の損害を與へ廿四日朝は雨を冒し羅店鎮の東方約三百米に陣地を推進し小堂子高家宅方面の敵陣地を粉砕し以て我が第一線歩兵の攻撃前進を容易ならしめた。氏は其の間全身泥にまみれ冷雨に打たれ食ふに食なく渴すれど水なく死屍累々臭氣紛々たる野蠻やクリークに幾多の辛酸を嘗め又晝夜ひつきりなしに敵の銃砲彈下に曝されたが既に一死報國を期して率先勇敢に奮闘を續け砲手の本分を全うした。

十月下旬に入り大場鎮方面の戦機漸く熟するや所屬中隊は廿四日大場鎮攻撃に参加を命ぜられ午前十時羅店鎮附近の陣



地を撤去し礮石橋を経て黄宅附近に陣地を占領して第一線歩兵に協力し更に蘇家宅に陣地を變換して朱家梅園北方の走馬橋クリークに據る頑敵を粉碎して我が第一線歩兵の同クリークの敵前渡河を完全に支授した。習廿五日所屬中隊は機を失せず陳家梅園北側に陣地を變換するに決し分解搬送に依り速かに新陣地に進入し陸港北密灣張家桶の各要點を砲撃した。氏は此の際小銃手として觀測班及後方との連絡に任じ敵彈雨飛の中に活躍を續け衆兵の模範として其の馳名を轟はれた。翌廿六日右兵團の進出遅れし爲當面の敵部隊の活躍活潑となり氏等の右側方は猛烈なる敵の彈雨を浴びるに至つた。此の時氏は後方約千米の彈藥集積所へ連絡の爲全く遮蔽物もなき平坦開潤地を挺身疾驅し連絡の任務を全うして砲側へ歸還し更に疲勞を顧みず敵彈を意とせず敵を猛撃中の砲手の爲其砲手壕を完全ならしめんと工事を増強中不幸一彈飛來前頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午後零時廿分であつた。戦友等は氏の尊き犠牲に悲憤と感謝に胸迫り壓倒的の猛砲撃を加へて敵を粉碎し堅壘無双と誇りし大場鎮陥落の一端緒を開いた。

氏は温厚にして沈勇の人今次聖戦に参加するや連日江南特有の雨に曝され粘土の泥畑に靴さえ重く彈藥や糧秣は後方に見え乍ら晝夜間断なき敵銃砲火の爲行動の自由を缺き到る處堅壘とクリークの網を成せる戦場に難戰苦闘を續け火砲の威力を最大限に發揚し偉大なる武勳を奏して遂に惜しくも玉碎した。寔に是皇軍精兵の鑑と云ふべきであつた。今や其の壯容に接すべくもなく痛歎哀悼禁じ難しと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 武田喜太男

此の父にして此の子あり一死垂公の決意固く大敵と奮戦小寒村に玉碎す

氏は秋田縣由利郡象潟町の人にして父を包吉母をノブエと云ひ大正二年十一月二十九日に生れ妻政江との間に愛見喜男を擧げた。資性温厚酒煙草を嗜まず業務に熱心忠實にして不屈不撓の氣概があつた。氏は又親に孝行にして今次應召前母が怪我するや日夜附添ひて看護し出征後も絶えず母の安否を案じ陣中よりの書信は此の事のみであつた。昭和三年三月優良の成績を以て象潟小學校高等科を卒業優等賞を授けられた。其の後同七年七月自動車運轉手普通免許證を下附せられ次で同八年徴兵検査の結果第一補充兵役歩兵に編入せられ同十一年七月乗客貸切自動車免許を受け一人息子として一家の柱石となり自動車業及新聞販賣店を營んでゐた。尙同十二年簡閱點呼には參會者百數十名中の模範として點呼執行官より賞詞を受けた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召兵站自動車隊大島部隊矢島中隊に屬し第一小隊第五分隊貨車操縦手として勇躍征途に就いた。其の出征途上家郷に一書を寄せ「目的地到着後は一命を國家に捧げ名譽の武人として奮闘する覺悟であります」と固き決意を披瀝してゐた。斯くて所屬部隊は八月上旬北支に到着し同月中は豐臺北平南口北柳樹林附近次で九月中旬迄南口懷來宣代附近の補給業務に従事せしが此の間惡路と過度の使用による自動車の手入保全に全力を傾倒し運轉亦宜敷を得不眠不休の活躍を續け以て中隊の任務達成に大なる貢獻を爲した。

九月二十一日所屬隊は宣化を出發同日蔚縣に着し彈藥糧秣を積載し二十四日夕長城線附近靈邱の南方八里小寒村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は同村附近に露營した。此の頃第一線は戦況刻々急を告げしを以て中隊は至急歸還靈邱



より新銳の歩兵部隊を前線に増加すべく兵力輸送の任務を受け二十五日早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ同地を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に沁む朝であつた。露營地を後にして進むこと二軒其の先頭谷間の道に差懸るや往路此の附近には敵影を見ざりしに敵は昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂回せるものと見え午前九時十五分俄然敵と遭遇するに至つた。依つて部隊は直ちに之と應戦したが敵は迫撃砲重機銃を有する正規軍にして千五百を下らざる大部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに百七十六名殊に



其の大部分は輻重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三方面より攻撃し來り忽ち我は全く敵の重圍に陥るに至つた。當初氏は第一線攻撃小隊の授隊として自動車附近に在りて之が直接護衛に任じ居りしが敵は其の兵力の優勢を恃みて逐次小隊の背後に迂回攻撃し來りしを以て氏等は野呂伍長の指揮下に小隊の後方崖の上端に進出し迫り來る群敵に對し毫も怯まず沈着之に猛射を加へ敵に多大の損害を與へたが如何せん優勢なる敵は漸次近迫し遂に我が前方十米の至近距離に肉薄し來つた。野呂伍長以下氏等は最早

是迄なりと銃剣を振つて猛烈果敢に敵中に突入し氏は其の數名を殲したるも其の時無念頭部及胸部に敵の投擲せる手榴彈の爆創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲とにより約三時間半に亘り豪兵克く豪敵を支へ且自動車を敵手に委することなく午後零時四十分其の包圍線を突破し三浦部隊に合することを得た。

因に氏の父は一家の柱石かけ換なき一人息子を失ひたるに拘はらず其の戦死の報に接するや「喜太男戦死の知らせあり本懐に堪へず」と原隊に打電した。斷腸の思を包みて君國に捧げし我が子の戦死に満足の意を表す之實に大和民族の血脈に流るゝ萬邦無比なる尊き傳統精神の顯現と云はずして何であらう。原隊將兵一同が此の電報を見て感激に咽びしも當然と云ふべきである。

氏は元來至孝の人であつたが其の戰場に臨むや北支の地惡路險難加ふるに皇軍破竹の進撃に伴ふ晝夜兼行の急追隨其の後方敗殘兵の出沒衰損多き徵用自動車の運轉等其の辛苦は想像以上なりしに拘はらず終始一貫粉骨碎身其の優秀なる伎倆と相俟つて此等有ゆる困難を克服し近代輻重の全能を發揮せしめて常に前線の戦力を培養した。實に第一線快勝の裏に隠れたる此の涙ぐましき功績は没すべからざるものである。而も果然不測の大敵と遭遇するも沈着勇敢克く群敵と奮戦力闘死力を竭して軍用物件を守護して遺憾なかつた。氏陣中片時も親を思ふて熄まざるに彈雨の下壯烈實に斯くの如きは出征途上決意披瀝の如く父より滅死奉公の精神を承けたる氏が忠孝一如の信念に家をも身をも打忘れ其の一身を君國に捧げて斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に皇軍輻重の鑑と云ふべきである。征戰中途氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨盡きざるも氏が奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は後世不朽に轟はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に遺族の上に尊き加護佑助を垂れ愛兒の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)



### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 田中勝治

#### 滿洲事變の勇士小玉莊東花園に奮戦して遂に玉碎す

氏は兵庫縣美方郡温泉町の人にして實父(亡)を岡本岩藏實母(亡)をりの養父(亡)を寅之助養母をさだと云ひ大正元年八月二十七日に生れ妻すみえとの間に一子章雄を擧げた。資性濃厚にして剛毅而も事に當り勤勉爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和二年三月温泉町小學校高等科を卒業し其の後は家業に従事しつつ傍同四年四月青年訓練所に入所し同年一月退所した。昭和八年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營同年二月滿洲に派遣せられ一面坡に駐屯して同地附近の警備に任じ且四月には牙勃羅尼及十七里附近五月には感虎嶺元寶頂子同賓附近の討伐に参加し翌九年五月内地に歸還功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり同年七月歸休除隊したが在隊間は軍務に精勵精勤章を又除隊の際は善行證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊田中隊に屬し第二小隊第四分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し九月七日より馬廠附近の戦闘は開始せられた。所屬中隊は九月九日小玉莊の敵陣地を夜襲して奪取すべき命を受け九日午後十一時四十分姚家庄を出發し肅々として敵陣地に向ひ前進した。氏は分隊長池本上等兵の指揮下に中隊夜襲の誘導斥候となり中隊の最前線にありて率先勇敢逐次敵に近迫し支障なく誘導の重任を完うし中隊愈々突撃に移るや陣地前身を没する大水濠を勇敢に徒涉し猛烈果敢に敵の第一陣地に突入し奮戦の後中隊は之を奪取した。然るに敵は我が中隊の奇襲的夜襲により該陣地を奪取せらるるや本陣地方向より猛烈なる火力を集中し來り爲に我が死傷續出するに至りしが氏は毫も之に屈せず分隊長指揮下に敢爲前進して第二陣地に突入之をも奪取し更に其の後方小玉

莊部落の一角をも占領した。轉て敵は優勢なる兵力を以て之を奪回すべく逆襲し來りしも氏は沈着正確なる射撃を以て敵に大なる損害を與へて之を撃退し中隊は該地を確保した。

九月二十三日所屬大隊は午前六時砲兵の支援射撃の下に東花園北方敵の主陣地に向つて一齊に攻撃前進を開始し所屬中隊は人合庄より東花園に通ずる道路上機關銃四銃を收容せる掩蓋陣地を奪取すべく此の敵に向つて近迫した。氏は第一線



へしも益々勇奮猛威を逞しふしつあるトーチカを奪取すべく突撃前進したが當時敵の手榴彈及機關銃彈は猛烈を極め無念氏は頭部に貫通銃創を受けて遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲により二十四日午前一時三十分には其の第一陣地を同日朝には敵の全陣地を抜くことを得た。

氏や實に滿洲事變に功を樹て今次亦召されて戦陣に臨むや毎戦勇敢に奮戦克く歩兵の本領を發揮して遺憾なかつた。實



に斯くの如きは家をも身をも忘れ一身を君國に捧げて斃るるまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き忠烈の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高山新一郎

#### 孝子外長城線に奮闘し敵トーチカを粉碎し戦勝の端を拓く

氏は東京市城東區北砂町の人にして父を金平母をさいと云ひ大正五年九月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性温良快活にして孝心特に深く事に當るや熱誠眞摯常に責任を重んじ遂げずんば息まざるの氣概を有し世人の信頼厚かつた。昭和五年三月砂町第一尋常小學校を卒業し其の後は同町内のアルミニウム製造所の職工となりて家計を助け又常に質素儉約身を修め給料日には必ず親の嗜好品などを買ひ求めて両親に勤めて居た。氏は又運動競技に興味を有し野球選手となり尙オートバイの運轉にも堪能にして工場側より重寶がられて居た。昭和十二年一月徵兵として麻布歩兵聯隊留守隊へ入營し間もなく滿洲派遣部隊に加へられ齊々哈爾に於て初年兵教育を受けつつ警備の重任に服して居た。

北支の風雲愈々險惡を加ふるや昭和十二年七月下旬湯淺部隊小林中隊に編入せられ第二小隊第一分隊兵として勇躍天津方面へ出動し八月初旬逸早く同地方の支那軍及抗日分子を掃蕩して治安維持に任じて居た。八月中旬所屬部隊は特別任務

に基き熱河省多倫を経て同月十五月張北に到着し同地方の警備に就いたが翌十八日には野口將校斥候の斥候要員として選拔され長城線の北方約四吉米に當る火溝、大江溝附近の敵情地形偵察の任務を受け豪膽慧敏克く斥候長を輔佐して重要資料を報告し爾後の戰闘計畫に寄與せる所甚大であつた。斯くて所屬部隊は同月二十日より長城線の攻撃に参加し午前八時より行動を起した。此の日朝來雨雲低く垂れ友軍砲兵は天明と共に濃氣を帯べる空気を震はせながら敵陣地の要點破壊の



爲砲撃を開始した。一彈又一彈土砂材料を中天に舞ひあげながら要點を破壊したが敵の砲兵亦之に應戦し彼我の砲戦は刻一刻激烈となつた。我が第一線部隊の進出に伴ひ敵の各種銃砲は要所要所の稜線に射撃準備を完了しありて疾風迅雷の猛射を浴びせて來た。されど所屬中隊は地形を利用し隊形の選擇を巧にし所命の攻撃準備位置に就いた。所屬中隊は大隊の右第一線所屬小隊は中隊の最右翼に展開し午後二時を期して攻撃前進に移つた。然るに長城主陣地の前方に設けある(ニ)火點の機關銃は物凄き火焰を吐きつつ我が第一線を猛射し更に其の西方地區に突如機關銃現出して我を側射し遺憾ながら

我が攻撃前進は停頓するに至つた。此の時我が機關銃及擲彈筒は全力を擧げて之が撲滅に勉め氏等は之と連繫して一擧身を挺し(ニ)火點に突入して之を撲滅し以て第一線の進出を容易ならしめた。夕刻頃より降り出した雨は漸次暴風雨と化し全身づぶぬれとなつたが氏は毫も意に介せず午後七時突撃の合圖と共に(ハ)火點に向ひ果敢に突入して長城線を占領した。然れども敵は長城線南方の諸高地に設けある幾つかの火點を頑強に死守して居た。所屬中隊長は機を失せず中隊主力



を以て稜線を傳はつて南方の火點に迫り氏の小隊は闇黒の谷を越えて敵の左側に肉薄し午後八時敵前三十米の外壕近く進出した。守兵約四十名必死の猛射を浴びせて来たが中隊は猛然として突入した。此の時氏は鬼神の如き早業を以て敵兵三名を血祭にあげ逝ぐる敵を追ひ小隊主力と共に其の後方高地にある一軒家に突入して之を占領した。此の時突如一大爆音と共に敵の仕かけありし集團地雷爆發せる爲氏は小隊長以下十數名と共に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏等の尊き犠牲に依り所屬部隊は翌朝までに第三線陣地を完全に占領し爾後遠く萬全方向に敗敵を猛追するに至つた。

氏は郷に在りては孝行息子の名聲高く軍に従ひては一意上官の命令に従ひ任務の存する處生死を超越して勇往邁進し戦鬪の各期に互り克く戦機に投じて豪勇果敢以て戦果の獲得を確實ならしめた。寔に是皇軍歩兵の本領を發揮せるものと謂ふべく又軍民の鑑と稱すべきである。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛惜哀悼を禁じ得ずと雖も氏の功績は皇軍戦史に輝きて芳名は後世に轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高田 廣志

### 輕機關銃手奮戦力圖圍河村の一戦に散る

氏は岡山縣後月郡明治村の人にして父を仙吉母をキタノの云ひ大正四年十二月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚眞面目にして孝心深く頗る家業に勤勉所謂篤農家にして居村の模範青年であつた。昭和五年三月明治小學校高等科を卒

業其の後は農業に従事し傍同七年四月青年訓練所に入り同十一年十一月青年學校を卒業した。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來一意軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや南雲部隊第九中隊に屬し輕機關銃三番彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は戰雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克

く其の任を完うした。次で七月二十六日早朝所屬部隊は唐山驛を出發列車に依り午後十一時黃村驛に下車し南苑を攻撃すべく中隊は其の尖兵中隊となり二十七日午後零時五十分黃村を出發部隊の最先頭に在りて前進を開始した。此の日天氣晴朗無風にして氣温百四十度に達し炎熱灼くが如く而も高粱茂る間道を南苑に向つて前進した。

途中斥候の報告に依り敵は行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り中隊は此の敵を攻撃する爲直ちに第一第二小隊を第一線に展開し攻撃準備を整へた。敵は堅固に陣地を構築し其の陣地前には深き胸にも達する水濠を繞らし重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗す



べく準備してゐた。中隊が愈々攻撃前進を起すや文餘の高梁連續し我が戦場行動は頗る困難なりしが氏は火線分隊内にありて有ゆる困難を物ともせず雨下する敵弾を冒して分隊長指揮下に前進又前進して勇敢に敵に近接し中隊が午後二時三十分より戦鬪を開始するや一層熾烈なる敵火の下彈藥補充に活躍奮闘し輕機の猛射撃に聊かも支障なからしめ以て其の威力を遺憾なく發揮せしめた。かくして躍進を重ね敵陣地前四百米附近に達するや射手たる竹田一等兵は遂に戦死した。氏は



直ちに之に代りて射手となり敵の猛火に屈せず我が前進を最も惜ましつつある敵の機關銃に猛射を加へて之を制壓し以て小隊の前進を容易ならしめ續いて益々躍進迫し突撃距離に達するや其の火力を最高度に發揚して突撃を準備し小隊愈々其の援助射撃下に突入するや續いて前線に進出し其の後方陣地の敵に對し猛射中無敵彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲により敵に多大の損害を與へて午後七時にはさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏郷に在るや孝子にして篤農模範青年と謂はれ其の戦陣に臨むや彈藥手として將た又射手として奮戦力闘輕機關銃の威力を發揚して遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一道一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戦日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戦玉碎は百戦功なき瓦全に優る。團河村の一戦に奮戦玉碎して以て開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高橋 寛 治

#### 忠孝兩全の勇士津浦線に奮戦し遂に安仁街激戦の華と散る

氏は鳥取縣日野郡山上村の人にして亡父を勇三郎母をとときと云ひ大正五年一月十四日に生れ未だ獨身であつた。性温厚

著實にして不屈不撓の氣概を有し一家の中堅となり病弱の父を扶けて家業に精勵し朝夕父を慰めて孝養到らざるなく昭和十年父歿するや村人皆泣いて氏に同情を寄せた。されど氏は悲歎の中にも母を勵まし慰め雄々しき決意を以て家業に奮勵して居た。氏は昭和三年三月山上尋常小學校を卒業し同五年三月山上農業補習學校第一部本科の課程を卒業し昭和十一年三月山上農業青年學校研究科を卒業した。氏の生家は以上の學校所在地より約二里の僻地に在つたが氏は風雪を冒して通

學し成績常に群を擡んで、他生の模範となり又日々の修養を怠らず其の天性の美德を愈々長成するに至つた。昭和十二年一月徴兵として松江歩兵聯隊へ入營し輕機關銃要員として教育を受け熱心勉勵良成績を擧げて居た。

支那事變起るや間もなく中井部隊揚井中隊に編入せられ第一小隊輕機關銃分隊の彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し八月下旬二堡王口鎮の敵陣地を撃破し九月三日以來夏庄燒密盆並に劉莊の各戦鬪に参加し馬廠本陣地の總攻撃に方りては所屬部隊は兵團主力より離隔し北趙扶鎮東辛庄及南趙扶鎮方面の敵陣地を席卷して主力方面の戦鬪を極めて有利に進展せしめた。氏は其の間殆ど不眠不休泥土と高粱の障礙に屈せず粗惡なる給養に堪え敵彈雨飛の中に毅然として分隊長の意圖を體して機敏に彈藥を補充し以て輕機關銃の威力を最高度に發揚し中隊の戦勝に寄與する處甚大であつた。

九月十三日より同月二十六日にかけては滄州の會戦に参加し特に小劉金庄及李家碼頭の戦鬪に於ては熾烈なる敵彈下に

